

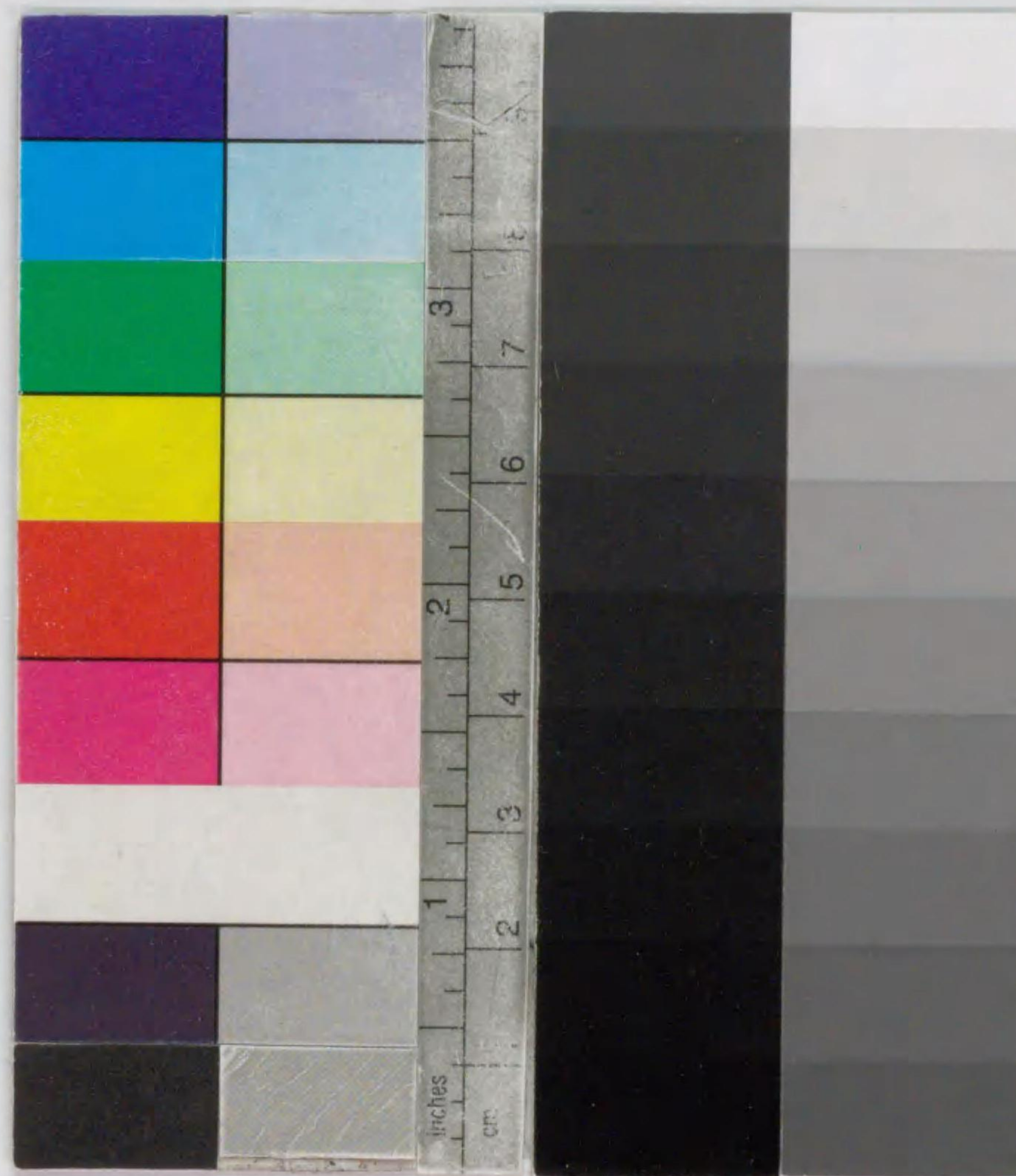
536-368

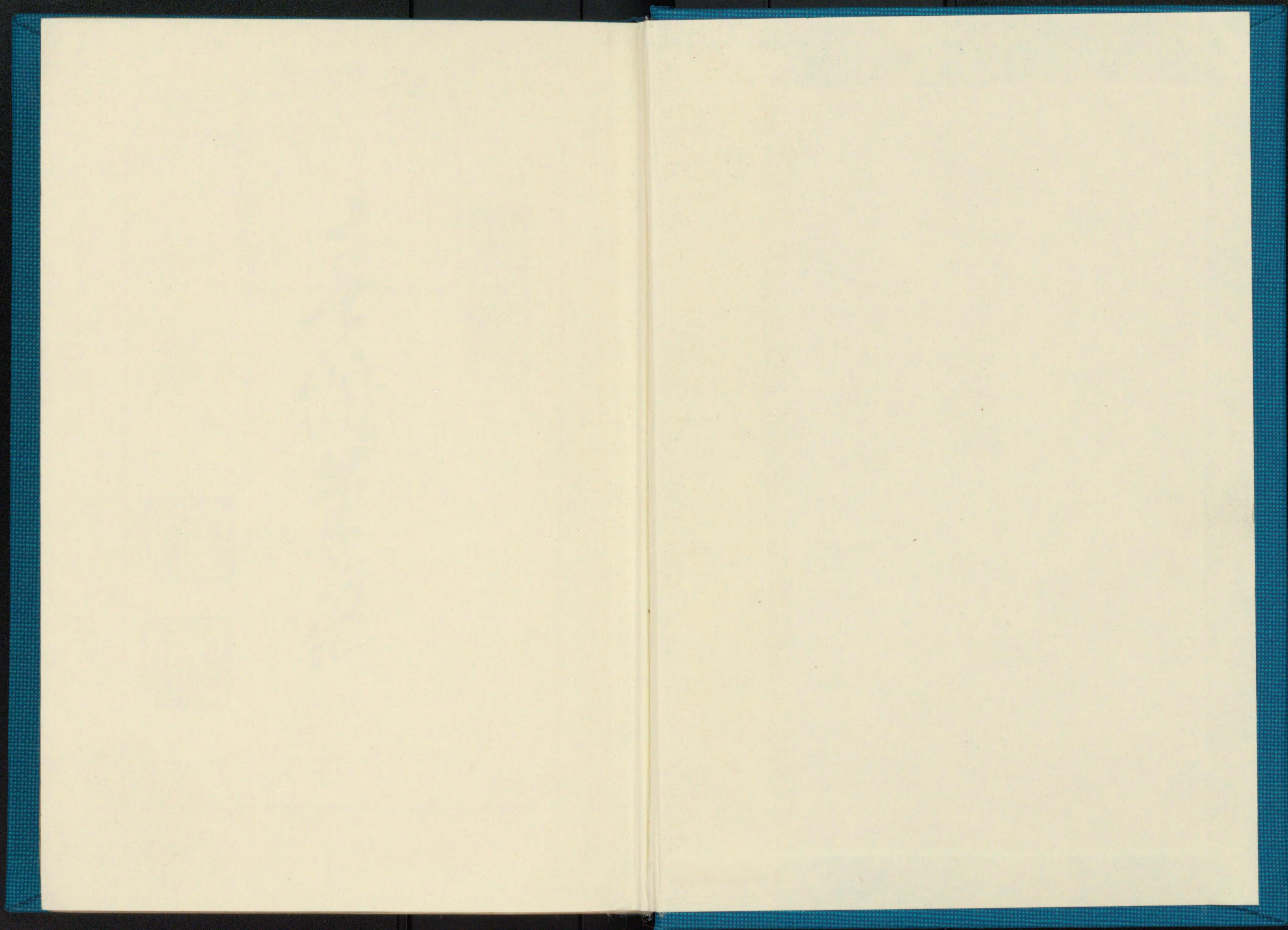


1200501500245

536

368





卜二 4F-16



李城萃海



はしがき

漫興に驅られて時に閒筆を弄し、雜録を作ることが多年私の習癖で、毎年、六七冊の隨筆が出来る。無益の事と思ふが、習癖は容易に悛まらぬ。時には獨り自ら嘲けることもあり、午睡を貪るに比すれば優る、と強ひて理窟をつけて見たりもする。私の平生を知つてゐる友人に、いつぞや、折角書いたものを還魂紙料にするのも惜しいではないか、取捨して版にしてはどうかと勧められたので、先づ上版を試みたのが「隨筆頼山陽」で、「春城隨筆」、「隨筆春城六種」と相踵ぎ、毎年、一冊の隨筆を出

すのが幾んど近年の例となつてゐる。實は、勉めて作るのではなく、日々の偶録がおのづから之を作すのだから、一向纏まりのつかない、お恥かしいものである。今度のも、偶然前と同じく、六篇から成り立つてゐる。則ち「人物雜觀」「明治初頭文壇の回顧」「烟霞游記」「漫興偶録」「車上縦談」「百道樂」が篇目で、前のと別つ爲めに「春城筆語」の書名を命じた。實は、記事の七八分は、昨年、震災に壞れた家を改造するとて、半歳餘り假寓に在つた折の執筆に係るから、私としては、弊屋復興の記念にしたいと思ふ。

昭和三年戊辰七月牛込の僑居に於て

春城識す

春城筆語 目次

第一 人物雜觀

- 一 趣味の人田中青山伯……………一
- 二 忘れられた一人物名和緩氏……………一四
- 三 幕末の犠牲靜寛院宮……………二〇
- 四 遁竄中の木戸侯……………四〇
- 五 吉田東伍博士を憶ふ……………四九
- 六 杏林の明星野口英世博士……………五五
- 七 畫家渡邊省亭の起身談……………六四
- 八 隠れた畫家長井雲坪の事蹟……………七六
- 九 頼山陽は何故に人氣があるか……………八六

附 山陽の逸事數則……………一〇三

第二 明治初頭文壇の回顧……………一〇九

- 一 坪内逍遙氏……………一〇九
- 二 尾崎紅葉氏……………一一三
- 三 撫松思軒櫻痴露伴諸家……………一二七

第三 烟霞游記……………一三五

- 一 烈風と戦ひつゝ、富士に登るの記……………一五七
- 二 淺間山跋涉の記……………一六五
- 三 白雲金洞探檢の記……………一六八
- 四 白帝城と木曾川の奇勝……………一七六
- 五 十和田湖と溪流美……………一八〇

- 六 大隈老侯に随つて三谿園を訪ふの記……………一八六
- 七 加治川堤上觀櫻の記……………二〇一

第四 漫興偶錄……………二〇五

- 一 讀書八境……………二〇五
- 二 今……………二一一
- 三 田園の趣味……………二一六
- 四 僧房生活……………二二四
- 五 露地生活……………二二七
- 六 流行と女裝……………二三三
- 七 扇子……………二四二
- 八 雪の思ひ出……………二四九
- 九 醫藥としての水……………二六〇

一〇 繪はがき禮讚……………二六七

一一 牧野子爵家の犬……………二七九

一二 印人の習癖……………二八三

〇三 古木屋……………二八六

一四 日本料理に就て……………二九〇

一五 山 葵……………二九九

一六 愛玉子……………三〇三

一七 鍵と錠……………三〇四

一八 得月樓の追憶……………三一四

一九 藝妓の垢すり……………三一〇

二〇 赤十字……………三二三

二二 遼東半嶋還附立會の挿話……………三三五

第五 車 上 縦 談

一 侯爵朴泳孝の贈詩……………三三八

二 日本のレニン……………三三〇

三 大量趣味……………三三三

四 長田秋濤……………三三七

五 赤龍子……………三四〇

六 酒と下物……………三四一

七 節分の豆料理……………三四六

八 容貌毀傷の損害……………三四八

九 いびきと睡眠……………三五〇

一〇 俳客雪人……………三五四

一一 俳味ある放翁の詩……………三五五

第六 百道樂

一 土木	三二	一二 紙	三六	二三 古瓦	三四
二 寺社	三三	一三 印	三六	二四 古鏡	三四
三 慈善	三三	一四 書畫	三九	二五 古錢	三五
四 任俠	三三	一五 古筆	三〇	二六 貨幣	三五
五 茶器	三三	一六 古文書	三一	二七 札	三五
六 陶瓷器	三四	一七 曆	三一	二八 寶石	三六
七 香	三五	一八 古簡	三一	二九 古銅器	三七
八 書物	三五	一九 反故	三一	三〇 佛像	三七
九 經卷	三五	二〇 短冊	三一	三一 佛器	三七
一〇 硯	三五	二一 法帖	三三	三二 古鈴	三八
一一 筆	三五	二二 拓本	三三	三三 刀劍	三八

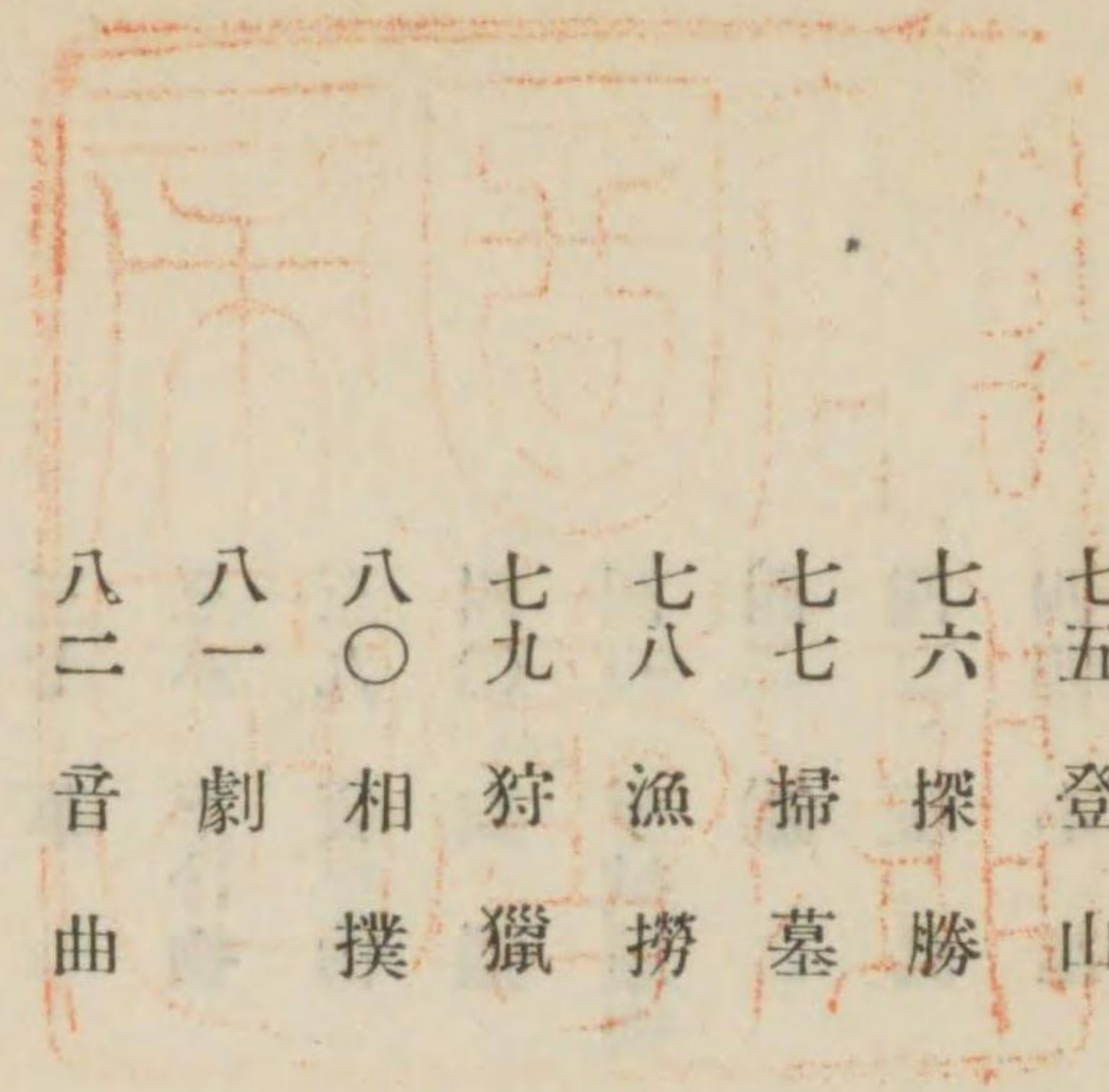
三四 時計	三九	四七 切支丹物	三六	六〇 納札	三二
三五 量器	三〇	四八 江戸趣味	三六	六一 繪葉書	三三
三六 古裂	三〇	四九 古材	三六	六二 筥	三三
三七 革	三一	五〇 竹器	三七	六三 墨斗	三三
三八 下け物	三一	五一 石	三七	六四 瓢	三四
三九 袋物	三二	五二 石燈籠	三七	六五 盃	三四
四〇 衣類	三三	五三 籠	三八	六六 扇	三五
四一 手拭履物	三三	五四 烟火戲	三八	六七 團扇	三五
四二 雜	三四	五五 スポーツ	三九	六八 發掘物	三五
四三 玩具	三四	五六 電氣	三〇	六九 博物本艸	三六
四四 小品	三五	五七 寫真	三〇	七〇 烟草	三六
四五 記念品	三五	五八 ポスター	三一	七一 菓子	三六
四六 阿蘭陀物	三五	五九 郵便切手	三一	七二 珍奇	三九

目次

七三	冒険	四〇	八六	手工	四六	九九	寄席見世物	四三
七四	探奇	四一	八七	十二支	四六	一〇〇	病的道樂	四三
七五	登山	四二	八八	福神	四七			
七六	探勝	四三	八九	生殖研究	四八			
七七	掃墓	四三	九〇	遊里物	四八			
七八	漁撈	四三	九一	春畫	四八			
七九	狩獵	四三	九二	浮世繪	四九			
八〇	相撲	四三	九三	勝負事	四九			
八一	劇	四四	九四	悪喰ひ	四九			
八二	音曲	四四	九五	飲料	四〇			
八三	假面	四五	九六	飼禽	四一			
八四	出版	四五	九七	園藝	四二			
八五	番附	四六	九八	盆栽	四三			

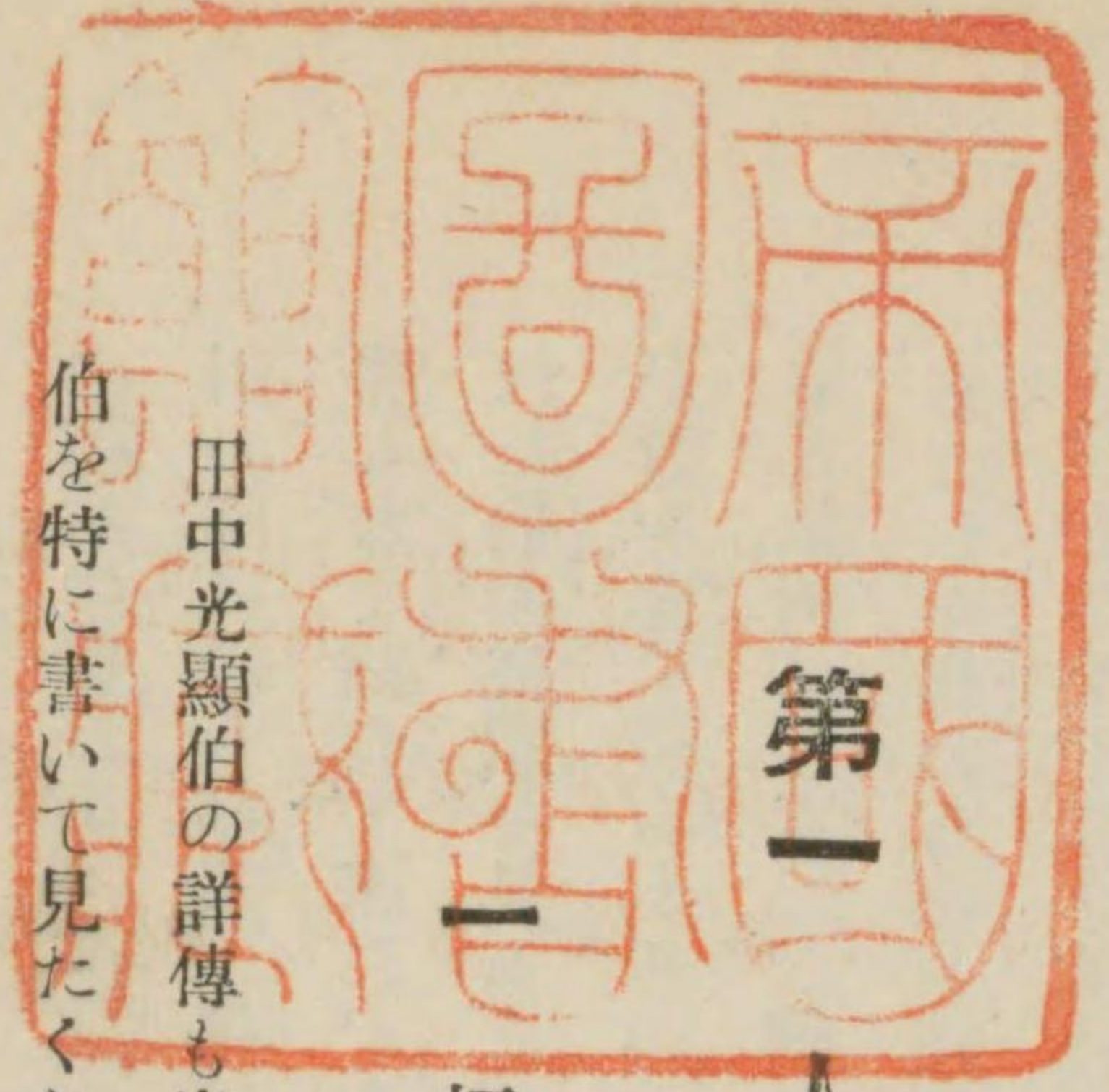
八

(了)



春城筆語

市島春城著



人物雜觀

趣味の人田中青山伯

田中光顯伯の詳傳も出てゐるのに、蛇足を加へる必要はないやうだが、私は趣味家としての伯を特に書いて見たくなつた。伯は人も知るごとく武弁の出身で、軍人として多くの閱歴を有つて居らるゝ。軍人氣質の人に趣味性が無いとは云はぬが、伯のごとく多趣味である人は少ないやうに思ふ。

人物雜觀

私が伯の交を辱うした發端は彼是二十年以前にも溯らねばならないが、未だ警款に接しない前にコンナことがあつた。私が早稻田大學の圖書館長であつた時、伯の珍藏の六朝寫本、皇侃ワツガンの禮記の義疏のコピーが作られてあると聞き、校長の名でその寄贈を請うた。その頃伯は小石川の邸に居られて、學校からは田圃を隔て、の附近であつた。館僕に手紙を持たせてやると、間もなく歸つて來た。その齎らして來たのはコピーではなく、一卷の原本で、それに添へられた伯の書狀を見ると、自分の珍藏ではあるが、自分の處に置くよりも、貴校の圖書館に置く方が處を得て居ると思ふから寄贈するとあつたので、私は意外のことに驚き且つ喜んで、伯の襟度が如何にも寛で、物に執着の無いのに敬服した。驚喜といふ言葉はあるにしても、誇張でなくこれを用ゐる場合は極めて稀なものであるが、私はこの時ばかりは眞に驚喜したのである。これが今早稻田の寶物となつてゐる。これは六朝時代の皇侃の高足鄭灼の自著自筆で、曾て光明皇后のお手許本であつたことは「内家私印」の印記が卷末に押してあるので分る。勿論國寶に値するものである。

此事があつて幾年か後に、私は伊豆の長岡に高田博士が其頃構へてゐた別莊を訪れた。丁度其頃伯は博士の別莊から二三軒隔つた處に別業——もと久保扶桑氏の有であつた——を有つて居られて、博士方へ訪ねて來られたから、私は伯に始めてお目に懸り、先年寄贈の禮を陳べ、こゝに端なく圖書の趣味談が始まつて、高田博士を傍聽人として、二人の間に二時間許り圖書談を交換したが、伯は圖書にも造詣が深いことを知つた。此談話中に、伯は、嘗て天平以降各時代の古文書を集めたことがある。それは今猶ほ家に在るが、これも早稻田へ寄贈すると云はれたので、私は重ねての厚意を感謝し、早大には斯様なものが一切ないから、欲しいと思ひながら得る手段が無かつたのに、誠に仕合せであるというた。此文書は二十通からあつて、これも亦國寶に値するものである。私は再度の賜物を得て頗る満足し、決して此上欲望を抱いたのでなかつたが、フト伯の藏本に六朝の原本玉篇のあることを思ひ浮べて、あれは何うなりましてと問ふと、伯は言下に、成る程、あれも早稻田に寄贈すべきものだと言はれたので、餘りの意外に亦驚喜の二字を繰り返さざるを得無かつた。これが圖書界の至寶であることは言ふ迄もない。伯が物惜しみをされることが愈々分つた。そして一旦約された事は直ちに實行される。この寄贈を約された二點は岩淵の別莊にあるから、後日送ると云はれたが、私が兩三日の後東

京へ戻ると、間もなく到達した。伯が如何に約束を守るに嚴であるかにも亦敬服せざるを得無かつた。

伯に面した翌日、招かれて博士と共に伯の別荘を訪問した。前日の禮を陳べて歸る積であつたのだが、午餐の饗を受けたので、種々の談を聽聞するの機會を得た。談話の内には、伯が維新の當初戸籍頭であつた際の事などは興味を感じたが、爰には専ら伯の刀劍談を録する。伯は斯道の鑑賞家として人も許す一大權威である。

伯の刀劍談の起首は正宗論であつた。相州物では人は多く正宗を稱するけれども、確かなものが甚だ少ないので、其作品を月旦することが出来ない。要するに相州物は切れるが特徴で、士官以下の佩用に適するが、將に將たる人の佩刀は、切れるばかりでよいとは言はれぬ。どうしても名刀の製作は上國にある。そして時代は一條帝の昔に溯らねばならぬ。即ち源平時代である。源平兩家の寶刀に就ては、俗間でも其名を知つてゐる位だが、事實名刀であつて、將に將たる人の佩用に足る名刀は、あの時代上國に最も多く作られた。全體將に將たる人は馬上の人であるから、刀は長尺ならざるを得ぬ。長尺には重量が伴ふ不便がある。それを避けて軽くす

ると折れ易いから、鍛鍊は極度の精を極めねばならぬ。その上よく切れねばならぬが、尙ほ其上にヤキやニホヒも上品であらねば、將に將たる人の佩用に適する名刀と云へないから、歩卒の用ゐるものとは大いに趣を異にする、と語られた。

品位を鑑賞の奥意とすることは、書畫や骨董などでも同一で、窮極これに歸着する。私は刀劍趣味には全くの門外漢であるけれども、伯の一場の談話を傾聽して大いに領かざるを得なかつた。

伯の刀劍趣味は若い頃から既にあつて、鑑識も早く堂に入つてゐたと思はる。其譯は、浪人時代既に名刀を佩用してゐて、始めて高杉晋作に面會した時、その所望する所となり、割愛を餘儀なくされたといふ伯の挿話に徴しても分る。明治大帝には二度まで名刀を獻じて、その二振とも御常用の光榮に浴したことや、岩崎彌之助氏を同趣味の友に引き入れん爲め、第一の愛重の刀を割愛したことなど、伯の刀劍に關する經歷は少なからずあるが、今はその要を擧げるとに止める。

伯の古書に對する趣味に就ては、既に冒頭にも云うたが、尙ほこゝに一二の言ふべきことが

ある。伯は洪海のごとき内府本の徒らに埋没してゐるのを慨し、嘗て希観の本の識語を収録して、「古芸餘香」と題する十數冊の寫本を作られたことがある。其轉寫の本がいくばく流布もしてゐるが、頗る好書家の参考となるものである。伯は又古寫經の鑑賞に没頭されたことがあつた。それが他人の手に移ると聞いたから、是非一覽したいと思つて岩淵の別莊に伯をお訪ねした時、拜觀を請うて許された。伯は其時に、私の處へいろ／＼の人が來るが、古經を見たい、と所望したものは君の外に無い、と云はれて二十巻ばかり持出されたのを見ると、流石に逸品揃で古經の尤も粹を抜いたもので、紺紙や地模様のあるやうなものは好まないであつて、どれを見ても高雅なもので、同じ聖武帝、光明皇后の願經でも、普通あるものとは選を異にしてゐた。和銅經もあれば白鳳經も見受けた。桓武帝の皇女の願經などは珍らしいものとして今も猶ほ記憶に存してゐる。伯は又長い間古版本をも蒐集され、此部類にも富んで居られたが、其中に天草版アマクサの太平記のやうな希観のものもあつた。

尙ほ圖書關係の事項で逸す可からざることは、書肆に命じて明治大帝の御集數卷を出版されたことがある。又正倉院の御物を限なく版にして「東瀛珠光」と名づけて、今も流布してゐる。

此等のものを出版することは今自由になつてゐるけれども、伯の企は早い頃であつて、この道を拓いた人として伯を忘れてはならぬ。要するに此等も皆伯の趣味の發露と云はねばならぬ。

伯は又和歌に長じ、書を能くし、兼ねて漢詩に達して居らるゝ。なか／＼謙遜の人で、歌書を請うても容易に諾されぬ。是非人に寄せねばならぬ時は、電信に依つてせらるゝが常例となつてゐる。私に寄せられた和歌は、私が早稻田の圖書館長を罷めて隱退したと聽かれた時の作で、それは左の通りである。

愛で、守る人しあらねば千代の書チノノシ

しみのすみかとなりやはてなむ

それが自筆であるから、私は記念の爲め幅として珍藏してゐる。

私が最後に且つ多少委しく述べて見たいと思ふのは伯の作庭に就ての趣味である。伯は此點に深い趣味を有たれ、亦巧者であらるゝ。曾て本邸であつた、小石川の芭蕉庵の舊址を始めとし、東海道に於ける二莊、岩淵と蒲原の、その何れもが大經營であつて、共に天下の名園とするに足るものである。

小石川の、本邸であつた處へは終に往つたことはないが、其庭園の或る部分は外部から窺ひ得らる、やうになつてゐたので、誰れも知る通り、茂林修竹、幽雅の趣が漲り、古くから名所の一に數へられてゐた。建築も御殿を以て稱するほどの壯大のものであつた。

岩淵の別墅は山を背にして邸宅を築き、二萬坪に垂んとする大地域を庭園とし又果樹園として、それが富士川に臨んでゐる。果樹栽培の園丁の爲めに三々五々農舎が點綴されてゐるので、宛然一大部落の觀がある。

山より鐵管で水を引き、それが先づ伯の書齋の前の池に落ち、淙々聲を發してうづまいてゐるのも心地がよい。その水が庭の一隅の勾配の急な所に導かれて、段々に流れて行くのであるが、巧みに樹木があしらはれてゐるので、外部からは唯鬱蒼たる林を見るのみで中の様子は皆目想像もつかないが、それに入つて見ると、さながら仙境に遊ぶの思があつて、勾配を利用して幾つかの瀧があり、亭舎があつて、飛石の外には縦横に水が流れてゐたり、水車があつて米を搗いたりしてゐて、作庭の秘術は幾んどこゝに悉されてゐるかに思はれた。外面からは何も見えず、入つて見ると内容の豊富に驚くのは恐らく伯の意匠の在る所で、又伯の性格もほのめく

やうに思はれた。

水の利用はこれに止まらず、立關から通用門に至るまで、約半町ばかりの、勾配ある歩道に沿ふ溝へ此水が導かれて、潺湲聲を放つて奔つてゐる。自分は立關に入るに方り、この趣味ある歩道を通過して、先づ水の利用の妙に驚かされた。

平地に於ける庭園は滿目松樹で、それが在來松林であつた處に宅を建てたかの如く、自然そのまゝで、どうしても畑地に松を移し植ゑたと思はれぬ程である。林間には雜草が一杯に茂つて、雅趣ある塔などがあしらはれてゐるが、それも故ららしくなく如何にも折合つてゐる。そして叢をなす秋草が縁を壓する許りに座敷近く茂つてゐて、野趣横溢、黄金の氣はどこを尋ねても微塵もないのに少なからず感服した。

伯は案内しながら語られた。自分は茶人の心得がないから我流の作庭で、茶人の式にはかなつてゐないであらう、と云はれたに對し、私は、普通茶人の作る庭は猫額大のもので、趣向を凝らしたと云うても高の知れたこと、この大庭園を人爲と思へぬやうに自然そのまゝに作られた伎倆は、到底茶人輩の及ぶ所でないと言つた。伯は莞爾として、拙宅へ訪ひ來る人は、普請

を褒めそやすが、庭を見てくれる人はない。實は普請を褒めらるゝのは本意でないのだ。この庭の野趣ある處に君の目の留まつたのは自分の仕合せだなど、云はれて、果樹園をも限なく案内された。

蒲原の莊は近年營まれたものである。此處は岩淵に隣る停車場所在の地で、前面海で背後に一帶の山がある。その山から水が流れて、寶珠澤、狸澤などの溪をなしてゐる。伯の地を相されたのはこの二澤のある所で、地域は水源の瀧の落下する山上にまで追んでゐる。およそ作庭に要するものは水であるから、先づ水を捜してそれを作庭の基本とするのが常である。伯が此地を相さるゝに就ても、恐らく先づ瀧を捜し溪流を見出されたので、こゝだと決せられたのであらう。如何にも自然の溪流は此莊の重なる風致をなしてゐる。溪流に沿うて帯のごとき細徑が廻遷として山にまで追んで、瀧のある所は山が劈けてゐて、狭い山の間から飛瀑が見える。多分此の飛泉の侵蝕作用でこの山が劈けたのであらう。この處に水を一應湊合して濾過する處がある。それは地下に伏せられて、其上に八疊敷の四阿アツマヤが立つてゐる。伯は笑ひながら、狸の擧丸の廣さに因んでこれを作つたと言はれ、それに入つて休憩をした。すべて園内は鬱樹で滿

ち充ちてゐるので、深山幽谷の趣きがある。殊に地形のおもしろさに感じたのは、溪流の通ずる平地ばかりでなく、一方に高い丘陵のあることだ。こゝは海を見晴らす勝區であるから、是非丘陵があらねばならぬ。流石に伯の相地は届いたもので、最も複雑な地形を選ばれた。丘陵に登つて見ると、地形が如何にも面白く、要衝々々には風致ある亭榭がいくつとなく設けられ、すべて海面の風光を見晴らすやうに出來てゐる。その亭榭も數寄を極めたもので、何れも小家族の住み得るやうに何もかも備つて居り、決して粗略のものでないが、それが五六棟を數へる程あつて、それづくに庭も附帶し、小石川の舊邸にあつたと同式の茶室のあるのも認められた。

此地は海濱であるから、海の眺めは勿論よいのだが、三保の松原を横手に望む地形であるから、申し分のない處である。此莊の地積は三千餘坪で、岩淵のに較べると規模は小であるが、山海の風趣は寧ろこゝが優つてゐるかに思はれた。

伯が地區を選ぶの妙は、莊に隣つて古い神社のあるのを利用されたことである。此神社の境内には天を摩する大樹が幾十本もあつて、晝も物凄いやうであるが、それが背後の山と共に此邸に大なる風致を添へてゐることも、蒲原の莊の一勝に數へねばならぬ。

以上庭園の略記は萬が一も髣髴し得ないけれども、伯が往くとして可ならざるなき趣味才を有つてゐる、ことを見るには此略叙でも足りるであらう。

全體宮内省には一種の作庭式であつて、多くの華族が宮内省の技師に頼んで作つた庭は、一目して分る。その式が強ちわるいでもないが、何となく型に嵌つて面白くない。伯は宮内省に長い間奉仕もされ、これ等の技師も多分伯の恩顧を蒙つてゐるを思ふけれども、伯の作庭は全く伯の方寸から出たので、全く獨創で、些しもコダハリの無い處に私は最も敬服を拂ふものである。

伯は八秩を越えた高齢であらる、けれども、六十臺に見えるほど矍鑠として、庭園を案内して高い處へ登らる、時は、私など跟いて行けぬほど達者な歩武である。伯は人に接するに禮儀が正しく、私などが訪問しても袴羽織で必らず玄關に迎へらる、。又訪問の時刻が分つて居れば、必らず柝車を停車場まで出して迎へらる、が例である。伯は又直截の人で、何でもバキバキ思ふことは語りもし行ひもされる。それは確かに伯の美德であるのだが、混濁の世の中には、それが動もすると誤解を醸して、伯が迷惑されることも往々にしてあるのは、全くお氣の毒に堪へない。併しそれ等は勿論伯を軽重するに足らぬ。

私は伯の政治經歷、殊に君側に奉仕された長い間の經歷について知つてゐることも少くないが、私は今趣味家としての伯を談ずるに過ぎないのであるから、それ等には言及しない。最後に閣筆に臨み、漏らし難い一事がある。伯は晩年維新前後國難に當つた多くの志士の墨蹟を集められた。其數は恐らく千餘に達したであらう。それを裝潢したり箱を作つたりされた勞と費も決して少なくないと思ふが、例の、處を選んで置くの主義で、宮内省へも獻ぜられ、又吾が早稻田大學にも寄贈された。其數は實に三百通の多きに達し、番外には高貴の御宸翰があり、陛下御料の御衣オシヅなどもあつて、毎々の伯の厚意に對し、吾々は眞に謝するの辭なきに困んでゐる。併しこれ等の墨蹟は教化の大資料であるから、吾々は其志士の忌辰毎にこれを一室に掲げて、恭しく香華を獻じ、闔校のものに閱覽せしめて、伯の厚志を空しうせないやうに力めて、せめてもの謝恩と思つてゐる。

二 忘れられた一人物名和緩氏

維新前後國事に執掌して功勞あり、不幸にして早く病歿し、今では其名が埋もれて、幾んど知る人もないやうな氣の毒な人は少なからずある。私の郷里越後の水原スネダラといふ所には、最初越後府が置かれ、後に水原縣が置かれた。(新潟縣の置かれたのはその後である)越後府の長官として前原一誠の來た事は拙著「春城隨筆六種」に録して置いたが、水原縣の長官としては名和緩ユルムといふ人が來た。確か官名は縣參事であつたやうに思ふ。此人などは、若死をせなんだら無論臺閣に列した人であらうと思ふのに、三十六歳で米國に客死した。此人は長州の人であるから、長州では知つてゐる人もあらうが、一般からは忘れられてゐる人物である。私は此人に多少の緣故があるから時々思ひ出すが、其人の經歷が一向わからず、つい此頃に至つた。然るに或る人が毛利家に就て略歴を調べてくれたので始めてその事蹟を知ることが出來、私は骨肉の履歴を知り得たかのやうに喜んだ。實は此人と私は師弟の關係があるのである。私は當時七八

歳の小兒であつたが、名和氏が私の宅へ來られた時に、父から見習ひに私を毎日長官の寓所に通はせたいと依頼があつた爲めか、長官から求められたのか、そこらの處はよくわからんが、兎に角毎日通つたものである。名和氏は舊陣屋に寓して居られ、毎朝縣廳へ出勤され、午後歸らるゝと、私に本を教へられた。其頃私は「四書」の素讀が濟んで、「五經」に手をかけ、「詩經」の素讀を受けた様に記憶する。見習ひといつても給仕などをするでもなく、唯教はる計りで、菓子などを頂戴して夕刻家に歸るのが常であつた。私の外に誰れも本を教はりに來るものも無かつたことを思ふと、全く特別の事であつたと思はれる。名和氏は其頃二十臺位と見受けたが、三十を聊か越してゐることが今度分つた。優方ヤサガタの白哲の美男子で、如何にも溫厚に見える人であつた。素讀を受ける時は物やさしく懇切に教へられ、嘗て叱られたことなどは無かつた。小兒が時めく役人に對坐するのだから、いくら無心でも多少畏怖の情があるべきだが、些しもそんな氣が起らず、毎日楽しんで出かけた。今考へて見ると、可なり愛されたものと見える。幾十年の間、時に此人を想ひ起すのも、畢竟其故であるかとも思ふ。何にしても幼少の時であるから、直覺したことの外は記憶になく、深いことは一切分らないのであるが、氏の居室は十疊ば

かりで、それに四疊ばかりの隣室があつた。氏は此十疊を書齋とも寢室ともされてゐた。床には妙な幅が常に掲げられてゐた。それは多分氏の所藏品で、何か意味のあるものであらうと思ふが、繪は甲冑を着けた武將が生首ナツクビを腰に下けて馬に騎り長鎗を手にしてゐる圖で、生首からは鮮血が滴り、如何にも悽慘の氣の漲るものであつた。何故か他の幅とかけかへられたことはなく、いつも素讀を受ける時には此幅を一瞥したものである。長官の處へは餘り多くの來客も無かつたので、時々紙を展べて詩などを書かれ、後には蘭竹の畫を學ばれて、しきりに書かれた。其畫の手ほどきをした者は私の家に仕へた高橋耕雲といふ畫家であつた。此頃越後に來た大官連は多く妾などを蓄へたり、娼樓などへ通つたりするのが例であつたのに、此人にはそんなことは無かつたやうである。併し幼少の自分が斯く見たのは僻目ヒガメであつたかも知れんが、自分分は此點に於て感心な人だと信じてゐる。畢竟酒色を斥けた爲めに書畫で無聊を慰したのではあるまいか。非常に簡単な生活で、執事が一人、炊事の爲め老婆が一人ゐるに過ぎない。執事は二十歳位の藤井といふ人であつた。毎朝縣廳へ出勤さるゝ時には、此執事が桐の用箱を携へてお供をした。辨當持參であつたと思ふが、それも甚だ質素のもので、今時の大官の日常生活

とは雲泥の差があつた。縣廳といふは私の宗家の舊址で、その地形が城地のごとく高く築き上げられてある爲めに戊辰の戰に兵燹に罹つた。亂平いでこゝに越後府の役所が建設されたが、それが即ち後の水原縣廳で、名和氏はこゝへ日勤して政務を見たのである。自分は毎日名和氏の寓所の立關に屢々跪いて送迎したことを想ひ起す。

今度手に入つた略歴に據ると、氏は毛利家の老臣毛利出雲イツモの家來とあつて、毛利家の陪臣である。幼少から聰敏人に過ぎ、篤く道に志して四方に遊び、常に氣節を尙んで國事を慨した。文久二年には屢々京師に上つて主モツバら力を王事に盡し、同三年には藩の冤を雪がんと有志の徒を激勵し、大義の爲め死するは此時であると意氣大いに振ひ、其主出雲に請うて一小團を組織し、宣徳隊と號した。これが長藩唱義の嚆矢である。又國老と謀つて文武を講習するため尙義場をも設けた。此頃長藩には正俗二脈の議論があつて、俗論派は君側を圍み、その爲す所往々勤王の大義に悖り、藩主をして不臣の譏りあらしめたので、元治元年、藩老益田右衛門介等は之を憂ひ、君側を清めて君冤を雪ぎ、王室に干城たらんことを期し、尙義場、宣徳隊の人々を率ゐて京師に入つた。名和氏は言ふまでもなく、隊伍を率ゐた一人であつた。然るに反對派の氣焰

がなか／＼熾んで、遂に事が敗れたので、益々俗論黨は勢を得て正義の士を陥れた。名和氏も亦連坐して終身禁錮に處せられたのである。然るに時運到来、慶應元年には正論黨大いに起り、高杉晋作が崛起して遊撃軍を率る吉敷に陣を張つた時に、氏の禁錮を解いて軍の參謀たらしめた。名和氏に緩ユルの名のあるのは之を記念する爲めであつて、略歴には繩緩と改稱したとある。藩主より若干の俸を賜つたのも此年である。翌年幕兵が藩の四境を侵した時も、氏は遊撃軍の參謀として、小瀬川口に防戦して功があつた。明治の初頭には京師に入つて岩倉公に寓仕し、公を助けて王事に鞅掌し、終に維新政府に出仕することになり、明治二年八月、前原の後を承けて、水原縣の參事となつた。略歴には新潟縣參事となつてゐるけれども、新潟縣を置いたのは其後であつて誤つてゐる。氏は一年職に在つて、辭して四年米國に渡航し、専ら民法の學を修めたが、六年空しく志を齎らしてボストンで客死した。氏は晩年名を道一と改めた。享年僅かに三十六歳である。

私は以上の略歴に據り氏が長藩正義派の旗頭であることを知り、氏が高杉晋作、岩倉相公の帷幕の人であつたことを知り、又戎事を以て身を起した人であることをも知つた。併し氏は其體格相貌から見ても武人ではなく、寧ろ爲政家たるべき人と思はれた。氏が早く渡米して民法の學に志したのも、爲政家の素養を積まんとしたのであらう。或る書に米國に於ける我が公使館の書記官として渡米したとあつたが、多分書記官名義での遊學であつたのであらう。氏の地位は内地に於ては既に書記官以上であつたのだ。縣の參事と云へば、今の知事のやうなものであるけれども、其頃の參事は今の知事などよりも遙かに大なる人物であらねばならなかつた。幾んど大臣に次ぐ程のものであつた様に思ふ。私が大隈侯の薨後其家に藏する多くの書簡を調べた折に、圖らずも名和氏が侯に寄せた一簡を發見して少なからず興味を覺えた。其手簡は侯の訪問を謝したものであつて、越後へ赴任の期が迫つてゐることを云ひ、又當面の國事に對して多少の意見が陳べてあつた。この遺簡から推測しても參事の人物と位地が重かつたことが窺はる。若し壽を保つたならば、歸朝後必然臺閣に列したであらうに、惜しいことであつた。私が幼少の目で見た氏の體格と相貌は、長壽を保つには餘りにキャシャであつたやうに思はれた。私は六十年間謎のやうに此人の經歷を臆測した、それが始めてハッキリ分つて見ると、如何にも立派な經歷であるのに、一層追慕惋惜の情に堪へない。

三 幕末の犠牲 靜寛院宮

古今の歴史に珍らしくないことであるが、攻略結婚といふ一種の結婚が、東西何れの國に於ても往々にして行はるゝ。この結婚は愛を基礎としての結合ではなく、多くの場合愛を犠牲とするの結合であり、一種の悲劇である。國際的にも此の攻略結婚は無論しばしば繰返された。歐羅巴あたりの國々では、甲の國と乙の國の和親を圖る爲めに此の結婚が度々行はれた。日本の皇室と外國の主權者の間にはかゝることの行はれた例はないが、しかし封建時代に於ては、藩と藩の間に於て攻略結婚が度々行はれた。戰國時代には人質の意味で嫁した場合も少なくない。そして近世著明の例は、幕末に皇妹和宮が將軍家茂へ降嫁されたことである。

全體皇室から皇女の將軍へ降嫁された先例は絶対に無い譯ではない。乃ち正徳五年に靈元上皇の皇女八十宮が、七代將軍家繼の御臺所と御治定になつたことがある。是が皇女の將軍へ降嫁された唯一の先例であらう。然る處この七代將軍は翌年に薨去された爲に、遂にこの結婚は

成立たずに終つた。さういふ譯だから、皇室と將軍家の結婚は、全く和宮を以て始めとするのである。

和宮は仁孝天皇の第八の皇女にあらせられて、弘化三年五月に誕生になり、孝明天皇とは異腹の兄妹であらせらるゝ。父帝は和宮の誕生に先だち三ヶ月前に崩御になつたので、和宮は御父君を御存じないのである。御姉妹も多かつたが、段々御亡くなりになつた方々が多かつたので、孝明天皇の御妹としては此方計りお残りになつたので、殊に御親しみが深かつた。

此方が六歳の時に、有栖川家へ御縁付になる豫約が成立つて、有栖川家とは許婚の御間柄であつたのに、それが振り變つて、徳川將軍にお嫁きにならねばならぬ事になつた。それは當時の事情に於て已むを得ない政治上の意味から起つたのであるが、併し孝明天皇はさすがに妹君に對して、それをお求めになりかねた。又和宮も關東に降嫁のことが御心にそまなかつた。然るに到頭餘儀なくされて、所謂攻略結婚の犠牲になられたのである。

この攻略結婚は、所謂公武合體の爲めであつた。當時幕府の末期に當つて頗る世の中が紛糾した。幕府は追々衰運に傾き、一方に於ては、外國より種々の壓迫があり、國內には幕府を倒

す計畫が盛んに起り、尊王或は攘夷などといふ叫びが頻りに起つて、何時戦争が始まるか知れぬといふ危急の場合、之を救ふ事は何うしても公武合體を要するといふ一種の議論が起つて、その權略の犠牲となられたのが和宮である。女性としての進退、これほど辛いことはないので、全く悲惨の極である。當時和宮は、御年十六歳であらせられた。そしてその良人家茂將軍も同齡であつた。

元來關東と上方は、風俗習慣ともに種々異つてゐた。ことに禁裏御所の風儀と、武家の風儀とは、甚しく異つて居るわけである。單にその異つた風俗習慣の所へ縁付くといふことだけでも、なか／＼の苦痛であらねばならぬ。前にも云うた通り、當時は外國の壓迫もあつて、京都邊から考へると、關東には色々な毛唐人が横行して、や、もすると迫害を受けるかの如き感じもあつた位だ。其處へ纖弱い女性、殊に宮中深く立籠つてお育ちになつた金枝玉葉の女性が行かる、といふに就ては、女の情としても恐ろしかつたに相違なく、聖上も、その點を深く御軫念あらせられ、現にその事に就て左の如く仰せられてゐる。

外國人の横行する所へ、纖弱い女性はやりかねる。

と云はれ、それを以て徳川家へ對して、結婚を拒むの理由と爲された位である。

尙ほ當然のことではあるが、將軍家へ嫁がれては、その當時未亡人となつてゐた、先代將軍の奥方天璋院に對しては、母として御仕へにならねばならない。この天璋院は評判のやかましやであつたのである。故に普通の縁談の場合でも、なか／＼面倒なわけである。然るに、この公武合體の政略は徳川家を維持する權略であつたから、決して勤王家連には喜ばれなかつた。勿論當時の志士達は盛んに反對し、物情騒然、危険な状態であつた。かゝる面倒な場合において、和宮は降嫁を餘儀なくされた。人生かほどの悲哀は無いとも云ひ得るのである。

公武合體の政略結婚の行はる、迄の経緯を爰に委しく語ることは出来ないが、大體幕末當時の事情は、一時の安定を得る爲めに、己むを得なかつたのである。勿論之に就ては反對論もあり、賛成論もあつて、頗る紛々たるものがあつた。皇上も和宮も、關東からのこの希望を最初は御採用がなかつた。結局岩倉公が具體的の建議をされて、國家の爲めに己むを得ないといふ奏上が始めて皇上を動かし奉つた。この建議から、始めて宮中の問題となつたのである。

併し、和宮は猶ほ御同意がなかつた。皇上も和宮には頗る御遠慮があつたので、不同意なも

のを達^{たつ}てとも仰せかねて、或る時は僅かに二歳にならせらる、皇女を、和宮の代りに降嫁とまで御決意があつた位である。かくまでに皇上はいろ／＼の御心配があつたので、和宮も流石に兄君の一通りでない御軫念を思ひやられ、結局國の爲めに犠牲となるの大なる覺悟を爲されたのである。

かやうに大體は定まつたが、いよく御降嫁といふ迄にはなかく種々なる面倒があつた。帝室におかせられては、此の御降嫁の條件として、

幕府の求めには應ずるが、併し是非とも攘夷を實行せよ。

といふ、面倒な御注文が起つた。

又何時降嫁さる、といふ、その期日に就てもなかく面倒があつて、和宮の念願としては、どうか父帝の十七回忌を濟してから關東へ行きたい。

と仰せられた。即ち一年後に關東に下向りたいといふ御申出があつた。これは御無理もない事である。前にも申したやうに、和宮は御父帝の崩御後に御生れになつたわけであるから、殊にこの十七回忌を重く御考へになつてゐた。

どうしても京を去るに就ては、遠くもないこの大切な忌辰を経てからでなければ、孝道が立たぬ。

といふ考で、之を御申出になつたのである。

併し當時の形勢はなかく一年を待つことは到底出来ない事情であつて、幕府側では色々懇請をして時期を早めることに力めた。勿論懇請をするに就ては、朝廷からの御要求の攘夷は勅命通りに必らず爲るとの誓ひを立て、さて早く御降嫁を願ひたいと切に願ひ出た。そこで皇上も、一方に於ては、妹君の懇請を已むを得ずとされながら、一方に於ては、關東の切なる希望を已むを得ずとせられて、そこで御仲裁があつて、その御仲裁には和宮も強ひて御反對もなかりかねて、従ひになつた結果として幕府の希望が始めて届いたのである。

さて御降嫁といふ事が愈々決して、その京都御發程は十月廿一日、(文久元年)さうして十一月十五日に江戸着といふ旅程が定まつた。普通ならば東海道筋を經過さるべき筈であるが、東海道筋は頗る物騒で、勤王家が動もすれば道に宮を擁するといふが如き危険もあつたので、それを避ける爲めに、木曾街道を道筋とすることに定まつた。この木曾街道二十五日間といふ長い

旅程、はじめの旅で殊に御不本意である此高貴の女性の御旅情は、まことにお察し申上げるも愚かである。旅中に詠ませられた宮の御歌が三四残つてゐる。それを見ても、如何にこの羈旅の間に、屢々涙を催されたか、推し得らるゝのである。その歌は、

すみなれし都路出で、今日いく日急ぐもつらき東路のたび

思ひきや雲井の袂ぬぎかへてうき旅衣袖しぼるとは

旅衣ぬれまさりけりわたりゆく心も細き木曾のかけはし

落ちて行く身としりながら紅葉モミヂバの人なつかしく焦れこそすれ

かくて豫定の通りに、無事江戸へ着された。

江戸着後の事を云ふ前に、其夫と定められた家茂將軍の事に就ても、聊か申さねばならぬ。

將軍家茂は徳川家の大切な親類紀州家の生れで、十三代將軍家定の後を繼がれたのである。

前の將軍家定公は早く歿歿なられて、其夫人は未亡人となつてゐられたが、是が前に申した天璋院である。此夫人は名は篤子アツコと云うて島津家の一族島津忠剛の息女で、それが近衛家の養女となつて將軍家へ嫁がれたが、間もなく將軍は歿歿なられたのである。和宮が降嫁されて後僅

かに五年にしてその配偶を失はれた境遇とよく似てゐる。さうしてこの天璋院の性格も、なかなか男勝りの剛氣な女性で、頗る聰明でもあつた。それらの點に就ても、和宮とよく似た處があつた。此二人の女傑が、幕末の舞臺に、内面に大なる働きをなした。それらの事はこれから縷述する。

和宮が降嫁された時分の大奥には、種々なる衝突があつた。それはさもありさうな事である。

第一、前にも云うた通りに、上方風と江戸風が異つてゐる計りでなく、武家の風俗と禁廷の風俗も甚だ異つて居る。そこで和宮の降嫁の一條件として、京都から求められたのは、

いかにも風俗が異つてゐるから、どうか上方風の生活をさせる様にしてほしい。

といふことで、皇上からも特にお求めになつたわけであるが、なか／＼それが實際に行はれなかつた。その爲めに和宮は御輿入當時、いろ／＼な事について御苦心が多く、又御不自由が多かつた。

最初和宮が母として仕へるべき天璋院にお會ひになつた時、天璋院は廣い座敷の上座に三重の座布団を敷いて、傲然として其上に坐し、遙か下席に布団もなしに、和宮が坐られて、こゝ

に始めて姑に見えをされた。是は普通の身分では當然の禮であるが、皇家の息女としては、泣かんばかりの辛さであつたに違ひない。別してこの皇女に隨從して關東に下向した多數の侍女などとしては、如何にもそれが辛かつたに相違ない。又それが事實であつたと傳へられてゐる。そこでその様子が京都へ傳はると聖上は逆鱗があつて、一時はこの結婚が破綻にならんとする迄に至つたと云はれてゐる。當時皇室から幕府の未亡人を見れば、云はゞ臣下の如きものであつて、何でもないもの、如くに宮中では考へられてゐたのである。であるから、和宮が贈物として持參された品の如きも、書付には「天璋院へ」としてあつて、少しも敬語等はないといふ譯で、謂はゞ母たるべき人に對して、禮を缺いてゐた譯である。斯様な事は、幕府側から見ても快くなかつたらうが、京都の幕府に對する觀方は、因襲的にかくあつたのである。

その當時大奥にはいろ／＼な暗闘があつた。其暗闘は紀州派の女中と水戸派の女中との間に
行はれた。元來家茂將軍は紀州出の方であるから、それに屬する女中は、どうか和宮に御懷妊があつて欲しいと祈つたが、それに反して水戸派に於ては、どうか慶喜公を後の將軍にしたいといふ腹があるから、暗に和宮の御懷妊はなくて欲しいと祈つた。かやうな軋轢が自然に和宮と天璋院の間を疎隔したり、又紛糾せしめたりしたに相違ない。併し聰明な和宮は、何處迄も天璋院を母として尊敬せられ、夫の將軍に對しては勿論貞節を盡されて、琴瑟相和したと傳へられてゐる。

和宮は、初めの中こそ武家の風にならなかつたのであるが、後にはすっかり慣れて、何事も自ら制して質素を旨とし、錦や綾の着物を斥けて、粗末なる木綿の着物を常に着用されたと迄傳へられてゐる位で、追々と天璋院とも隔てのない間となられた。是も全く宮の御聰明によることである。

和宮と天璋院の間柄に就ては、いろ／＼なエピソードが傳はつてゐる。その中に可笑しい事の一つ、勝海舟翁が自ら筆録したものによつて、こゝに語らう。翁の筆録によると、初めは御間柄が悪かつた。其後翁の宅へ御兩所を御招きした時に、御膳を出した處が、兩方とも互に譲り合つておあがりにならぬ。給仕に出た者が、

大變で御座います。

と退いて來た。そこで翁が行つて見ると、互に給仕を仕合ふといふことの争ひが生じてゐる。

そこで翁は笑つて、

貴女方アタタガタは何をなさつてゐるのです。そんな詰らない讓合をなさるよりも、かうなさる方が宜しいでせう。つまり御櫃が一つだからそんな御争ひが出来るのだから、も一つ御櫃を差上げませう。そこで一つづ、側に御置きになつて、御互に、天璋院様は和宮様のを御盛りになり、和宮様は天璋院様のを御盛りになるといふことになされば、争ひがなくて済むでは御座いませんか。

と云つて、別に一つ御櫃を供へた。この裁きで御兩人とも、

安房アハは利口者だ。

と大笑をなされて、それから御間柄がよくなり、勝の家を御退出の時も、一つ馬車で仲善く御歸りになり、以後は萬端打解けて、御相談になつたと云はれてゐる。

和宮の徳操に就てはいろ／＼傳はつてゐる。是も海舟翁の書いた一節であるが、或る時天璋院、將軍、和宮の三方が、瀧御殿へ御成りになつた事がある。その時どうした事か、踏石にチヤンと天璋院と和宮の草履が並べてあつて、將軍のだけが踏石の下に置いてあつた。是は非常

な不敬とされた大失態で、かゝる事は當時なか／＼、八釜しかつたので、その失態の調べ沙汰でも起らうものなら罪人が出る程のことである。それを和宮が早くも見てとつて、自分の草履を下へ跳ね退けて其處を飛降り、御自身將軍の草履を取上げ、將軍に對し御辭儀を爲されたので、何事もなくて済んだ。斯様な取計ひを臨機に爲された事は、全く賢徳と聰明による事と云はねばならぬ。

又家茂將軍が大阪で亡くなられた時の事に就ても、海舟翁の記録がある。その遺骸を棺の中に納めるについて、いろ／＼の手廻の品物を調べて見ると、フト出て來たものは、和宮からの手紙であつた。何が書いてあるかと開いて見ると、これには附添つてゐた侍臣たちも皆吃驚した。その手紙の文面によつて和宮の御精神のいかにも凛乎たるものがあるには、何人も感嘆せざるを得なかつたのである。それは、

わらはも一旦徳川家に嫁した上は、徳川家の爲に生命を賭する覺悟。御歸りの早きを望むは一日千秋の思ひをなしますけれども、國の爲には凱旋を冀ひます。

といふ事が細々と書いてあつて、夫婦の間柄、並に和宮が、衷心徳川家の爲めに犠牲となるを

辭せぬといふ精神は、この手紙によつて始めて明かに幕臣に分つたものと見える。

尙又將軍が亡くなられて後、色々政局が紛糾して來て、或は勤王家達が和宮を奉じて、一騷動起さうと計畫した者もあり、頗る危い事だったが、和宮は泰然として居られ、少しもかゝる事に耳を御傾けにならぬ爲め、一向心配がなかつた。後に和宮が御隠れになる時も、

私の遺骸は、決して京都に葬つて貰ひたくない。是非徳川家の墓所に葬つてくれ。

といふ遺言であつた事も、海舟翁の記録にとゞめてある。

將軍の薨去は今言つた通りだが、和宮と將軍の永訣の端は、慶應元年五月十六日であつた。

將軍は長州征伐の爲めに江戸を發して大阪へ赴かれた。その江戸を發せらるゝ當日が永訣の端緒であつた。大阪へ赴かれてから、遂に江戸へ歸られず。翌慶應二年の夏、不幸旅行中に病にかゝられ、七月二日遂に薨ぜられたのである。和宮は夫君の病に一方ならず心を痛められ、増上寺クロホシジ黒本尊に願をかけ、毎日御百度を踏んで平癒を祈られた。さて愈々重態といふ事を聞かれました、斷斷ちをして、身を以て代りたいといふ祈願をかけられたが、天壽如何ともする能はず、薨去の報傳はると、宮は悲しみの餘り、直ちに縁なす黒髪を切り、弔歌と共にその髪を大阪に

送つて、棺中に納められたと傳へられてゐる。その時の御歌が二三残つてゐるが、如何にも夫婦間の愛情をあらはし、一讀斷腸の思ひあらしめる。

昭徳院殿御うせ給ひつるとき

三つせ川世の柵のなかりせば君もろともに渡らましものを

世の中の憂さてふ憂さを身一つに取り集めたる心地こそすれ

同じ頃帝より賜りたる御衣を召させ給ひて

着るとてもかひなかりけり唐衣錦も綾も君ありてこそ

將軍の亡くなられた其年が二十一歳、即ち和宮は同年であらるゝから、二十一の年に寡婦となられたのである。僅かに降嫁になつて五年間といふ短い生涯、殊に其間一年有餘は同棲でなかつた。

是は和宮にとつては如何にも御不幸な事であつたのであるが、其御不幸は唯最愛の良人を失はれた事計りでなく、四ヶ月を隔て、宮が杖とも柱とも頼まれた、唯一の御兄君孝明天皇は十二月二十五日を以て登遐あらせられた。さうして和宮が其身を託された徳川幕府は、それか

ら後一年を隔てた明治元年正月に遂に瓦解に及んだ。即ちその年の三月には、官軍が江戸に迫り、四月に及んで江戸城明渡しとなつたのである。

公武合體といふ一時の權略から、政略結婚が行はれた譯であるが、大勢がかやうな姑息のことでは、どうする事も出来なかつた。實を言へば、この政策の實施は餘りに遅かつた。併しながら和宮の御降嫁は、大勢を如何ともする事は出来なかつたけれども、徳川家の末路を飾つたと云へる。又徳川家の滅亡を救ふことも出来たのである。その滅亡を救つたのは、公武合體の政策の結果といふよりも、寧ろ和宮の非凡の性格に依つたものと自分は思ふ。若し凡庸の婦人であつたならば、如何に朝廷に脈絡があつたにしても、あの混亂の場合、恐らく何事も成し得なかつたであらう。良人たる將軍が薨去になつた上は、普通の女性ならば必ず尼となつて、菩提三昧ダイザンマイに日を暮して高い波風を避けたであらう。又さうしたからとて、何人も非難するものもなかつたであらう。

然るに和宮に於ては、その大混亂の場合に處して、飽く迄も徳川家の滅亡を救はんと身を挺して努力され、其爲めに非常な心勞をされた。そこに徳川家の末路にあつて、内面ではある

が一つの輝きがある。

幕末の歴史は如何にも悲哀の歴史である。天子、將軍、皆春秋に富まるゝのに相踵いで世を去られた。それは天壽とは云ひながら、何れも時勢に過勞であられた結果と見るのが當然であらう。和宮に於かれても亦若くて世を去られたが、やはり同一原因に由るもので、皆國家の犠牲となつたのである。とかく勤王志士の犠牲となつたのは後世まで高唱されるが、時の天子、將軍、尙又將軍の内方の犠牲になられた事をいふ者が甚だ少ない。幕末の歴史は、戦亂の血腥い事は誰にもわかつてゐるが、内面の軟かい方が一向分つてゐない。和宮が、自分の嫁した家の爲めに如何に苦心し、如何に努力されたかの事實は、吾々も多少は知つてもゐるが、近來幸ひに、その自ら書かれた日誌が世に現れて、委曲の事がはつきりと分るやうになつて來た。それを追々讀んで見ると、その内面の御働きは、吾々の想像したよりも、迥かに以上のものであつた。纖弱なる一女性があればほどの働きをよくもされたものである、と實に恐入るほど御苦心が深かつたのである。私共が和宮を以て空前の女性であると考へるのは此故である。

將軍が薨去されてから、政局が益々紛糾して來た。その結果徳川家がいよいよ滅亡に瀕し、

慶喜もいろんな行違ひから朝敵となつた。この幕府の皇家に對して朝敵となつたことは、皇室から出て居られる和宮に對して如何に打撃であつたか、それは想像に餘りある。その際に當つて和宮が、いかに朝廷に對し辯疏し哀訴せられたかの委しい経緯は、到底簡単に言ひあらはすことが出来ぬ程、それほど苦心の経緯がある。明治大帝は、和宮とは叔姪の御間柄であらせらるゝ。であるから大帝は和宮に御同情があつたに相違ないが、併し御同情があつたとしても、あの混亂の場合、罷り間違へば、徳川家は一家滅亡といふ悲運に遭遇したに相違ない。徳川家は實に俎上の魚であつたのだ。和宮の誠意の徹したといふわけは、朝廷との脈絡があるなどといふ簡單なわけでなくて、和宮が自身で書かれた日誌で見ると、その経緯がはつきり分るが、いかにも朝廷に對せられて謹慎の態度であり、一つも輕率の事がなく、必らず大事の上に大事を取り、如何なる場合にも自身を犠牲にさるゝ、精神が現はれ、その誠意が朝廷を動かしたのに外ならぬ。

將軍が亡くなられた後に、京都からは、切に和宮に京へ歸らるゝやうにとの御勧めがあつた。併しながら一旦嫁した家は我家と飽く迄も考へられ、その京都の懇切なる御勧めを御斷りにな

り、あの面倒なる政局に自ら投じて、極力徳川家を救ふことに一念を籠められた。その委細を文書に依つて拜見すると、なか／＼政治家と雖も成し得ない御才略のほどを染々と感じ、眞に敬服に堪へないものがある。

日本では、昔から婦人の行跡が歴史家に閑却され勝である。實は婦人の事蹟が餘り明かでないといふ事や、又賢婦人が少ないからでもあらうけれども、一つには歴史家の慣習によるので、歴史家は餘りにこの方面を穿鑿しないからである。この和宮の如きは、その行跡が天下の大勢に重大な關係をもつてゐるのみならず、宮は其舞臺に活動さるゝだけの能力を十分有されてゐた。この政治的女性は、殆んど既往の歴史には前例がないとも云ひ得るのである。西洋では國柄が違ふからでもあるが、歴史家は政治的婦人を頗る重要視してゐる。實は婦人の涙ある優しい行爲ほど、局面を制するものはないのであつて、和宮は日本に於て殆んど例のない、大なる徳操能力兼備の高貴の女性と謂はねばならぬ。

幕末の歴史は前にも言つた通り、大體に於ては大なる悲劇である。この幕府の倒壊は無論種種な原因より來てゐる。けれども、何と云うてもペルリが遙々日本の關門を叩き、こゝに世界

の新らしい潮流が日本に流れ来り、遂に三百年の桃源の夢を破つたことが、幕府の運命を縮めた第一の原因である。併し私を以て云はしめれば、原因はそればかりではない、隠れた原因がさまざまある。天璋院の幕府に嫁せられたことや、和宮が降嫁されたことの如き、一面から見れば幕府の滅亡を救うた様でもあるが、一面から見れば幕府の滅亡を早めた原因ともなつたのである。幕府の衰運に乗じて強藩の島津が暗庸の將軍の配として、特に聰明剛毅の女性を選んで簾中に入れたなどは、何と云うても島津に野心があつたからの事で、天璋院は實に恐るべき黒船であつた。そしてこの黒船は深く大奥へ喰ひ込んで入つたのである。

又和宮にしても、徳川家を救はれたのは被ふべからずだが、一面からいふと、此宮の、公武合體の犠牲となつて降嫁されたことが勤王家の憤怒を買ひ、これから勤王家たちが刺戟されて奮起した反動が、一層徳川家の運命を早く衰へさせたといふ事にもなるので、この點から云ふと、此兩女性が、大奥にまで喰ひ込んだ黒船とも云ひ得るであらう。

天璋院の事は前に委しく云はなかつたが、剛毅で聰明なるその性格が、和宮と協同して、徳川家を救つた事にもなるのである。世に傳へる所によると、江戸の開城と決した時、何という

ても明渡しを天璋院が承知せず、結局スカシだまして漸く他に移し、辛うじて明渡した程であつたといふ。その頑張りやうが餘りにひどいので、幕府の重臣が説諭のため、拜謁を乞うて行つて見ると、廣い座敷の中に多數の侍女が控へて居り、遙か彼方の高い處に褥が重ねて置いてあるが、天璋院の姿が見えない。不審に思つてみると、暫らくして侍女の中から天璋院が現れて座に就かれたので、重臣も是には驚いたといふ事である。此の天璋院の行爲は、言ふまでもなく重臣がいかなる風かを先づ見て、物情を察したのである。天璋院がなか／＼の女傑であつたことが、コンナ挿話に據つておよそが窺はる。

私は幕末の歴史中殊に内面の歴史、即ち和宮といふ一女性の事蹟を知りたいと考へ、折にふれて多少書きとめておいたが、近頃幸ひに徳川家に因縁深い増上寺の桑原隨旭氏が「和宮御事蹟」といふ書を出版されたので、それを見るに及び、始めて委しく事實を確かめることを得た。それから、宮の日誌が公刊されたので一層便利を得たことを一言しておく。

四 遁竄中の木戸侯

維新の前後には、種々の隠れたロマンスがあつて、あの大變革に華やかな色彩を添へてゐる。一體あの頃の舞臺に働いた所謂志士といふ志士は、悉く明日の命のはかられない人々であつて、始終身邊に危険が迫つてゐた。しかし、さうした死活の間にも、自ら異性との情交があつて、そこに幾多のロマンスが生れたのである。

昔から扶持に離れた浪人には自然同情が集つて、浪人ものと意外の女性とが戀愛關係を結ぶことは珍らしくない。幕末の志士に就ても同様で、彼等はいづれも各藩屈指の人物であり、一度成功すれば忽ちにして臺閣に列するといふ程の人々であつた。それが死活の間に國事に奔走して居るのであるから、之に對して異性の同情が起るのも、蓋し無理ならぬ事である。

嘗て或る大官人——その人もやはり今いふ浪人境遇にあつて、大いに國事に奔走された人である——から聞いた話であるが、正直に白狀するが、維新當時、吾々は生死の間にありながら、

到る處に、異性とのロマンスがあつたものだ。これは何も自分一人だけではなく、誰しもさうで、それは單に野卑な目的からではなく、さうする事が事實危険な空氣の中に立つ吾々には身を置す上に必要であつたのだ。つまり、異性との情交が慰安と保護に役立つものだ。」との事であつた。成程、さう聞いて見ると如何にもと思はる。

よく聞こえてゐる話だが、土佐の坂本龍馬が、幕府の捕吏につけ狙はれてゐた頃、ある宿屋の娘と情交關係があつて、その宿に泊つてゐた。或日のこと、その娘が入浴してゐると、四邊が急に物騒がしくなつて來たので、風呂場の窓からのぞいて見ると、こはそも如何に、多數の捕吏が押しかけて來るところである。驚いた彼女は、身に一物を纏ふ暇もなく、裸體のまま、龍馬の室に馳せつけ、急を告げたので、龍馬は辛うじて危地を脱することが出來たといふ話の如きは、或る大官人の云うた事を裏書してゐる。

こゝに木戸孝允、當時は桂小五郎といつた——維新の三傑と迄云はる、元勳に就ても、面白いロマンスがある。此木戸侯には松菊といふ雅號がある。是は木戸侯の愛人の名を二つ——即ちお松、お菊を合せたものだとの説もある。さう云へば、のろけ交りのやうに聞こえるが、

併し、其情交を記念するために、かゝる意味を以て自らの號とする例は必らずしも珍らしくはない。私はその出處を委しく調べたわけではないから分らぬが、或は傳へる如き説が事實であるかも知れない。

お菊といふ婦人との關係は私は知らないが、お松に就ては、木戸侯と頗る因縁のふかい物語がある。幕末に木戸侯が頻りと國事に奔走中のこと、京のある家に匿れ、久しく其處を匿れ家としてゐる間に、其處の若い娘と戀愛に落ちた。その娘が即ちお松といふのである。當時お松といふ婦人の年輩はわからぬが、木戸侯とても血氣盛りの頃だから、何れ二十ハタチかれこれの若い女で、且つそれが頗る容貌の優秀な女であつたといふ事は蓋し想像し難くはない。

世間傳へる所によれば、この婦人こそ、木戸侯のために、あらゆる危険と戦つて、遂に侯をして身を完うせしめたと云はれてゐる。美人にして且つそれだけの氣概があるとすれば、實に是は見上げたものである。當時の物騒な世に於ては、婦人と雖も男に勝る氣概を有つた者が決して少なくなかつた。これは江戸に於て最も事實が多い。たとひ刀を以て脅かされても敢て恐れず、情人の爲めには一身を犠牲にする事をも辭せぬ者が多かつた。殊に江戸深川邊の藝者

に、かうした性格の女の多かつたことは何人も知つて居る所であるから、お松が木戸侯に一身を捧げ、暗に危険を保護したのも、決して不思議なことではない。

併し、私の聞いた所によると、それは寧ろお松を偉くし過ぎた話で、事實は、お松よりも其親なる者が、京都の或る宮の神主で、それが何れ勤王の志あつて、木戸侯の勤王の志に感じ、其家に宿泊せしめたのみならず、我が娘を侯との情交に任せ、且つ極力その危難を保護する事に努めたとの事である。

其人は勿論京都人で、何でもやはり賀茂河畔に家があつたと聞いてゐるが、一時幕府の警戒が志士に對して非常に峻嚴で、殊に志士中最も幕府の目の上の瘤であつた桂小五郎は、草を分けても探さねばならぬといふ意氣で、百方搜索した。それ迄は侯も四方に奔走したが、餘り警戒の嚴な爲めに、殆んど身を寄せる所がなく、お松の家に蟄居したのみで、苟且にも外出などは思ひもよらなかつた。

殆んど日々探偵が其家に付き纏ひ、捕吏が毎日搜索に来るといふ有様で、狭いその家には匿れ場もなくなり、遂には天井に身を潜め、三度の食事は下から運び、夜と雖も下に降りる事も

出來ず、殆んど十數日間天井住ひを續けた。終には捕吏も探しあぐんで、結句多數の者に槍を持たせ、何と云うても此家の外に匿れ場はない、何處かに潜んでゐるだらう、と縁の下は勿論、穴倉、物置等も限なく探索した。終には天井までもといふ事になつたが、若し天井を壊されたら最後、恐らく木戸侯の運命はそれまで、あつたらう。

實に此の時こそは、侯にとつて危急存亡の刹那であつたが、天は遂に彼を棄てなかつた。捕吏は、幸ひにも天井を剥ぐことをなさず、其代り、十數人が槍を以て天井のあらん限り下から之を突いて廻つた。侯は床の間の天井に匿れてゐたが、槍は此處にも及んだ。今や彼の一命は風前の燈火も同様であつた。が、幸ひにも捕吏の槍先を免れ、九死に一生を得たことは、木戸侯にとつても、又日本國家にとつても極めて仕合せな事であつた。

幸ひかうして無難に濟んだので、此上此處にゐるのは宜しくない、ひとり此家に迷惑をかける計りでなく、復どんな危険が迫らぬとも限らぬと思つて、侯は一夜飄然として京を離れた。そして何處へ誰を頼つて行つたのか、暫くその消息は分らなかつたが、そのうち妙な噂が京の花柳界に起つた。それは、近頃見かけぬ乞食がやつてくる。縋縋を身に纏ひ、缺けた椀一つ持

つたきりの見る影もない乞食だが、かつぶくのい、肥満した男で、頗る愛嬌があつて、可笑しな歌を唄つたり、踊つたりする態が、誠に興味を感じさせるといふ。で、木屋町邊の藝者は、其乞食を毎日心待ちに待つ様になり、來ると踊りを所望して、いくらかの錢をくれてやるといふわけで、花柳界の珍とせられた。勿論木戸といふ大人物も、若氣に乗じて頻りに花柳界に入した事もあるわけで、自分の煩悶を遣るために、又傍ら物情を偵察するために、かやうな行態をなしたものに相違ない。

さてその乞食状態である人の匿れ家を洗つて見ると、丹波の某方面であつた。それがお松並にお松の家族には知れてゐたのであらう。或る時お松が悲しみに堪へずして、その隠れ家を訪ねたことがある。云ふ迄もなく丹波は京には極めて近い所で、汽車がなくても毎日往復出来る位の間であるから、京へ乞食に出かけるには恰好の處であつたらう。お松は漸くその家を探しあて、入つて見ると、如何にも乞食の住處らしい假造りの小舎で、そこに蓆を敷いて、汚いみすばらしい姿をして、自分の愛人が坐つてゐた。一目見ると流石のお松も胸一杯になつて、暫くはし河もいふ事が出来なかつた。かねて自分の居所へ訪ねて來てはならぬと深く諭しておいた

のに、かうして訪ねて来たのには、木戸侯も頗る驚きもし、又憐れみもしたであらうが、そこは如何に乞食境遇でも洒落な彼は、深く憂へる色も見せず、もうこんな事をしてゐる間も永くはあるまいからと優しく宥めて、泣きの涙の愛人を歸したといふ事である。

かゝる事あつて數ヶ月の後である。忽ちにして維新の大業は大成せられ、その乞食境遇の人が先づ擧げられて臺閣に列するに至り、岩倉、大久保等と並んで最も權威ある地位に坐る事となつた。芝居に仕組んでも人が信ぜぬ程、いかにも急激な變り様だが、それが事實だから面白い。

かくて臺閣に列した木戸侯は、勿論お松を東京に呼んで、彼女を正式の妻とした。そして京都戀しやで、その重い身分で眞先に出發して行つた所が京都であつた。久振りに天下晴れて乗りこんだのであるから、磊落な侯は、夫婦揃つて或る大きな酒樓に、昔馴染の藝者を始め懇意な女將や自分が身を匿してゐた時分の古馴染などと呼んで、盛んな宴會を開いた。その席に臨んだ者の中に、私の知合の京都の宿屋の女主人が交つてゐた。私はその女主人から「木戸さんが上座に坐つて、お松さんがその隣りに坐つて居られた。それを見ると、前に見たお松さんと

は事變り、成程、飾り立てると、かうも品位があるものかと思ふほど立派な態度で、これならば天下に時めく木戸侯の夫人として決して羞かしからぬと思はれた。木戸さんは例の通り磊落で、頻りと戯談を云つて居られたが、その時私の側にもゐた四五人の若い藝者の中の一少年な雛妓が、私の袖を引き、耳に口をつけて、あの旦那は何時ぞや其處らをふらつてゐるた乞食によう似て居ると私語いた。その私語が忽ち木戸さんの耳に入つて、うむ、それは俺だよ、と云はれたのでそれから又座が大變賑はつた。」と聞かされた事があつた。

この女主人は今が多分故人になつたらうと思ふが、京都賀茂河畔三本木に信樂シガラキといふ料理屋兼業の宿屋をしてゐたもので、私が行つたのは二十數年前の事で、その頃彼女は四十七八と思ふ位の年輩であつた。

その附近は昔から極めて風流な地で、大抵文人墨客は其邊に居を構へたものである。丁度信樂の西隣りが小さな家で、物干に出るとその家の欄干が見える位置にあつたが、それが有名な梁川星巖の家で、その頃はすっかり頽廢して、少數の學生を置く下宿屋になつてゐた。又東隣りは貫名海屋の妾宅で、その頃はたしか料理屋になつてゐたと思ふ。そんなわけで、木戸侯も

信樂には時々遊びに來たりして、深い因縁があつたものと見える。

私は信樂に度々泊つて、いろいろその女將から生きた話を聞いたが、今猶ほ忘れられぬのが木戸侯の話で、前に擧げた話は全部此女將から聞いた事實で、それをそつくり、少しも潤色なしに叙したのである。

大隈侯が生存中、大久保、木戸、其他の人々の平生の服装に就て話されたことがあるが、木戸侯の服装は頗る凝つた粹なもので、武士といふよりも鴻池あたりの金持といった風な、極めて垢抜けたものを喜ばれたものださうだ。國事に奔走する間に種々の境遇を経てゐるから、所謂苦勞人で、服装の好みもそれから來たものかと考へらる。

大隈侯の話を述べたからも一つ附け加へるが、大隈侯にあてた木戸侯の手紙が澤山ある。何れを見ても國事に就て周到の案が書かれてあり、悲憤慷慨の氣に満ちたものが多い。その手紙を見ても、木戸侯は別して神経質の人だつたかと思はる、所があり、それだけ國事に對して熱心だつた事が窺はる。或る一つの手紙に、同じく悲憤慷慨して、大隈侯に種々困難な事件を依頼する向きのものがあるが、その終りに「大隈様」を「大苦満様」として自分の名前を「鬼

怒」とかいてある。この氏名の書き方はその手紙の内容をよく表はしたもので、鬼怒とした所に如何にも國事を憤慨する意氣が表はれ、大苦満とした所に込み入つた難儀を託する心持を示したものと思はる。

五 吉田東伍博士を憶ふ

吉田東伍博士が逝いて既に十年になる。氏は其の死ぬる年五六ヶ月氣が引立たず、沈鬱に日を送つてゐた。どうも病が潜んでゐるらしいから、醫者に診て貰つてはと勧めても、どうしても診て貰はなかつた。自分では、胃癌などであるまいか、と暗に思つて醫師の診察を避けたのであつたかも知れない。何分様子がわるいから私が切に轉地保養を勧め、漸くそれを容れて、行く先を銚子に選んで行くと、二日目に客舎で歿した、といふ知せを受けて驚いた。實は何の病症であつたかわからぬ。私とは親族關係もあり、大切な友人であつたので、私は特に悲んだ。遺骸を東京へ引き取り喪を發すると、島田三郎氏から私に電話がか、つて來た。氏は、前年田

口卯吉氏を喪つたことに言ひ及び、自分の田口氏に於ける關係は、あなた、の吉田氏に於けると同じである。御痛みの程洵に同感に堪へぬ、と悔みを申越された。私は島田三郎氏とは長い間交はつたが、電話を交へたのは、後にも先にもコレ切りであつた。成るほど、島田氏をよく私と吉田氏との關係を知つて居られた。政治家としての島田氏は學者肌の田口氏を此上なき友人とされた。それと同じ様に、政治經歷のある私に學者たる吉田氏のあるのは丁度似た趣があるので、さてこそ島田氏が田口氏を喪つた哀傷の情を以て私に同情を寄せられたのであつた。

思ひ起せば吉田氏とは長い關係がある。私が新潟に新聞記者をしてゐた頃、君は小學教員であつた。時々私を訪ねて來ては、文稿や詩篇を示されたものを見ると、私はいつもコンナ人を小學教員にして置くのは惜しいと思つた。氏の得意は國史にあつたが、私は其頃まだそれを知らず、尤も畏敬したのは其非凡の文藻にあつた。追々交はるに連れて君の長所は文藻にあらずして史的の學殖に在る事を知り、いつも對酌の時に、君は東京に出よ、自分は不肖ながら三年を出でず必らず博士にして見せると言つた。私が郷里を去つて東京へ來ると、君も養家を脱して東京へ來て私の食客となつた。氏の名著として學界に名の高い「日韓古史斷」は、實は食客時

代に出來たものである。當時私は「讀賣新聞」の編輯を主宰してゐた。氏は、落後生の名を以て田口卯吉氏の「史海」の評を讀賣紙上に載せて、史家を驚かした。「徳川政教考」なども當時私の薄暗い書生部屋から産れた著述である。氏は、私の豫言のごとく東都へ來ると間もなく時の博士連を壓倒する才學を現はしたが、文學博士を贏ち得るには私の豫言より十年後れた。君は日清戰爭に強ひて記者として從軍を思ひ立ち、軍艦「橋立」に乗つて威海衛の戦闘を見、生還の後始めて「大日本地名辭典」の編纂を思ひ立つた。それが十三年の星霜を経て完成し、君はそれを以て文學博士會滿場一致の投票で博士に推されたのである。

地名辭典の編纂は大事業であつた。今考へて見て滑稽に感ずるのは、吉田氏は私の力を頼みに此業を企てたのである。當時頗る振はなかつた私が、力を揃はず、よろしい、やり給へ、と云うたのは大膽であり無謀であつた。最初は物を典して迄も助けた。後は親族から資金を出させたり、又親族が學資を供してゐる三四の學生をして筆寫の手傳をさせたこともある。吉田氏は身を奉ずることが極めて薄く、且つ勤勉で、仕事はズン／＼進み、割合に經費もかゝらなかつたが、何分私では遣り切れず、遂に富山房に移して、それが成功したのである。この大著の

完成した時は、私も實に感激に堪へなかつた。私は自分の誇りの如く、吉田を誇つたものである。吉田氏は一ト通り中學程度の教育を受けたばかりで、實は獨學自習の人で、家學と天分が偉大の助けをした。當時學閥に重きを置かれた頃でもあり、吉田氏の如き無名の人がこの大著を出さうとは誰れしも思はなかつたのである。併し、事實ほど力強いものはない。これを見るものは、如何なる學者もその該博の識と才に驚いた。此編纂は日清戦争を終つてから始まり日露の戦争を経て成つたのであるから、この二大戦役に、世界の大家と云はれてゐた支那と露國が、小家として輕んぜられてゐた日本に打負けたのは、世界の驚異だとすれば、此の著述が世界の所謂る大家を壓倒して顔色無からしめたのも、亦學界の驚異と云はざるを得ぬ。併し、實は驚異とするに足らぬ。力づくの世の中には當然の事である。これを望めば鬱然たる大家も、實は案外のものであることに氣附かねばならぬ、と私の云うたことが地名辭典の跋となつてゐる。此出版の成つた時、私は吉田氏を伴うて大隈侯に引會はした。その際は皮肉のことを云はれた。「これは學者では出來ぬことだ。吉田君は學者でないから遣り遂げた。」と云はれた。この言は、つまり、世の所謂る大家が、己れの名聞に顧慮し、學界の批判を虞れて、折角案はあり

ながら、それをあらはし得ずして墓に入ることを一笑されたのである事は申す迄もない。此名著が帝大教授坪井九馬三博士により文學博士會に提出され、一議に及ばず吉田氏は博士に推薦されたが、その橋渡しをしたのは私であつた。私は、十六七年前に言つたことがこゝに實現したので、私は自分が博士に推薦されたよりも喜ばしかつた。併し、當の本人は卻つて冷然たるものがあつたのを、私は寧ろ偉として嬉しかつた。吉田氏が地名辭典の執筆中私が氏を早稻田の學苑に紹介して、歿するまで教鞭を取り、名教授と呼ばれた。氏は早稻田に在る間に、「倒叙日本史」を著はし、傍ら「世阿彌十六部集」「宴曲全集」の如きものを著はし、その學才は往く所として可ならざるなきを示した。氏は要するに非凡の天分を以て恵まれた人であつた。そして天分に恵まれた人は往々怠慢であるのに、氏は如何にも勤勉の人であつた。その地名辭典の成つた時、「幾百萬字酒中成」の語を印に刻せしめたものを見て、それを事實であるかの如く思ふ人もあるけれども、決してさうではない。酒は好きであつたけれども、飲酒三昧で書いたものでない。若し飲酒三昧の生活であつたなら、あんなに早く死にはしなかつたらうに、と私は常に辯護するのである。

氏は折に觸れて私に新井白石の非凡の學者であることを説いた。氏は恐らく白石に私淑してゐたと思はれる。氏の處女作とも云ふべき「日韓古史斷」などは白石の「古史通」を受けて斷じたものであるから、私淑はコンナ處にもほのめくが、私は氏と白石との間に甚だ似寄りの點があるやうに思ふ。第一、史學が本領であること、第二、紙背に透る史眼を有したこと、第三、創見に富むこと、第四、他人の説に雷同せざる識見のあつたこと、第五、言語の學に通じた事、第六、考證の的確であつたこと、第七、政治經濟に通じた事、第八、常識に富んでゐたこと、この八點は白石の特色とする所で、亦實に氏の特色とする所であつた。白石は種々の學問に長じたけれども史學に尤も卓見を觀ることは人の許す所で、「讀史餘論」でも「古史通」でも「藩翰譜」でも皆不朽の書とされてゐる、氏が史學に専らなるは言ふまでもない。第二、白石の偉いのは其眼光紙背に透る鑑識であつたのだ、史學にはこれが尤も大切である、氏も看破力が非凡であつて、大部の書を少しばかり展開すると、熟覽者よりも急所をよく知つてゐた。第三、創見は殊に白石の特徴である、史論でも考證でも語學でも皆後世學者の範を爲してゐる、氏に於ても創見の天分が甚だ多く、千古未決の問題が氏により解決されたことの如何にも澤山あるこ

とは、地名辭典や「日本歴史地理の研究」に就て見ても何人も異議がない所である。第四、創見のあるものは他人の説に附和雷同するを要せぬ、白石も氏も此點に於ては同じであつて、着眼が常に高く、且つ議論が偏僻に陥らず、穩健で公平である處がよく似てゐる。第五、史學に必要な語學である、白石は「東雅」を著はした程の言語學者である、氏も亦難解の足利時代の言葉を解して従前學者の指を染め得なかつた「世阿彌十六部集」を注した。第六、考證家の弊は牽強附會の説を立て、船を山下に押し上す風あることだが、白石も氏も考證は常に實際である、例へば、漢字に泥むを非として必らず古語に溯つて判ずるから直ちに眞諦に觸れた、牽強附會の考證家から見ると甚だアツケないやうであるが、實は眞理は邇きにあるものである。第七、史家の病は政治經濟に通ぜざることにある、この大切な要件を度外に置いて歴史がわかる筈はない、白石は自から經世家を以て任じ、時の將軍のために頻りに策を建てた人である、氏も亦衆議院の豫算を提けて歴史の講壇に上つた人である。第八、學者の病は理論に通じて世態の實際に暗いことにある、史家に於て常識の缺乏は尤も大患であるが、白石も氏も共に常識に富んでゐたから、歴史の批評でも考證でも實際であり、何人も頷かる、のは此故である。コ

ンナやうに列學的に較べて見ると似寄りの點が甚だ多い。勿論その優劣などは論外であるが、近世の學者で白石を以て比すべきものは恐らく此人であらう。

白石はあの古い時代に早く西洋趣味があつて「采覽異言」を書いた。氏は西洋風の教育を受けながら西洋歴史を涉獵しなかつた。若し原書で西洋の歴史に目をさらしたならば、更に發明する所があつたであらう。私は之を遺憾とするものである。尙ほ他に遺憾とする一事がある。氏は晩年に歴史辭典の編纂を企てたが、それが成らずして逝いたのは、氏も遺憾としたであらうが、吾等も亦遺憾とするものである。この事業に就て氏は材料の取纏めに二三年の時を費し漸く筆を執らんとするに至つて病を得た。若しこの辭典が完成したならば、地名辭典と雙璧とせられ、長く學界の珍とせられたであらうに、材料は累々として存してゐるが、肝心の氏の頭腦にあるものが全然闕如してゐるから、寄せ集めの材料は精神の無いもので、奈何ともしやうが無い。

六 杏林の明星野口英世博士

醫學界の一明星、それは日本人であるが亞米利加に於て世界を昭耀してゐる。その人が餘りに偉いので、亞米利加人は餘所の人となすを欲せず、亞米利加人だといつてゐるのをかしい。此人即ち野口英世博士は、福島縣の猪苗代湖畔翁島オキナジマの貧家に生れ、窮苦の間に學を修め、小學時代から早く麒麟兒として認められた。其三歳の時に誤つて火爐に左手を入れ大怪我をやり、五指が糜爛して不具となつたのを、某醫が折解して救うた。それが多分動機で終に醫學に志を立て、東京に出てからは専ら杏林に身を寄せ、貧苦と戦ひつゝ、醫師の免狀を得た。偶々他日の恩師なるフレキシナー氏が日本へ來遊の際、その通譯を擔當したことが機縁となり、同氏の助手たる約束が出来、爰に渡米の機會を得た。渡米後も幾多困難の曲折があつて、フレキシナー氏が紐育のロツクフェラー研究所を擔任するに迫んで、博士はその助手となり、後には氏を繼いで出藍の名を博し、毒蛇の研究に梅毒の研究に先づ産聲ウツゴエを揚げて先輩を驚かし、後には矢繼

早に細菌に血精に多くの発見をなし、米國の醫界に発見王の名を博するに至つた。此人が米國で如何に名聲が高く人氣があるかに就ては、或る人から聞いた一挿話がある。大統領が外出中遽かに雨に出會つても、途上の人は之を顧みないのに、野口博士が雨に遇つた時、途上の男女は争うて傘を與へたといふが、博士の人氣は是に由つても推測し得らる。

大正四年の九月、博士が十五年振りて歸朝した時、三十日間ほど内地にゐるが、あらゆる方面から迎へられて非常な人氣であつた。醫界の大家が打揃うて博士を歓迎した時、博士の窮困時代大なる援助を與へた血脇守之助氏が發起人中の會幹であつて、私が博士と妙な縁故があることを知り、私をも其席に加へた。三十幾名の杏林大家の内、私のみが非醫であつた。主賓の左側に北里博士が坐し、其隣りに、昔し私の學生時代に治療を受けた、併しそれからトント遇つたことの無い、齒科の先輩高山紀齋氏がゐた。高山氏も北里氏も博士の微時に少からぬ縁因のある人である。その中間に醫者でない私が一人介在したのは私自身にも妙に感ぜられた。他の人々も同じやうに感じたであらうと思つてゐると、血脇氏は如才なく私が特に加はつてゐる縁因を陳べたので始めて私の氣が落着いた。此會の内容はこゝに省略するが、兎に角此會が博

士に取つて最も意味の深いものであつたと思ふ。

博士は滞在中毎夕各所の招待を受け寧日が無かつた。其間に故郷翁島に歸省して久方振に母堂や郷黨に逢つたりした。斯様に多忙でもあつたから、私もシミ／＼談話を交へることが出来なかつたが、博士は内實各所の宴會に招かれて疲れ果て、私に向つて御馳走は迷惑だといふたこともある。それも其筈、博士の如き學究肌の人物を、見せ物扱ひをしてゐる氣味もあつたからだ。私は博士に云ふには、君も折角歸朝したのだから、歸米迄に大隈侯に遇つてはどうか。若し遇ふ積りなら、自分が案内する。決して多くの時をかけぬと云ふと、博士は喜んで、それは何寄りも望む所だと云ふので、一日伴つて早稲田に行つた。侯はいつものやうに快濶に應接され、博士の功勳を激賞された。果ては博士から侯と寫眞を同寫したいと求め、博士は親しみのある態度で侯に靠れつ、同行の博士の友人石塚三郎氏に依つて撮影された。侯の邸に在る一時間許にして、私は博士と石塚氏を拉し、自動車を驅つて私の落合村に於ける小莊に伴うた。博士は落着いてから云ふには、歸朝していろ／＼の會に招かれたが、今日大隈侯に親炙が出来たことほど愉快のことは無かつた。今日が三十日中の眼目であつたと喜びを述べられた。

私が博士の百忙中特に私の田舎家に伴つた譯は、郊外の景色や農圃の風物を味はせて、彼れをして故郷を偲ばせたいと思つたのと、毎夜形式的の佳肴に攻められてゐるのを救ひ出し、彼れを書生時代の境遇に置いて見たいと考へたからであつた。此日饗應にと供したものは、僅かに三種に過ぎなかつた。第一は釜から取り出した計りの焼芋を大皿に満載して出し、吾家の菓子はこの種だといふた。食膳には特に鮭の卵、所謂筋子スデコと牛鍋とを供した。この三種は博士のあこがれの物であるのに、連日連夜高等の饗應は續いたが、何人もこの種のものに思ひ到るものは無かつた。實は博士の性來の嗜好を知らないから、工夫もそこに及ばなかつたのである。博士は私の意外の饗應を心から喜び、日本滞在の最終の日は單に偉人に會した満足のみでないといふはれた。私は別れに臨んで、旅行用の日本の筆研と、かねて博士の氏名を刻させて置いた、印三顆を祖道として贈つた。博士は日本の書道にも天分があつて、席上美事に揮毫されたものが今も存してゐる。私は博士に云ふに、君は書に趣味がある。ペンばかりを遣はずに、たまには本國の筆研を用ゐて故國を偲び給へと云うたが、米國に戻つてから私の注文通り日本の筆で書いた禮狀が到來した。

右の原稿を作つて十日ばかり経つと、新聞紙は一大悲報を傳へて吾等を驚駭せしめた。その報道は、黃熱研究の爲め阿弗利加に出張中であつた、野口博士は疫毒の侵す所となつて客死したとある。吾等は世界の醫學界のため一明星の殞ちたことを深く悲まざるを得ない。發病の動機などに就ては未だ委曲を知ることが得ないが、或は云ふ、博士は自家の身體を實驗用に供した爲めに此不幸が起つたと。斯様の事は研究家に往々あることである。殊に自家の發明に確信ある博士であるから、多分事實であらうと思はれる。果して然りとすれば、實驗のため身を犠牲に供した、高い精神を崇敬せねばならぬが、それだけ此人を喪つた事を哀惜せねばならぬ。私は博士の訃に接して感慨に打たれてゐる間に、往年博士が私の別荘で揮毫した額面のことに思ひ到つたが、その書かれた文字は何であつたか、既に忘却した。急にそれが見たくなつて、一年に一回も行かない別荘に出かけて、やつと捜し出して見ると、幸ひ汚損も蝨喰も受けずにあつたが、その文字はと見ると「過如不及」とあるので、私は沈思した。成る程私の性格を識る博士が此語を撰んだのは、これを座右の箴とせよとの意であつたに相違ない。併し此語は私の爲めの箴であるのみでなく、亦博

士の箴とすべきものであつたと思つた。一身を學界に捧げるを本分としてゐる博士としては、自ら實驗の犠牲となるのに不思議はないやうであるけれども、吾等より考へれば、過ぎたるは及ばざるごとき感なきを得ない。博士はまだ老境に達して居らぬ。今少しく自重したら、更に人類を益する幾多の發明もあつたらうと思ふと、額面に對して黯然たらざるを得なかつた。

博士が如何に研究に熱心であつたかに就ては、これを目前に見た阪上弘藏博士の談を爰に附記するの必要がある。阪上氏が前年米國で野口博士を訪はんとした時、電車の中で日本人がゐるから、野口博士の事を問うて見ると、其人が即ち博士であつたので、幸の事と連れ立つて研究所に出かけると、野口博士は自家の研究室の前に立止まり、何か默考してゐるが、失禮だが爰に暫時待つてゐてくれと云うて、博士はひとり室に入り、自分は廊下に佇立して博士の出て来るのを待つた。此間約一時間、博士は漸く出で來り、失禮をしたと云うて、始めて室内に導いた。實は博士は何か研究上考へ出したことがあつたので、打措かず、實驗に取りかかり、それが爲め一時間待ちばけを喰はされたのであつた。併し自

分(阪上氏)はまだ仕合せの方で、一時間待つて室に入ることを得たが、或る人の如きは、幾時間も戸外に待たされ、終に空しく歸つた例もある。これは博士が實驗に熱中の餘り、人を待たせてあることを全く失念した爲めで、斯くの如きは博士に珍らしくないことである。

阪上氏は親しく博士の實驗の模様を目撃して、驚嘆を禁じ得なかつたと云うて語らるゝには、あんなに氣根のよい人は西洋人にも無い。單調を破る、別々の實驗ならば、終日若しくは數日に互つても、持續の出来るものであるが、博士は一つ事を幾十回も繰返しても、少しも倦んだ氣色がない。自分が目前に見た實驗も一つ事を幾十回も繰返されたが、尙ほ數日同じ事を繰返さねばならぬと云はれたのには驚いたが、如何にも研究家は斯くあらねばならぬと語られた。博士に澤山の發明のあるのは偏へに斯かる努力の結果であると思ふと、醫學に門外漢である、私などでも滿腔の敬意を捧げざるを得ないのである。

七 畫家渡邊省亭の起身談

明治の時代に名聲の高かつた畫家の中で、菊池容齋派の畫家として知られた者が二人ある。一人は松本楓湖、一人は渡邊省亭で、世に並び稱せられた。この渡邊省亭に就て、立身談ともいふべき多少の話がある。

彼は幼少の時分或る質屋に預けられて、丁稚奉公をして居つた。まだ十二三歳の小僧であつたが、天稟畫が描けるので閑さへあれば人形を描いたりなぞしてゐる。質屋の店先でかやうな事をして居つては邪魔になるので、時々朋輩に叱られたりして、遂には押入の中に隠れて筆を執るやうなことも屢々あつた。

處が或る時、その描いたものが主人の眼にとまつた。

「別に師匠もなくはただ描けるのは感心だ。是は質屋奉公をさせるよりも、やはり其道の人に就て教へを受けさせたなら、他日は相當の繪師になるかも知れない。」

いたく感心した主人はかう考へて、その親許に次のやうに勸告した。

「自分は別に此の子の世話をしたくないといふのではないが、質屋の丁稚をさせておくのは惜しいものだ。是程の天分のある者をその道に育てないといふことは此の子の爲にも損であり、お宅の爲にも損だと思ふから、何とかして相當の師匠に就かせ、好きな道を習はせられたがよいでせう。」

そこで親達も、この子のために然るべき師匠を探すことになつた。其時分名高かつた畫家はいろいろあつたらうが、菊池容齋の名が喧傳されてゐた。この人は「前賢故實」といふ本を著したことがあり、古今の人物の風采竝に其時代々々の服装を摸寫するに非常な苦心をしたもので、その本は今日も名高いものになつて居る。省亭は傳ツテを求めて、その容齋の門に入ることになつた。

昨日迄は質屋の小僧として、人目を避けながら筆を執つてゐた少年が、今は名高い畫家の家庭に入つたことであるから心中非常な喜びで、誰に遠慮氣兼ねいらず、天下晴れて思ひのまゝに描きつゞけた。

併し、先生の容齋は一向手本も出してくれなければ、描き方を教へようとしてもしてくれない。たまに描いたものを持つて行つて見せると、たゞ眼を通すばかりで何も云はない。或るとき椿の花を描いて、少年畫家は内心非常な得意であつたが、先生は例によつて、冷然としたま、批評もせず、善いとも悪いとも一言も云つてくれなかつた。

先生の態度はいつもこんな風で、折角弟子になつたのに何も教へてくれないから、まア普通の弟子ならば、失望する所であらうが、省亭は敢て失望することもなく、毎日心任せに遊戯半分て描いてゐた。勿論多くもない門人中殊に少年でもあるから、家の掃除とか、走り使ひなどにも使はれたのである。

處が容齋は時折散歩がてら戸外へ出かけることがあつて、その時はきつとこの少年を連れて行つた。その頃容齋は七十位の老人であつたが、餘程達者だつたと見えて、細君が「杖をお持ちなさい」と云つて特に持たせると、家の前だけは杖をついて出るが、家を離れるとすぐ少年に之を持たせ、自分は何の助けもなく、ドン／＼歩いて行くといふ風であつたが、その散歩してゐる間が實は偶然なのでなく、この少年が何等かの教訓を得るのはかやうな場合であつたの

だ。勿論散歩中も、別に畫の描きやうを教へるではなく、たゞ黙々として歩くだけである。

或る時、上野の山に花が咲き始めたといふので、先生の足はその方に向つた。丁度山の入口につくと、そこに石があるので、先生は茲で一休みしようといつて、少年も共に腰かけながら四邊を眺めてゐた。丁度その時である。下谷の藝者が何處かの席へでも呼ばれて行くらしい風で、盛装して二人の前を過ぎ去つた。先生は見るともなしに見てゐたが、別にそれに就て何事も云はなかつた。が、家へ歸ると少年は先生の前に呼び出されて、いきなり次の様な問をかけられた。

「今日上野で休んで居つた時、藝者が前を通つたらう。」

「え、通りました。」

「あの女はどんな色の半衿を懸けてゐるか、帯の模様はどうだつたか、云つて御らん。」

「……………」

まだ少年ではあるし、色氣も何もない時分だから、藝者が通つた位の記憶はあるが、その服装などは更に氣にもとめなかつた。まして半衿の色とか、帯の模様とか、そんな細かな點を注

意しよう筈もない。それなのに、こんな意外な質問なので、少年はすつかり答へに窮して了つて、たゞモジ／＼してゐると、先生は頗る不興けな顔をしてブツ／＼口で云つてゐたが、たうとう、

「い、から彼方へ行つてろ。」

と如何にも腹立たしさうに叱りとばして、そして晚餐の時もやはり機嫌が悪く、不味さうに食べて了ふといふ有様であつた。これはほんの一例に過ぎないが、實はかやうな事が容齋の一種の教育法であつたのである。其後もかうした事が切々起つた。が、何時も／＼餘りに注意を拂はぬ方面の事ばかり尋ねらるゝので、多くの場合はつきり答へる事が出来ず、その都度先生の不興を買ふばかりであつた。

或る時また同じ寸法で散歩に出かけた。今度は谷中の天王寺に向つたが、彼處には五重塔ゴヂユウノタツが建つてゐる。先生はまたこの塔の近邊に腰かけてながめ出した。少年は、先生がまた塔を見て居るから油斷がならぬぞと思つて、自分も頻りに見て居つた。併し別に何事も感じない。歸つたらまた先生から質問が出るだらう。一體どんな質問だらうかと考へてみるが、豫想がつかぬ。

あれかこれかと考へながら歸つて來たが、家につくと案の定また呼出された。

「今日見た塔についてお前はどうか考へる。屋根が幾つも重つてゐるが、一つも違つてゐなかつたかどうだ。何か氣についたことはなかつたか。」

さア、またやつて來たが、今度こそ巧く答へねばならぬと思つて、いろ／＼思ひ起して見ることが、先生の見た所には一向氣がつかなかつた。どうしても思ひ當らぬので、また仕方なく、

「どうも分りません。」

「馬鹿ッ。」

例の通りまた叱られて、スゴ／＼と席を起上つた。

その頃迄には多少月日を重ねてゐたわけであるから、描き散らしたものは誰が見ても進歩の迹があり、容齋もこれはモノになると内心考へてゐたには相違ない。併し、いくら試みても急所にはまる答へをしないので、何時も／＼叱られるのが落ちであつた。それを容齋の妻が側から見てゐて氣の毒に感じ、或る日容齋の不在の時少年をよんで、

「今日はお前に一日暇をあけるから、も一度天王寺に行つてよく塔を見ておいで。先生の云は

れた所を注意して見たら、きつと何か気がつくだらうから。」

と優しく勵ましてくれたので、彼は早速天王寺に出かけて一生懸命に塔を観察した。すると先生の云つた通り、どの屋根根だか變つた所があるので、「成程是だな」と今更先生の眼力の非凡なるに驚き、物を寫すには非常な注意が必要な事を感じた。そこでいそぐと歸宅して、

「先生、今迄は寔にウツカリしてゐて注意がとゞきませんで済みませんでした。實は今日塔を注意してみました。斯くくの通りでした。」

と自分の研究した所をぶちまけて話すと、流石に自分の思つた壺にはまつた事を云ひ出したので、何年この方笑顔を見せなかつた容齋が嫣然笑つて、

「其處だ、其處だ。」

と大層よろこび、折節何處からか到來した菓子を箱のまゝ與へて、その晩の食事も大層愉快さうであつた。

かねて内實は頗るこの少年に期待する所があつたと見えて、今の事があつてから俄かに容齋の態度が變つて、その翌日は、態々先生自ら五重塔をいろくに寫した粉本を取出し、

「お前が塔に就て多少工夫をしたそれに愛で、之を與へるから、尙ほ之に就て一層研究したがよからう。」

と茲に始めてお手本らしいものを授けられた。それ迄はたゞ散歩に連れられて行つて、歸ると種々の質問を受け、先生の不満を買ふ事が連續したことは前述の通りであるが、これぞ自發自得を主眼とする容齋の教育法であつて、自發的に考へを促すといふのでなければ、本當の發明は出來ないものだ、といふのが彼の信條であつた。是は獨り容齋のみならず、近頃有名であつた橋本雅邦の如きも同様で、嘗て下村觀山氏から次のやうな話を聞いたことがある。

「雅邦先生の門に入つてから時々何か描いて行つて示すと、先生は何時も褒めて下さる計りで一向なほして下さらず、別に教へても下さらなかつた。併し、對坐してゐると、言外に何等かの教訓を得るやうな感じがし、少くとも人格上の教育を得て、それが爲に畫に多少の品位を持たせることが出來た。」

總じて昔の教育法は、この自發を促し自得させる事を主眼としたもので、徒らに細々しく教へるよりも、寧ろその方が徹底的であり、且つ眞實なる教育法であると思はる。

省亭が追々功を積んで大家となり果せたのは、畢竟この自發的の教育法が與つて力あつたのであらう。併し、かゝる教育を受けるといふことは却々つらいことである。又それを行ふ師匠も、内實はやはり案外つらみのあつた事であらうと思ふ。省亭が晩年に至つてその時分の事を想ひ起し、つくづくそのつらかつた事を涙ながらに物語り、同時に師恩の深かつたことを語り出したことがあつた。

省亭は一體純江戸つ子であつて、その行ひが輒もすると奇矯に流れた。併し、それが江戸つ子の眞面目である。

或る時何れからか畫を頼まれて、絹本に三幅對を描いたが、頗る上出来であつた。で、依頼者からは何百圓といふ謝禮金を持たせて、受取りの者を寄越した。然るに受取つて歸つて二時間ばかり経つと、その使者がまたやつて来て、丁寧に挨拶していふには、

「主人は之を見て、大層結構に出来たと喜びましたが、生憎この懸物は尺が少しく足りないの
で床に嵌りかねますから、甚だ恐入りますが、どうかも少し尺長シヤクナガに描き直して頂きたいと申
まして御座います。お禮金はいくらでも差上げますから……」

省亭は黙つて聞いてゐるが、いきなり先刻持つて来た包みのまゝである禮金をその使者に返して、

「畫といふものは、同じものが二度描けるものではない。」

と云つたきり何も云はず、その目前で三枚の絹本を、ビリ／＼と裂いて、その儘奥へ引込んだ。或る人が丁度其處に居合せて、その畫の裂かれるのを見て、如何にも惜しかつた、と私に語つたことがある。是はほんの一例に過ぎないが、この意氣が江戸つ子でもあり、又藝術家肌でもあるといふ事を明かに物語るものである。

省亭は頗る潔癖で、家は廣くもなかつたといふが、非常に綺麗に出来ても居り、掃除も行届いてゐて、臺所の如きは一塵もとゝめず、殆んど鏡のやうに拭きこまれて居つて、其處に置かれてある器物は勿論、漬物をする樽の如きも、小氣味のいゝ程綺麗にされて居るといふ風であつた。で、可なりの生活をして居る彼にとつて、風呂をつくる位は何の面倒もない事であるのに、矢張り江戸つ子氣質で、錢湯が好きで、毎日其處へ行くのを例とした。そこへ行く場合にも、僅か一町かそこの極めて近い所であるのに、手拭を提げてブラ／＼歩くといふ遣り口で

なく、必らず俵を僣ひ、それも極めて清潔で、そして綺麗に造られたのを選び、それに乗つて出かけて、浴し了ると、携へた香水を全身にふりまくといつた調子であつた。

彼が最も好んだ食物は鰻で、有名な鰻屋だと必らず道の遠きを厭はずして食ひに出かけたり、或は取寄せたりしたものである。鰻ばかりでない、一體非常な食道樂で、殊に平凡な食物を嫌ひ、必らず何人も口に上し得ないやうな時節外れの物を或は魚河岸或は野菜市場から取寄せて、贅澤な料理屋ですら用ゐる得ない、所謂ハシリの品を、價にか、はらず購うてそれを食するのを興味とした。だから、その臺所には頗る珍物があると云はれてゐた。

省亭と極めて懇意な大商人、名を忘れたが、随分省亭に目をかけて、省亭にとつてはバトロンといふ格の人であるが、それがいろんな用件で屢々使ひをよこす。やはり或る時何かの用で小僧をよこしたが、折節正午に近いので、省亭は家族にいひつけて、午食をくはせて歸した。主人は小僧の歸りが遅かつたので、

「お前食事はどうした。」
と聞くと、

「渡邊さんが御飯を食べて行けと云つて、御膳をお出しになりましたから、頂戴して参りました。」

と答へた。そこで主人は、渡邊の事だから何か妙なものを食はせたに違ひないと考へて、何を食つてきたかと聞くと、まだ其季節には、食道樂にあらずんば殆んど氣もつかぬであらう所の、時節外れの鱧を皿に附けてくれたのであつた。

それを聞くと主人も、

「ヤ、流石に省亭だ。だが、こんな小僧に惜し氣もなく鱧などを食べさせるとは、省亭もなかなか變り者だなア。」

と手を拍つて笑つたといふ話がある。以て彼の食道樂を知るべしである。

此の純江戸つ子肌の畫家が曾て何らかの折に洋行した事がある。彼もさる者である、其洋行に就て服裝を考へて、斯くあるべしと工夫したものが何かといふに、法被股引の扮装であつた。其法被の背中に何か大きな紋のやうな徽章があつたかどうか、そこ迄は知らないが、よく云へば意氣な扮装、悪く云へば職人姿といふ服裝であつて、其の人が日本に隠れもない畫家である、

それがかやうな姿で臆面もなく歐羅巴を旅行した。そこに彼の面目躍如たるものがある。外國人の眼にこの服装が如何に映じたか。或は西洋の服装にや、近い所もあるから、案外外人の眼にはよく映じたかも知れぬが、こゝに珍とすべきは、この先生が金髪美人の心を捉へ得た一事である。

省亭は一體非常に豊満な、かつぶくのよい體格で、日本人には罕に觀る所であるが、或はこの體格が美人の好むところであつたかも知れぬ。何れ惡所であらうが所は獨逸で、或る溫柔郷の出來事である。深夜閨房の外に、窓を隔て、内方を窺ふ者があつた。美人はそれを叱して、頻りに斥けようとしたが、その者は何時迄も立留つて退く様子もなかつたので、遂に彼女は起き上つてピストルを取出し、それに擬するに至つて漸く逐ふことが出來た。この窓外の人物は云ふまでもなく、この女の情客の一人であらうが、それにピストルを擬してまで、この法被先生に情を専らにさせたなどは省亭此の處大成功で、却々隅に置けぬ、と在留の日本人たちが彼に感服したといふ一話がある。

松本楓湖は同門であるが、是は何處迄も先生の風一點張りで一向變化がない。そこに行く

省亭は、前にも云つた一種の教育を受けた結果として自發自得の味ひが頗る多い。即ち言ひ換へれば省亭の畫には獨特の所があり、畫の種類も頗る多方面にわたつて居る。その畫には何となく粹な所、氣のきいた所があるので、殊に下町邊の人々に喜ばれた。

彼は多くの場合、自分の好みの裂で表装をした。その裂地はいろ／＼あつた様だが、業平格ナリヒラ子などがその好みの一つで、それで表装すると畫とよく調和した。全體畫家が自分の好みの表装をする例は強ち少なくない。昔し岸駒が、必らず自分の出入りのものに袷具をさせるといふ事を條件として畫を描いたと云はれて居るが、併し、この岸駒の場合は貪る方の趣意から出たので、表装代にいくらかをかけて、表装からも幾何かの金をはねるといふ、頗る卑劣な仕方であつた爲めに、人々が擯斥した。省亭の場合は全くそれとは異つて、自分の畫を引立てるために、自分の好みの裂地を用ゐるのであつて、やゝもすると自腹をきつてまで、その好みの裂を使はせた。大體自分の畫を人に贈る時などは、自分でよく畫に調和する裂を用ゐて、立派に表装をして贈るといふのが例であつた。何處までも純江戸つ子式で、少しも卑陋のところがない。

八 隠れた畫家長井雲坪の事蹟

私の郷國越後に生れた畫家で長井雲坪といふがある。埋没して一向に聞こえなかつたのが、掘り出されて、或る數寄者に珍重されるやうになつた。私は郷國の畫家の作品は新古に拘らず、大抵見てゐる積りであるが、此人の畫を見たのは近年の事である。尤も此畫家は越後に生れたけれども、長崎で修業し、それから支那に遊び、一トかどの畫家となつて歸つて來ても、郷里に歸省したことはあるが、重もに信州に住し、終に信州に歿したので、その作品は多く信州に存し、郷國には餘り残つてゐない。私が長い間此人の畫に接しなかつたのは此爲めである。信州に多く此人の作品が散らばつてゐても、多くの人は田舎繪師の畫と輕んじて東京へ持出すこともなかつたらしく、私は東京に於ても近年まで見受けなかつた。

この人の畫を始めて世に紹介した人は東海銀行主菊池惺堂氏などであらう。氏は隠れた畫家の作品を特に集めて、それを品鷹月且して不幸なる作家の爲めに氣を吐いたが、長井雲坪も掘

り出された一人で、私などは其お蔭で六七年前始めて寓目するを得た。雲坪の閱歴に就ても惺堂氏の書いたものを見て始めて知り、その超脱の人格と奇警の行動とは少なからず惹きつけられて妙に興味を感じた。ひとり私ばかりでなく、書畫界にも影響して、一時この畫家の作品に高い價が附され、埋没してゐた畫が多く東京に持込まれた。雲坪の名が段々高くなるにつれて、其人の經歷の委曲を取調べる人も出て來たが、尤も委しく書いたものは、私の知る所では、一昨年の春頃であつたか、村松梢風氏が「中央公論」に書いたのがそれである。

私は此人の作品を五六幅所藏してゐたが、多くは人から贈られたもので、皆傑作と云ひかねる程度のものである。それにしても此人の特徴は十分に現はれてゐて、その飄逸の筆致と南畫の神髓に觸れ、毫も匠氣の無い處を看取することが出來た。私は常に此人の傑作を見たいと心掛けたが、その機を得なかつた。然るに昨年郷國新潟に歸り、滯在中私の友人がこの畫家の末弟の子息長井鴻一といふ年の若い人を伴うて來た。其人は此頃出版された許りの二冊の畫集を携へて示した。それが雲坪の畫集で、信州の數寄者に依つて上版されただけに、其國に珍藏されるものが七八分を占めてゐた。これには多くの畫が收められてゐて、山水、人物、花卉、各

方面に涉り、書幅も若干あつた。複製ながら此人の書を斯く多く見る事はこれが始めて、眞に雲坪作品の大観であつた。此内には少なからず傑作もあり精作もあり大作もあり、皆氣韻が生動してゐるので、少なくとも氣韻に於て越後南畫家の首位に置くべきものと思つた。有體に云へば、自分が思つてゐたよりも、より以上の手腕を有するものであることを感じた。流石に支那に修業もしたから、ともすると日本畫家に免かれ難い倭臭といふものがない。最初長崎の鐵翁や木下逸雲に師事した關係から、どことなくその筆致もあつて、蘭などは頗る鐵翁の風格を偲ばせるものがあつた。私が此畫集を見て別に得る所があつたのは、雲坪は畫に力量があつたのみでなく、書に於ても造詣の深かつたことを始めて知り得た。これ迄雲坪の書は畫の題識にのみ見てゐて、さまで書の妙を感じもしなかつたが、大字の書幅を見るに迫んで、斯道に於ても決して日本文人に一步を譲るものでないことが知れた。草體の書が殊に美事で、王鐸の風がある所から判すると、此人に私淑したらしく思はる。楷書は極めて希に觀るものであるが、この集の内に細字に書いたものがあつて、それを見ると、趙士謙でも學んだかのごとく、なかなか見上げたものであり、雲坪は確かに書を以ても立つことの出來た人と思はれた。恐らくは

彼れ自身の抱負も亦そこに在つたのではあるまいか。

雲坪の閱歴は近頃世に知れてゐるから、それを改めて書くには及ばない。私の此稿を草するのは、其閱歴を繰り返して書くのが目的ではなく、これ迄書かれたのには多少の誤謬もあり、餘りに潤色に過ぎて事實と遠かつてゐることがあり、又事實の漏れたものもある。それを聊か正したり補うたりして見ようと思ふのに過ぎぬ。大體雲坪の經歷は、前に惺堂氏に書かれ後に村松氏に書かれたやうに、藝術家にふさはしい、脱俗、奇警、清貧、不遇などが經緯をなして興味のあるものである。併し郷國で雲坪の親族に就きて親しく聞いて見ると、可なり誤りが傳はつてゐるやうである。その誤りを正せば、却つて面白味のある經歷を無趣味にする氣もないではないが、事實は事實として傳へねばなるまいと思ふ。

今までの雲坪の傳として書かれてゐるものを極めて荒ッボク叙して見ると、

雲坪は新潟に隣る沼垂ヌマケの貧家に生れ、其家は豆腐を作るを業とした。雲坪は天性畫を好んで、遠く長崎に師を求めんとした。同村に篤志の老婆があつて、其志を隣み、これに幾許の旅費を與へ、且つ日蓮行者の白装束を給し、旅中の便を謀つてやつた。雲坪は此好意

で長崎に迎りつき、初め鐵翁に學び後に逸雲に學んだ。逸雲は彼れを愛して雲坪の雅號を與へると共に自刻の印を與へた。逸雲が江戸へ上る時に彼れは從者として隨ふべきであつたが、その折は病んでゐて、それが叶はなかつた。然るに逸雲は江戸から長崎へ歸る途中船が覆没して、從者たる一門人と共に魚腹に葬られた。彼れはこの不幸を聽いて深く悲しみ、自分が師に隨伴したら共に死すべきであつたが、その不幸を免かれたのは全く偶然であるから、師に殉ずることを決して忘れてはならぬと茲に發心した。彼れは後支那に遊ぶの機を得て、その後藝術は益々進んだ。歸朝の後は、同じく支那に遊んだ安田老山は東京で時めいたが、彼れは郷國にも歸らず、信州にクスブレて、或る時は戸隠山に隠れたりして、常に清貧の境に在つた。彼れは或る旅舎で重患に罹り、深切の看護を受けた女中があつたが、終にそれを納れて妻とした。或る時老山が信州を通過の折、此舊友を態々訪ねて見ると、頗る貧生涯に居るので氣の毒に思ひ、酒間一封の金を贈つたのを、雲坪は一旦は納めたが、「君もこんな田舎にクスブレてゐるに東京へ來てはどうか」といふと、雲坪は遽に氣色を損じ、曩に受けた封金を無理やり返して家から追出したと云ふ逸事がある。又彼

れは深く師恩を感じて逸雲自刻の印を常に神棚に上げ置き、これを用ゐる時は再拜して仰し、戴いてこれを捺したといふ逸事もある。彼れが晩年重患に罹り不起と覺つた時は、藥劑を一切排して、師に殉ずる微忱を表したとも云ひ、又己れの葬式は日蓮宗の禮を以てすべしと遺命をしたのは、老婆の恩誼を忘れなかつた爲めだと云はれてゐる。雲坪は旅で得た妻を喪つて、後に妻を迎へた。先妻には子がなく、後妻には子が四人あつた。

以上が雲坪の閥歴として世に現はれてゐる大略である。これに由つて見ると、雲坪の風格は時流を抜いてゐて、徒らに名を賣るものでなかつたこともわかり、恩人に對しては信誼の厚かつたこともわかつて、滔々たる輕薄文人とはおのづから其選を異にしてゐる。此人にして風韻の高い畫を作つたのは決して偶然でない。同じく支那に修業した友人の老山が一たびは時めきながら、今は却つて顧みられず、埋没したる雲坪の作品が歿後幾十年の今日珍とせらるゝに至つたのも怪しむに足らぬと思ふ。

以上略傳の内、どれだけが事實で、どれだけが誤りであるか、自分は未だ十分調査の暇もないが、蓋し大體は事實であらうと思ふ。たゞ雲坪の家庭に就ては漏れてゐることが少なくない、

又誤つてゐることもある。自分の今度調べたのも重にその方面にあるので、前に掲げた雲坪の一族長井鴻一氏から得た材料に据つて二三叙べてみる。

雲坪の俗稱は長井元次郎で、父の名は甚六と云うた。母の名は不明であるが、其實家は越後北蒲原郡太子堂の石井兵左衛門というて、可なりの家であつた。雲坪には二人の弟がある、次弟は廣五郎、末弟は末太郎。

廣五郎は北海道で土木の業に成功し、其跡は今も函館で西洋家具店を營み、斯業界の随一と稱されてゐる。此人の姓が長井でなく長岡と云うてゐるのは戸籍の誤りで、廣五郎の屋號が角長で、其商標が四角の角のトレた其中へ長の字を書いた所から、戸籍吏が見誤つて長岡としたのが本で、姓はやはり長井である。北海道へ籍を移したのが明治十三年の頃で、實際書き誤つただけけれども、それを改めずに今も長岡と呼んでゐる。

雲坪は父の死後家督を相續し、雲坪の雅號を本名として戸籍に記されてゐる。雲坪の先妻には子が無かつたので、末太郎を養嗣子として家を嗣がせた。然るに雲坪の後妻には四人の子があつたから、其一人を末太郎の養子とした。四人の子は今も健在である。

雲坪の家は醫を業とした。雲坪を長崎に遊學せしめたのも醫業を修めしめんとしたのであるが、雲坪の志は醫にあらずして畫に在つた。彼れの長崎行は十五歳の持で、一家の同意を得て出かけたので、脱走ではなかつた。旅費は家から給されて、不自由のあつた譯ではない。或る老婆が與へたのは錢別で、日蓮宗の白衣を貰つた譯は、途中行者の姿で行けば安全であると老婆が心付いての厚意であつた。老婆は十五歳の少年の長旅を心配したものと見える。

長崎で雲坪が身を寄せた醫家が二軒ある。其内の一は渡邊清藏で、號を紫雲というた。他の一軒の名は不明であるが、この渡邊は渡邊華山の崇拜家で、其家には華山の作品が多く藏されてあつたといふ。

雲坪は醫家に託されたのだけれども、其志これにあらずして、畫にあつた所から、渡邊も終に共鳴して自から鐵翁に紹介し、後に鐵翁から逸雲に紹介して畫を學ばしめるに至つた。則ち雲坪は二大家に師事したのである。

一旦長崎から歸國したのは雲坪が十八か十九の頃で、本人が醫學を修めず、外の修業をしてゐるのを、親族は面白からず思ひ、近親の病氣を口實に呼び戻し、本人に異見を加へんとした

のであるが、彼れはそれに應じなかつたのである。

この歸省の時は父母は既に無く、末弟も當時母の實家に引取られてゐたので、雲坪も太子堂に赴き、母方の家に寓した。尤も沼垂には従弟長井由次郎といふがあり、そこにも僅かの間滞在し、竹馬の友である醫師小林某と共に始終飲み回つたと傳へられてゐる。

雲坪の家が豆腐屋であるかに傳へられてゐるのは誤りだ。従弟由次郎の家が豆腐屋であつたのは事實であるが、併しそれも近年の事である、それを取違へたものと見える。現在は其業を廢したと聞くが、沼垂には此由次郎の分家で、長井姓を冒してゐるものが他に一軒ある。

雲坪の支那に赴いたのは三十一二歳の頃で、三十八九歳の時再び歸郷したことがあるが、次項に記する理由で信州に去り、それが動機で信州に永住することになつたと云はれてゐる。

この歸省の時鬱勃の念遣り難く、由次郎宅に寓して舊友小林醫師と連日痛飲をつゞけてゐると、里人は一途に長井が名醫となつて歸つて來たと思ひこみ、大勢の患者が山なす勢ひで由次郎の門前に群をなした。雲坪は驚いて倉皇裏口から逃げ出し、到底郷里には居り難いと信州に入つた。

又長崎の鐵翁門下に在つた青年時代に一たび歸省したことは前にも言つたが、其際母の實家に滞在中、眼疾に罹り臥床してゐると、一人の旅繪師がやつて來て、鐵翁の門人であるが、一枚書かせてくれと云ふので、家人は畫師と聞いては無下に僉略にも出來ず、家へ上げて雲坪に其事を告げると、雲坪はこゝへ呼べと枕邊に招き、眼に繃帶を施しながら起き直り、俺は鐵翁門下の桂山（其頃はかく號した）だが、同門に君の名を聞いたことが無い、察する所、君は鐵翁門人を詐稱するものであらう。苟くも畫家ともあらうものが名家の名を利用するとは不埒である。速かに立去るべしと大喝し、家人に命じて追出さしめた。家人は此繪師の爲めに飯の用意もしてゐたのであるが、繪師はよもや鐵翁門人が此家にあらうとは夢にも考へず、一時の方便に鐵翁門人と云うたのであるが、さて見現はされては寸時もゐた、まらず、一散に遁け出したのを、家人は何故とも知らず氣の毒に思つてゐると、雲坪は且らく默考してゐたが家人を呼んで、あの男はまだ遠くへは行くまい。呼び戻せと云ふので、二三の壯丁が手別けをして追跡したけれども終に行方が分らなかつた。後に弟が何故急に呼び戻す氣になつたかと聞いたら、あの男は師の名を利用して不埒の奴だが、その畫は相當に出來てをる、今少し修養を経れば立

派な書家になるであらう。それを怒りに任せて追出したのは不覺であつたと悔いたといふ。

沼垂に於ける淨徳寺は雲坪が幼時手習に通つた縁故があるので、最初長崎から戻つて來た時繪馬を描いた額を納めたことがある。二回目に歸省した時、其額はどうなつたとききりに見たがつたが、終に見當らなかつたので、雲坪は更に菊花を畫して住職に與へた。然るにそれも今は失せて所在が知れず、住職は残念がり、頻りに物色しつゝ、あると聞いた。

以上の事實は私が長井鴻一氏から聽き得た所である。これまで雲坪の傳として書かれたものと、どれだけ違つてゐるか。今は手許に惺堂氏のも村松氏のも持合はせてゐないから、對照して見ることの出來ないのを遺憾に思ふが、少なくとも親族の直話であるから、材料は精確であると思ふ。若し村松氏のものされた長篇の補遺ともなることが出來るならば、私は本意とするのである。

九 賴山陽は何故に人氣があるか

附山陽の逸事數則

東西古今の文豪で長く名聲の傳はるものと否らざるものとがある。必らずしも其技能の優劣に依るものではない。不朽の大文章を残した人でも忘れられて仕舞ふものもある。一部の人に持て囃されても一般に及ばないものもある。一時持て囃されても久しく續かないものもある。賀茂眞淵は國學の泰斗であるが、社會一般が持て囃すほどポピュラーでない。青木昆陽は偉い學者である。其燒芋屋に尊崇され、豊碑の建設された譯は、その學問の爲めでなく、甘藷移植の恩人としてある。新井白石などの偉い學者でも、俗流はこれを崇敬することを知らぬ。文豪にも頗る幸不幸がある。

世間で蔭日向なく崇敬を博してゐるものは、往々人格が神化する。菅公は文學の祖と云はれ、神としてウオルシツプされてゐる。空海は大天才で永く崇敬の的となつてゐるが、これも亦宗教的である。此等の人の名聲あるのは強ち人氣があるからと云ふ譯ではない。長く國民の人氣を保つものはその言行技能に原因するけれども、單にそればかりに依るとは思はれない。人氣を博するといふには複雑な原因があらねばならぬ。あらゆる美德と才能を備へてゐても、その人が必らず人氣を博するとは言ひかねる。時代の精神に觸れ大衆の氣分に投ずるの素質が無け

れば、人氣は博し得られないものである。

頼山陽が何故人氣があるかといふことを書くに就ては、以上の如き前置が入用だ。山陽といふ人を赤保々に云へば、實は疵だらけの人である。青年時代は脱藩をした。放蕩をやつて父母を困らせた。勘當の身となり廢嫡された。學問はどうかと云ふと、當時漢學を貴んだ時代には經學の造詣の深淺が即ち學問の尺度であつた。然るに山陽は幾んど經學を修めなかつた。山陽は史家を以て任じたけれども、今日から見ると、その史學はお話にならない程の粗笨のものであつた。その最も長所であつた文や詩や書などにしても、當時山陽よりも長じたものがあつたのである。畫などになると、全くの素人畫であることは言ふを待たぬ。そして當時中央の最高學府たる昌平黌に教授の席も占めず、京洛にかゝんでゐて、割合に早世した此人が死後人氣を大いに集めて、年を経るに従ひ、ますます其名聲の揚るのは何故であらうか。

山陽の著述が冷熱なく歡迎を受け、「日本外史」の如きは無際限に版を重ね、版式も種々あり、譯書もあれば註釋書もあり、三四の外國語にも譯されてゐる。漢文の廢り行く世の中に斯くも普行することは、山陽の人氣を見るの一徴であらねばならぬ。およそ山陽に關する著書の明治

以來出版されたものだけでも幾十を數へるであらうが、それが多く賣行のよいのも山陽の人氣が然らしめるものである。山陽の書畫の廣く珍重されるは今日始まつたことではないが、年を経るに従つてますます價を高め、今は空前の價をあらはしてゐる。斷簡零墨と雖も山陽の筆に成るとし云へばそれが珍重されて、破格の價を以て賣買される。大體故人の墨蹟はその居住地に存し親戚故舊の手に傳はるのが通例であるのに、山陽のは全國に分布してゐて、縁故の有無に關係が無い。そして山陽の書畫は高い階級にも低い階級にも喜ばれ、政治家にも商人にも老人にも壯者にも歡ばれてゐる。他の先哲の遺墨の愛重されてゐるものは勿論多いけれども、山陽の遺墨の喜ばるゝのは些しく違つた趣がある。空海や眞淵などの墨蹟になると、愛すると云ふよりも寧ろ敬する方で、所藏者の氣分が違ふのである。床に幅を掲げての氣分にしても、空海眞淵のになると頭も自然下るが、山陽のはそれとは違つて親しむ氣分が起る。畫などは、其性質上誰れの作でも愛玩的氣分が起るものであるが、山陽のは、その書でも畫に對すると同じ氣分が起るのは、大衆の趣味に適つてゐるからであらう。山陽の人氣のある有様は現實人の目前に在ることであるから、これより以上絮説を要せぬと思ふ。

山陽の人氣のある事實は以上の如くである。さてその原因に就いて人は多く言ふ、山陽は幕府の末造に革命氣分の漸く萌した時、「日本外史」を著はして勤王の大義を鼓吹し、志士を鼓舞作興するに大いに力があつたから、人氣を一身に集めたのであると。如何にも其通りである。尙ほ山陽の子に三樹三郎があつて勤王の爲めに身を犠牲にしたことも閑却してはならぬ。三樹の遺骸を埋葬するに方り、其片腕を奪ひ去つた幕臣があつた。その人が三樹の片腕を神棚に安置し、毎朝禮拜したと云ふが、此逸事は如何に幕末に山陽崇拜熱の高かつたかを語るもので、幕臣ですら斯くの如くであるから、肉躍り血湧く當時の志士が、山陽の文や詩に激勵されたことは想像に餘りある。併し、これだけの事で山陽の人氣がいつまでも持續するとは思へない。勤王論は今日山陽の講釋を待たず、誰れも心得てゐる。尙ほ又勤王論を熱烈に主張したものは決して山陽ばかりではない。然るにそれらは皆閑却されて、ひとり山陽のみが名聲を持續するのみか、ますますその名聲の騰る所以は、他に複雑の原因があらねばならぬ。

愚按では、山陽の作品には民衆に喜ばるべき素質がある。言ひ換へれば、山陽は國民的文藝家であるが故に、廣く長く一般から渴仰さるゝのであると思ふ。「日本外史」が今日尙ほ讀書子の

愛する所となつて居る所以も、やはりその歴史が國民の嗜好に投ずるやうに書かれて居るからである。山陽は外史を著はすに就て、一種の新しい文體を工夫した。それが丁度國民の嗜好に適する文體であつたのだ。それより以前の歴史家は、日本の歴史を書くに當つても、無暗に支那の文章を摸倣した結果として、その書かれた歴史は恰かも「左傳」でも讀むかの如く、日本の面目が一向發揮せず、さながら我が歴史を支那人を備うて書かせた様な風があつたが、山陽はこれを排して一生面を開いた。だからどの頁を讀んで見ても、日本の面目が躍如としてゐる。全體支那崇拜の盛んであつた當時、新體の文を臆面もなく縦横に遣つたのは、大膽なる業で冒險の行爲とも見るべきものであるが、山陽はその冒險を敢てして成功したのである。勿論新體の文にはいつも非難が伴ふもので、「日本外史」の始めて出た時には、其文章に就いて漢學者は彼是云うたものである。丁度昔し漢の時代に司馬遷が「史記」を書いた時に、其文章に就いても歴史の編制に就いても非難があつたと同様である。支那では久しい間歴史と倫理を混同して風教に害ある事を歴史に書く可からずとした。司馬溫公の「資治通鑑」などが其一例である。班固の「漢書」なども、やはり資治通鑑風のものである。司馬遷の「史記」に至つては、歴史

は歴史であると云ふ見解から刺客の傳まで收めてゐる。そして文章もすべて寫實であつて、刺客を傳するにも刺客其人の性格に依つて書き振りを異にし、其人を躍如たらしめてゐる。其歴史の編制は丁度今日の西洋のその如くで、倫理道德とは全く離れたものとなつてゐる。此新體の歴史は當時の史家を驚かし、刺客や盜賊の事蹟を書くなどは以ての外だ、と班固の如きも非難したけれども、後世になつて見れば、此司馬遷のやり口が歴史の本體を得てをると稱讚され、それが不朽の書となつた。山陽の新體の文も司馬遷に私淑したと云はれてゐるが、それが新體であるだけにやはりいろ／＼非難もあつたが、終には「史記」同様に不朽の歴史となり、萬戸必備のものとなつた。

漢學隆盛時代には、文章は漢魏六朝の古文に摸倣し、歴史を書くにも飽くまで古體の文に據り、山陽同時代の龜井昭陽などは「書經」の文に倣つて歴史を書いた。それに對し山陽は、そんな無駄の骨を折つても、恐らく世間には流布しまいと云うたが、果して其通りであつた。右の如き次第であつたから、山陽の「日本外史」に對し、いろ／＼の文章家が筆を加へたものもある。聖堂などでは悪文の標本として、或る部分を抄出して學徒に直させ、文章の研究に資し

たこともある。又史實も頗る誤つてゐるといふて、川田養江の如きはその誤謬を指摘して全然書直さんと企て、いくばく筆を進めたこともある。實を云へば、「日本外史」は、歴史と見るよりも一篇の詩と見る方がよいかも知れない。考證本位の歴史と見る可からざるは言ふまでもない。併し、史實は正確でないにしても、描寫は如何にも妙を得てをる。英國の史家マコーレーは、グラヒツクの書き方をして世界の稱讚を博したが、山陽の書き振るも亦グラヒツクで、英雄の行動でも戰爭の記事でも、さながら繪を見る如き生彩があり、讀者に興味をそゝるのは、主として寫實の文の然らしめる所と云ふべきであらう。

山陽の新體の史筆は國民の嗜好に適したものであつた。それが國民全般の歡迎を受けたのは決して偶然でない。これを繪畫に譬へると、古文家の文章は土佐や狩野の畫のやうなもので、少數の貴族に喜ばれたにしても、國民一般の喜んだものは、寧ろ浮世繪であつた。浮世繪は久しく市井の俗畫として、高い階級に排斥を受けたけれども、實生活を如實に描寫したものは浮世繪である。その廣く社會に流布した點から見ても、これが眞に國民的繪畫であるのだ。一たびは士君子の鑑賞す可からざるもの、如くに考へられた此の畫が、今日となつて世界の趣味家

の賞讃を博し、内地に於ても大いに聲價を發して來たのは誰れも知る通りで、畢竟、國民的繪畫として一般に認められた結果に外ならぬ。「日本外史」の文章はこの浮世繪にたとへるべきもので、その描寫がグラフィックで、読み易く解し易からしめた點は、丁度北齋や豊國の技を文章の上に試みたものと言ひ得るであらう。又その論贊になると、慷慨の氣が漲つて、懦夫をして起たしめるの力がある。「日本外史」の間斷なく聲價を保つてゐるのは此故であつて、勤王の意が寓されてゐるといふ單純な譯ではない。

全體山陽は、學者といふには餘りに經學に暗かつた。山陽は才の人であつて、學の人ではなかつた。併し、經學に暗かつただけそれだけ其の拘束を脱して、縦横に天稟の才を馳せることが出來た。若し山陽が後ればせに經學者となつて、力をその方面に用ゐたならば何うであつたらうか。遠い過去は兎に角として、山陽の時代に於ては、經學は國民文藝家に取つて既に餘り必要のもので無くなつてゐた。若し山陽が經學に造詣深く、經書の注疏に没頭したとすれば、あの位の天才を有してゐても、恐らくは遂に一學究となつてしまつて、自然種々の束縛を受け縦横の筆を揮ふことが出來なかつたであらう。元來經學者といふものは、多くは文章に拙なも

のである。山陽のやうな氣の利いた文章は、到底經學者に望み得べきもので無い。畢竟山陽は經學に暗かつたが爲めに、却つてあのやうな氣の利いた文章を書くことが出來たと言ひ得るであらう。山陽の文章は如何にも學者ばなれがしてゐて、腐儒の臭氣が無い。そこが又國民の嗜好に投じた所以ではあるまいか。

山陽は青年時代に廣島藩を脱したので、無論藩祿を食まなかつた。後に大家になつてから、諸藩より抱へたいと云はれてもそれに應ぜず、一生處士で終つた。若し山陽が脱藩しなかつたら、無論藩儒春水の嫡子である關係上、その後を承けて藩儒となり藩祿を食んだに相違ない。随つて生活難も無かつたであらうけれども、田舎學者を以て一生を畢つたであらう。如何に氣骨があつても、あれほどの氣燄を吐ける譯のものでない。何の束縛も受けず、自由の境遇にたればこそ勝手な主張も出來たのである。父母の藩にすら仕へないのだからと云うて、姫路藩などの聘に應じなかつたのも、山陽としては筋の通つた行き方であつた。山陽は此爲めに生活上少なからず困難を感じた。併し、飽くまで操守を枉げず、權貴に對して屈する所が無かつた。今日では權貴に屈しないなどは餘り困難のことでないが、あの頃は事情が異つてゐた。京都の

文人などは兎角表を飾つても内實は弱く、暮夜密かに權門に媚を呈するものがあり、それが利口のやり口でもあつたのだが、山陽はどこまでも地歩を保つて、有力の藩から書を依頼されても、吾は畫師にあらずと勿附けた。「日本外史」を當時の執權樂翁公に呈するにしても、先方から望まるゝので無ければ呈したくないと頑張つた。内實はいろいろ運動をやつたにしても、表面は飽くまで地歩を保つたのである。こゝらが全く江戸氣質で、京都の文人としては珍らしい。大田錦城が始めて山陽の居を訪うた時に酒の饗を受け、あとで何と評したかと云ふと、主人も酒も共に江戸風だと褒めたとあるが、蓋し適評である。山陽の布衣的自由の行動は、國民的性格を飾りなく赤裸に發揮したとも云ひ得るであらう。彼れが國民的人氣を博しつゝ、あるは決して偶然でない。

山陽は前陳の如く高く標持したけれども、決して頑固な唐變木でなく、頗る人情に通じた解人であつた。彼れは青年時代には確かに不良青年であつた。彼れは嚴島の遊里に通つたり、寡婦に通じたり、遊蕩資金に窮して悪策を弄したり、乞食姿で脱走したり、捕はれて座敷牢に入れられたり、流離時代に傭書に甘んじたり、婦を定めんとして拒絶を喰つたり、世味の酸いも辛

いも嘗め盡したものである。彼れは俗物でもあり通人でもあつて、世間を理解してゐる。彼れが言ふことは人情の琴線に觸れ實生活に觸れてゐる。彼れが手紙に妙を得てゐるのも、つまり人情味の發露に外ならぬ。彼れの筆一たび動けば、決して何人をもそらさぬ。其如才ないと云うたら、待合の女將よりも、ヨリ以上である。併し、いつもどこかに地歩を占めてゐる。例へば金を借りる場合ですら、尙ほ且つ自己の地歩を占めて居る。こんな手紙の書きぶりは、到底經學者などの企て及ぶ所で無い。山陽の手紙は、その存命中に於ても一般に珍重され、友人ですら之を保存したものである。爲めに山陽の手紙の今日に傳はつて居るものは非常に多く、自分の寓目したものだけでも五百通に達する。若し全部を寄せ集めたらば、幾千通といふ多數に上るであらう。斯様に珍重され保存さるゝ所以は、山陽が高名な文人である爲めよりも、その書き振りにえも言はれない面白味があるからである。山陽は、確かに手紙の文にも獨創の一體を開いたものと言つてよい。山陽以前には、久しく支那風の形式に拘泥した手紙の體が行はれて居つたのであるが、その形式を破つて、情味本位の、氣持のよい、手紙の書き方を教へたものは山陽であると云はねばならぬ。山陽の手紙は正さに通人の筆であつて、國民用書簡の軌範と

爲すに足るものである。

山陽の書風について見ても、亦國民的であると云ひ得る。晩年の書は殊に熟したもので、適麗の感が深い。能書ではあるけれども、書家の臭氣が無く、又志士的の粗豪な處も無い。何處と無く氣品があつて、流暢を極めて居る。云はゞ萬人受けのする書で、誰れが見ても氣持よく感ずる。其書が近來空前の値を生じて來たのは、全く何人にも喜ばれる書風であるからで、此點も亦廣く國民の嗜好に投じて居るものと言つてよい。

山陽は如何にも多方面の趣味家であつて、此多方面の趣味家であつたといふ事も、亦種々の方面に人受けのよい原因をなして居ると思ふ。山陽は書畫や骨董に鑑識のあつたことは勿論、煎茶もやれば酒も飲む。印を彫つたり、盆栽を玩んだり、平家を語つたり、芝居を好んだり、その嗜好は、有らゆる方面に及んでゐた。この多様の趣味が自然文章の上にも現はれ、従つて其文章には他人の及ばざる趣味を生じて來る。だから風流を喜ぶ人達は、どうしても山陽を喜ばざるを得ぬことになるのだ。書畫の題識とか、骨董の記文とか、それが山陽が書けば重きを爲すといふのも、山陽が其等の趣味に深く通じて居るからで、之を讀めば、何人といへども首

肯せざるを得ない妙がある。その書畫屋、骨董屋に喜ばれ、茶家にも酒客にも其他の風流人も渴仰され、信者の範圍が頗る廣汎である點も、亦國民的であると云ひ得らるゝであらう。

要するに、山陽ほど手廣の信者を有つてゐる學者はない。彼れの信者は全國に及んでゐる、そして或る階級に限られてゐない。山陽は此意味に於て天下の人である。山陽自身も廣島の人として終りたく無かつたので國を脱したのだ。廣島が生んだからと云うても廣島の人でなく、京都に帷を垂れて一生を畢つたと云うても京都の人でない。彼れは日本國民共有の名器であらねばならぬ。彼れも天下の人たらんことを期したに相違ないが、現實の如き人氣を博しようとは、恐らく生前思はなかつたであらう。その著述が無限に賣れ、其遺墨が全國的に分布し、その墨蹟が千金の高價で賣れるなどは、夢にも思はなかつたであらう。しかし、これは不思議でもなく僥倖でもない。廣い民衆の氣合に投ずれば斯くあるのが寧ろ當然である。彼れは意識してか否か、彼れの文藝は當時に於て既に國民の氣合に投じた。別して彼れが暗に冀望した革命後の民衆に投じたから、彼れの名聲がますます揚り、その人氣は年月と共に高まつて來るのである。國民の意氣に投ずれば何事も斯くある筈で、ひとり文藝のみではない。

終りに臨んで一言を要することがある。從來山陽に對して二様の見方がある。即ち山陽を一種の偶像として、その如何なる疵をも辯護する人があると共に、又山陽嫌ひの一派があつて、そのアラ計りを摘發する人もある。併し、その何れも中庸を得たものと云ふことは出来ぬ。私は、山陽を以て最も國民に親しみのある先輩とするものであつて、山陽に買ふ可き處は、常識があり、人間味があり、多趣味、多藝で、且つ頗る氣格の高い處にあると思ふ。従つて一概に之を崇拜することを非とすると共に、その若い頃の瑕瑾をいつまでも叫んで之を罪することを欲しない。私は、山陽を國民的性格を遺憾なく發揮した愉快なる文豪として大衆と共に親しみ、且つその人氣を長く續けたいと思ふ。

拙著「隨筆頼山陽」が媒をなして、山陽に關する種々の物が机邊に集つて來るので、居ながら山陽の逸事を知ることが出来る。先頃兵庫縣本山村安東忠次郎氏より一簡を寄せられた。其中に、山陽が王香と嵐山に遊んだ折誤つて王香携帯の瓢を破壊したので、それを修理して一詩を題した、其詩が録されてあつた。乃ち詩は、

余與_ニ王香_ニ遊_ニ嵐山。誤破_ニ酒瓢。爲補_レ之。係以_レ詩。

醉破_ニ君瓢_ニ花外村。補吾膠漆尙溫存。庚々横理君宜_レ記。亦是春鴻舊爪痕。

襄

右の如くで、破損の處が赤い漆で繕つてあり、詩も同じ赤漆で書かれてゐるさうな。そして此瓢が安東氏の手に入つたと云ふことで、其王香とある人は、私が「隨筆頼山陽」に録した、廣島の王香で、「王香園叢書」を出版せん爲め山陽に序を請うた人であるまいか、と問はれたのである。如何にも名が同じであり、詩の題が嵐山に遊ぶとあるから、山陽の序にもある、王香と嵐山に同游の折の事に相違ない。そして酔うて瓢を破つた出來事と、其瓢の山陽の詩を留めて今尙ほ存してゐる事は始めて知る所である。瓢は破損の爲めに好詩を得、それが爲めに今珍とさるゝのである。王香は珍文と稱したことを序ながら附記しておく。

民友社出版の「頼山陽書簡集」は二千頁に垂んとする二冊の巨卷である。熟知の木崎好尙氏や光吉元次郎氏が徳富蘇峰氏の囑に應じて編纂したので、光吉氏生前しばらく訪ひ來つて、その經緯を語つたことがある。一千通の書簡を採收したと聞いたから一千頁一冊位のものかと想

像したるに、案外の巨冊である。山陽の書簡集は従来も出版されてゐるが、博收千通に迫んだのはこれが始めである。無論これまで刊行されたものも皆納めてあるに相違ない。尙ほ逸してゐるものは決して少なくないであらう。火災などに焼け失せ、若しくは他の事情で棄つた者などもあるであらう。それは已むを得ないとして尙ほ埋没してゐるものを蒐集したら、別に一千頁位の一冊を爲すであらう。山陽も随分手簡の多作家と謂ふべきだ。併し、交はりの廣い人や繁劇の事に當つてゐる人の一生の手紙を蒐めて見たら、随分澤山のものであらう。強ち山陽を多作家と稱すべきでもなからうか。しかし、一千通が一千通悉く保存の價値があり、編纂刊行の甲斐があるものは、恐らく山陽に於て始めて見るの例であらう。西洋では文藝家の書簡を集めて公刊する例は無論澤山あつて、その書簡が藝術品として取扱はれてゐる。日本では新井白石の書簡の如き、多くは考證を包有したもので、普通の俗牘と異つてゐるが、山陽のはそれは違つて日常の用を辨するもので、それでゐて藝術品たるの價値がある。自分は「隨筆續山陽」に山陽の日記はその手紙である、山陽の隨筆も亦手紙であるというたが、この巨冊のごとく纏まつてみると、自分の説の虚ならざることが知れるのである。山陽の書簡も、實は大著述と云

はねばならぬ。山陽は、必らずしも後世コンナ工合に自家の書簡が纂輯さるゝことを期して、その折々に書いたとも思はれないが、交付した其家に傳はる位は期したかも知れない。随つて筆作に意を用ゐたかも知れない。それは何れにもあれ、輕率に手紙を作る可からざる教訓は、この書簡集に就て得らるゝのである。

山陽の逸事に就て尙ほ他に記すべきものがある。此頃郷人から一卷の詩畫を示された。展べて見ると、卷頭に唐美人に擬した彩色入の婦人の圖があり、その坐邊に石菖蒲を盛つた盆が置かれてあつて、美人はこれを見つめて満面憂色を湛へてゐる。此圖に附隨して三家の詩が録してある。皆此の美人を思ひ遣つた閨怨の詩で、詩中の識語に、甲戌の歲、頼山陽黃薇に游んで歸らず、情婦空閨を守る、其婦、名美瑯とあり、詩中には山陽黃薇の鞞浦にあることを云ひ、又石菖蒲は山陽の愛する所であることをも云うてゐる。此等の事實に依り、好事家が山陽の情事を一幅の卷に收めたものであることが知れた。畫の筆者は琴浦とあるが、私は未だ其人を知らない。詩を賦した三家も、小石と琴浦の外は名を匿してゐるから誰れかは知り難いが、大方、

山陽と懇意の文人の戲筆であらう。随分好事家は假託のものを作つて、人を欺くこともあるから油斷が出来ないが、此卷は假託のものとも思へない。其譯は、詩の題識は事實と吻合してゐる。山陽系譜を案するに、甲戌は文化十一年で、山陽三十五歳、此年果して廣島に歸省してゐる。歸省の目的は父春水の病を見舞はん爲めで、八月十日京都發程、備中其他を経て八月廿三日廣島に歸着してゐる。識語の言ふ所は決して假託でなく、正さに此歸省の留守中の事であるとする。當時血氣の斯人にありさうなことである。但し、山陽が梨影を其室に定めたのは此歳であるけれども、攀花折柳の事があつたとて不思議もあるまい。所謂美瑯なるもの、本體は知ることは出来ないが、詩中、淀流を洄るとあるを見れば、浪花あたりの花柳界のもので、もあらうか。山陽の暗黒面を知るの一資料である。

自別君來思萬端。夢魂縹渺渡層瀾。避人頻數郎歸日。不解年光似轉丸。

几上生塵視欲蕪。汲泉空養石菖蒲。庭前葉落看無色。不獨妾容愁且癯。

偶得郎書喜且悲。燈前讀罷背燈啼。閑呼小婢喃喃語。郎在黃薇輶浦西。

甲戌之歲。賴山陽遊黃薇。不歸。其姪美瑯。獨守空閨。不堪相思。察其情態。爲賦數

絕。以寄。

懶儂戲草

獨對菱花閒沈思。今朝懶畫遠山眉。附鴻欲寄心頭事。陰憚更多於別時。

冷枕單衾易惹憂。屏風恁地掩牀頭。畫中又是鴛鴦子。偏使阿儂添幾愁。

岑寂一場無所訴。愁來萬事摠關情。傷心厭聽黃昏雨。向夜偏成點滴聲。

夕陽樓外雨初乾。獨捲珠簾立晚寒。今夜新升眉樣月。憶儂郎亦應憑欄。

琴浦鮫郎題

征帆影暗暮烟愁。妾亦買舟洄淀流。恨妾不如舟上月。追郎直到海西頭。

眉褪鴉青唇褪朱。悄然歸對一燈孤。空室蕭々何所有。阿郎曾愛石菖蒲。

空房一枕不堪清。難奈柔腸屢易驚。愁夢床頭誰喚覺。風吹落葉撲窓聲。

郎馬登山々有險。郎舟浮海々多瀾。妾身何恨愁憔悴。但恐郎輕行路難。

忙拆瑤絨忽蹙眉。歸期未識定何時。了鬟不解愁思切。挑得燈花頻笑嬉。

甲戌冬

小石龍題

山陽は歌も詠んだ、しかし其歌を書いた短冊の眞物といふものは幾んど見られ無かつたのだが、近頃其れが顯はれた。文化七年に當時大阪に在つた上州館林の藩士奥村就道が其六十の年祝ひに造つた帖の中に菅茶山の短冊と並べて貼つてあるのが即ち其れで、

奥村のぬしをことぶく歌

おしてるや浪速の三津にすむ人のみづはぐむま

でおひよとぞ思ふ

襄

とある。丁度山陽が茶山の廉塾に居つた時のものだ。茶山のは「蘆原にかゝれるつゆの惠こそ長きよはひのれざしなるらめ 晉帥」となつてゐる。そして兩人とも別に詩の短冊を一枚づゝ添へて居る。(近刊竹柏漫筆に据る)

第二 明治初頭文壇の回顧

○
私の東京に出たのは明治八年であるが、それまでは小説に觸れたことが無かつた。其頃東京の書生社會では馬琴の小説——「八犬傳」や「弓張月」や「美少年録」などを讀むことが流行で、まだ其頃は貸本屋が江戸時代の型で方々にあつた。自分は番町の親戚の家に寄食してゐたが、親戚の子弟が毎日麴町の貸本屋から「八犬傳」を三冊五冊と借りて讀んでゐるので、自分も始めて馬琴の作に親しみ初めて、「八犬傳」を全部讀み通し、追々其他の大部の小説にも及んだ。七五調の文章が其頃大變におもしろく思はれたもので、「八犬傳」中のサワリ文句は多く書生間に諳記され、信乃濱路別れの一節などを諳誦が出来ないと、友人間に何となく片身が狭く感ぜられた。西洋の語學を習つてゐる一方、舊派の小説に耽つたなどは妙なことだが、此頃は

新體の小説はまだあまり無かつたやうである。

それから明治九年に開成學校の豫備門に入り、寄宿舎で坪内雄藏君と交つた。君は當時大の馬琴通で、馬琴のあらゆるものを讀過してゐたのみでなく、馬琴脈の文章を縦横に書いた。何といふ標題であつたか忘れたが、馬琴の顰に倣つて南朝畑の材料で一冊の小説を書いて示されたのを見ると馬琴ソツクリで、例の七五調で、おもしろいかけ言葉もあり、サワリもあり、殺し文句もあるので、自分などはエライものだと思つた。坪内君は馬琴ばかりでなく、三馬でも春水でも一九でもあらゆる作家に通じて、談話の文はなか／＼得意であつた。それはズツト後に書いた「馬骨人言」などで何人も會得したであらうが、大學時代に書いた談話文字で自分の記憶にあるのは、五六人の同窓が連れ立つて、鴻臺^{コウダイ}へ徒歩で往返した、其紀行を膝栗毛風に書いたものであつた。ある時坪内君が示された小説目録、それは讀み本、洒落本、人情本、草双紙の類まで千種以上も收めたものであつたが、何の目録かと聞いたら、郷里にある時名古屋の大惣(貸本屋)から借覽した書名の大略を書き記したのであると聞き、その涉獵の廣いのに一驚を喫した。坪内君は其頃既に一ト廉の小説家であつたのだ。

自分は大學の文科に入つたが、志す所は政治にあつたので、文學とは没交渉であつた。随つて文學に就て何も云ふ資格が無い。唯親しい友に坪内君のごとき人があつて、學窓時代から今日に至るまで、四十數年の間交情が連続してゐるために、此友人から文學上の薰陶を受けたことが少なくない。時折往來して話題となるのは文學談で、自分からワカラヌ事を問うたこともあつたが、坪内君はいつも深切に一時間も二時間もその蘊蓄を傾けて諄々として説き聞かされたので、興味を感じて時の移るを忘るゝのが常であつた。コンナ偶然の往復で自分の受けた文學上の薰陶も少なくないが、まして毎年例として熱海に坪内君と落合つては、一週間位毎日五六時間にわたり、坪内君の文學論を聞くのが定例で、新しい各國の文學思潮なども例の巧みな説き方で深切に話してくれられた。殊に劇に關しては古今東西に通じて該博な講説があつた。考へてみると坪内君には多くの門人があるが、自分は恐らくは尤も深切に且つ尤も多量に教育を受けた門人であらう。自分は文學趣味が缺けてゐるものか、性來の魯鈍は、薰陶を受けた割合に一向開發する所がない。しかし、多少にても文學に就て理解のあるのは、坪内君のお蔭である。坪内君は内々自分を劇趣味の歸依者にしたい下心もあつたらしく、特に熱心に劇に關し

て講説されたが、どう云ふものか自分には劇の趣味が起つて來ないので、坪内君もいつぞや、君は何でも趣味に通ずる人だが、劇だけは取除けかね、と云はれたこともある。又、君に劇の趣味があると俺も助かるが、など云はれた事もあつた。如何にも坪内君の期待に背かないで劇趣味があつたら、折角參加した文藝協會にもまう少し手腕が揮へたのだつたらう。併し、坪内君は自分に對しては特別の同情がある。いつぞや大隈老侯が雑誌を起さるゝに付自分に擔任せよとあつた時などは、坪内君は「早稻田文學」を人に委して以來連續的に雑誌に執筆することを思ひ止まつてゐられたのだが、此事あるを聞き、君がやるなら、俺も努力して助筆すると云はれた。此雑誌は遂に自分が擔當せずには了つたが、坪内君の同情は眞に感謝に堪へない。

私は坪内君と右いふ様な間柄であるから、坪内君の作などを是非する能力も資格も有つてゐない。唯大學同窓時代の事を追憶して見るのに、自分の觀察が誤つてゐるかも知れないが、多少の説がある。それは何かといふと、前にも云うた通り坪内君は學窓時代に既に立派な舊派の小説家であつた。少なくとも非常の素養があつた。其素養が結局坪内君を大家となしたのであるけれども、西洋風の小説に推し移るには或は却つて累をなしたかの様にも考へらるゝ。どう

も一つの形式に熟してゐる人は、それに捕へられて他に轉ずる場合には困難を感じるものである。坪内君に若し舊派の小説の筆が無かつたとして、西洋小説に早くから没頭したら、初めからモット新しい小説が書けたであらうと思はれる。坪内君の「書生氣質」は有名なものであるけれども、舊派の筆致や趣向が隨處に散見するのも其素養の然らしめたものではあるまいか。半峯高田君があの小説に對しての批評は、今想ひ出すが、半分書きかけて、何年であつたか、正月の二日か三日に共に静岡へ旅行した事がある。高田君は批評の後半を静岡の酒樓で書き畢つたことを思ひ起すが、昨今讀んで見ると、高田君の批評は坪内君の病根によく言及してゐて、高田君の小説眼が一段高い様に思はれる。全體高田君は坪内君と同窓であるが、西洋小説の繙讀は高田君の方が少しく早かつたし、又相當に見解もあつた様に思ふ。此頃の早大出の若い文學者達は、當時の高田君の批評を讀んで意外の感に打たれ、高田さんもなか／＼エラカッタのですナ、と云うた者もあるが、高田君も文學者たらん事を志したのであつたならば、恐らくは人後に落ちなかつたであらう。但し、創作家となるよりも批評家の方であつたやう。今日の高田君は教育家經營家であるけれども、學窓時代は文學の天分をあらはしてゐたものである。

高田君は坪内君の如き小説の筆を動かす能力は無かつたが、英文を縦横に書き、相當文學的に書き得た人であつた。多分日本風の文章に素養が少なかつた爲めに、英文には却つて達したものであらう。近日三宅雪嶺君が其個人雜誌「我觀」に吾等同窓の事を書いてをる内に、高田君の事に迫んで、其本領は文學であるか政治であるか、疑はしいと云うてゐるが全く同感である。兎に角同窓時代を振り返つて思ふと、高田君は西洋小説に於て坪内君よりも一日の長があつたやうに思ふ。勿論其事に専であると否とで追々懸隔を生ずるのは當然のことで、坪内君は間もなく高田君を駕するに至つたが、高田君の文學的才能は十分認めざるを得ないのである。

明治の九年十年の頃に帝大でボツ／＼西洋小説を読み耽ることが行はれ始めたが、しかし、この趣味家は甚だ少なかつた。先輩には金子堅太郎君が此方面の隠れもない人であつた。洋行中小説ばかり讀んでゐたと云ふことが同君に對する非難であつたなど、西洋文學はまださう理解されてゐなかつた。大學の豫備門に入つて本科まで進まず退學した、丹乙馬といふ人などは大の小説愛讀者で、英文も達者にかき、時々日本人を驚かす様な新思想を吐いたので、吾々も奇怪に感じた位幼稚であつた。此頃讀まれた西洋小説はスコットが大流行で、リットンやサカ

レーなども愛讀された様に思ふ。吾々の先輩で芳菲山人と號した、西松次郎といふ理學畑の人も此趣味家で、卒業後新聞紙上に得意の筆を揮つたことは隠れもない事であるが、しかし、大學から専門の作家を出したのは坪内逍遙君だけであらう。

今から考へると一笑を催すほどであるが、當時は文學に理解がなく、帝大を卒業した文學士坪内雄藏が春廼屋隴の名を以て小説界に現はれ出たのを驚異の目を以て見、「時事新報」のごとき、比較的新思想に理解のあつたものですら、苟くも文學士たるものが野卑な小説家となるなどは以ての外の事だと攻撃を加へたことがある。此時分は假名垣魯文が戯作の文權を握つてゐて、小説家たらんものは其門に趨り、束脩を納めて門下生となり、魯か文かの一字を頂戴しなければ世に立て無かつた位であるから、「時事新報」が小説家を輕蔑したのも無理は無かつた。坪内君はコンナ情實に捕はれずに、巍然獨立獨歩でやつてのけたのは流石に一見識であつた。

漢文で無ければ文學でない様に思はれた時代には、戯作者は一併に擯斥を受けた。當時は西洋の所謂文學なるもの、一端も世に理解されてゐなかつた。それを闡明して世の妄を啓いたものは坪内君の「小説神髓」であつた。今ではこの著にあるほどのことは誰れも知つてゐるけ

れども、當時に於ては尤も時宜を得た著述で、小説が重んぜらるゝに至つた動機は、此著の出版から發したと云ふも誣言であるまい。坪内君當時の傑作は「書生氣質」にあらず、寧ろ「小説神髓」にありと私は思ふ。坪内君は作家としてもエライに相違ないが、それよりも君は文壇の教育家として尤もエライと平素自分は思つてゐる。君は文學の各方面に先鞭を着け、それを開拓し、且つ其將來に起るべきものを指摘もし教へもしてゐる。乃ち歌曲に就ても、劇に就ても、ペーゼントなどに就ても、皆君が唱首で、君が開拓したものであるが、文壇教育の第一歩は即ち「小説神髓」である。此著述の稿も早く大學にある頃ノートに書きつけたものを書き直したものであつたやうに覺える。まだ外に學窓時代に書いたもので、自己の名を署するを忌み、服部誠一の名で出したもの、友人橘顯三の名で出したものなどもあつた。此等の書名は自分ばかりと記憶がない。春廼屋作とない爲めに、多くは閑却されてゐるかも知れない。

坪内君とは長い交りであるから、龍岡町の僑居時代、又そこから大久保余丁町に移つて以來の事をよく知つてゐるが、文學上に關係あることは多く憶ひ出し得ない。「内地雜居未來の夢」を書かれた時などは、自分から餘末な材料を提供したことなどを思ひ出す。其標題を私に書け

とあつたが、それを斷つたことをも思ひ出す。龍岡町時代は君も何となく戯作者風であつたやうに思はるゝ。君は「朧ろ月夜にしく物ぞなき」といふ古歌から春廼屋朧と名を命じたので、その家に訪ねて見ると、掛物でも額でもこの和歌に因んだものが掲げてあり、日用の箸函にも月下に櫻が散つてゐる圖が蒔繪で出來てゐて、如何にも氣取つたものであつた。併し、君は昔の戯作者とは大いに其品を異にした。と云ふのは、學殖も非常の相違があるからでもあつたが、君は名家の子弟を家に預つて、その監督やら教育やらを擔任してゐた。且つ早稻田大學の前身東京専門學校に追々日勤することになり、歴史や文學の教授をやる身でもあつたので、嚴正身を持たねばならず、事實君の半面は堅苦しい先生であつた。

早稻田中學の起つた頃は、君の大久保余丁町住居時代だが、君は其教頭にならざるを得無かつた。君が後年私に語る所に據ると、實に心にも無いことであつたが、高田君や君が早稻田大學の經營に盡力してゐるのに、自分のみ何もしないことであつては氣が咎めるので、せめてはと教頭となつたが、教頭の受持で倫理の一科を十年も講じたことは、自分に取つて此上ないつらい事であつたと聞いて同情に堪へなかつた。あれだけの文學者を其作に専らならしめず、アタラ

大切な時間を中等教育の爲めに割かしたのは如何にも勿體ないと感じた。勿論倫理の研究が君の修養や人格に益する所があつたかも知れない。その得た所と失つた所とを較べて差引損得どんなものであつたか。ソナナことは今爰には問題外であるが、何れにしても坪内君の經歷中の大事件であつたに相違ない。此事を閑却して君の文藝を論じ、又君の人格を評するものがあらば、それは甚だ不備の評たるを免かれない。

以上を書き畢つてから、或日多くの雜筆を出して檢すると、大正五年十二月中の雜筆に坪内君の九箇條の信條が書きつけてあるのを見出した。これは私が熱海で毎日坪内君と往來してゐた頃、聞いた事などを多く録したもの、内にあるのだが、倉卒のノートではあるが爰に收めておく。坪内君が座右の銘としてゐると云はれた九箇條は左の如くである。

- 一 行ふ前に先づ論じて立場を定む。
- 二 作すれば必らず他の未だ爲さざることをなす。
- 三 他を崇拜せず。(内外人何れでも、沙翁とても)
- 四 流行の公平なる傍觀者たり批判者たるを任とし、追隨者たらず。

五 少くとも一事に七年を傾く。

六 他の美所を看取して他山の石となす。

七 古人よりも今人、今の先輩よりも今の後輩を規とす。

八 他人を自己の便宜の爲めに使はず、他の功を奪はず。

この八箇條は君が平生の箴となすだけに、君の文學上の經歷はよく之れに嵌つてゐる。君の告白は決して自らを欺いてゐないと思ふ。(一)先づ行ふに先だちては理論を著はしてゐる。小説を書く前には「小説神髓」を著はし、脚本を書く前には「夢幻劇論」を書き、歌劇を作る前には「新樂劇論」を書いてゐるなど、必らず行ふ前に論がある。(二)君は文學上他人の未だ手を觸れざる所を開拓し、何につけても先驅をなしてゐる。劇の改善に就ても、樂劇に就ても、ページントに就ても、兒童劇に就ても、皆君は先驅である。(三)君は「沙翁全集」を譯し半生之れに没頭してゐるのを見て、少なくとも君は沙翁の崇拜者であると誤認する者もあらうが、君は沙翁のアドマイラーに相違ない、しかしウォルシツパーではない。君自身は何人もウォルシツプしないと云ふを以て信條として居る。(四)君自ら

の告白に、自分は流行を注意する點に於て人後に落ちずと信じてゐる。併し、斷然其の流
 行のフオロワーたるを欲しないと常に云はる、。(五)一事を企て、それに七年を傾けると
 あるも事實である。君が小説を書いた間も、舞踊に没頭した間も、中學で倫理研究に従事
 した間も、雜誌「早稻田文學」に従事した間も、皆七年若しくはそれ以上費してゐて決して
 朝三暮四でない。(六)他人の長所善點を看取するに熱心なるは、君が時代に後れず、年齒
 の進むと共に藝術の進む所以であらう。君はみづから赤俵々に告白された、自分は全體弱
 味のある男である、他人の美所を看てはみづから倨傲を以て居ることが出来ない。君が
 精神的に老いざる所以であらう。(七)後進の作を閑却せずに、孫弟子のやうな若輩の作ま
 でも見逃さず、必らず一ト通り目を通さる、が常である。これなどは私の最も敬服する所
 で、繁劇なる大家の出来難いことである。(八)君は寧ろ潔癖に過ぎる人で、常に人の善を
 爲すに汲々とし、往々人のために自らの名を蔽うて事を行ふことが珍らしくない。他人の
 功を奪ふごときは君の最も忌む所である。

私が君から以上八箇條を聞いた、其翌日君を訪うた時に、昨日は一箇條を脱したと云う

て追補された。即ち第九に云く、自分は鬱憤を蓄積する主義で、之れを發散しない流儀で
 あると。種々例を擧げて説明されたが、成る程、これは出来難いことである。多くの文學
 者は鬱憤を直ちに何等かの形にあらはし、或は辯疏し或は報復するが常で、それを忍耐す
 るのは容易の業でない。君の云はるゝに、自分は批評家に對しても已むを得ない場合でな
 ければ答へない。實は、鬱憤を漏らすは一時の快を得るに庶幾いけれども、藝術の蓄積を
 併せて散じ失ふの損もある、と云はれたが如何にも名言である。

○

次に紅葉山人に就ての追憶に移るが、此思ひ出もなかく、簡單でない。山人とは随分長い間
 の交りであつた。私が最初山人の「色懺悔」を読んだのは、郷里で「新潟新聞」を主宰してゐた
 頃であつたかと思ふ。此小説を読んで山人の垢ぬけした筆致に少なからず感興を覺えた。こゝ
 にチヨット餘談に移るが、此「色懺悔」の版元は吉岡哲太郎といふ人で、此の人は嘗て同窓で
 あつた。氣の利いた才子肌であつたが、山氣があつたと見えて、小説出版を企てたと聞くと、

間もなく此手から「色懺悔」が出版されたので面白く感じた。露伴君の「風流佛」も矢張り此人に依つて出版された事を考へると、なか／＼着眼がよかつたのである。けれども餘り長續きはしなかつたかと思ふ。それは兎も角話しは戻つて山人と懇意となつたのは、私が高田君に代つて「讀賣新聞」の主筆となつてからであるやうに記憶する。此頃山人は讀賣紙上に其艶麗の小説を連載してゐた。社へ日々來るでもなかつたが、時には原稿をみづから社へ持つて來たこともあつた。社で書く様なことは滅多に無かつた。實はそんなに無雜作に出来る文章でなく、坪内君が一瀉千里と筆を走らすのとは違つて、山人は一語々々嚙んで出すやうな苦吟の餘に出來るものであつた。山人の風格は、軀瘦せ幹高く、色黒く眸明かに、顔に苦が味が走り、舉止輕快、言語はキビ／＼してゐて、相對すると何となく愉快を覺えしめるものがあつた。生粹の江戸ッ兒といふ風格は自然に備つてゐた。自分は社で交はつたばかりで無く、山人の住した牛込の横寺町の居へは幾十回か足を運んだ。自分が讀賣を去つてからも山人との交りは永く續いて、其終焉に迫んだ。自分は前にも云うた通り文學に興味があつたのではなく、趣味は寧ろ政治にあつただけけれども、文學者と交はることを好んだ。山人は食物に頗る趣味があり、茶菓

には別してやかまし屋であつたが、下戸であつた。その下戸の山人を上戸の自分が随分たびたび連れ出して、方々飲み回つたものである。山谷の八百善へ出かけた時、膳部にあつた野菜の胡麻壘を丁寧に解剖して、これだけの中に七八種のもが混じてゐるなど云うて手帳に書きつけたり、或る鳥屋へ出かけて女中にテバの注文をして女中が解しかねたので、料理番を呼出して通がつたこともある。山人は食通であると共に寫眞道樂もあつて、有名な料理屋の臺所を寫眞に取りたいと言ひ出し、一二ヶ所試みた事もあつたが、臺所はどこも暗いので不成功であつた様に覺える。なか／＼の凝り性で趣味も甚だ廣かつた。自分が多少江戸趣味を解するのは山人に得た所が少なくない様に思ふ。

山人が筆を荷くもしなかつた一例は、「隣の女」を書いた時、編中に尺八の事が出てくる。山人は尺八の吹き方に心得が無いので、その研究に向島に居る知人佐藤某を泊りがけに訪うたことがある。それが爲め讀賣紙上に二日ばかり續稿が途切れた。其際山人から私に寄せた手紙が今も手許に保存されてゐる。當時の讀賣社長本野盛亨氏（本野一郎氏の父）が編輯局へやつて來て、紅葉の時々ナマケルには困るというて、小説の續稿の途切れる事を頻りに攻撃するのであ

つた。自分は山人の爲めに辯疏して、尺八の吹き方が分らんため向島に出かけて已むなく途切れたのだというても、社長はなか／＼承知しない。全體あれの小説の途切れるのは今度に限らず度々ある。あの男の様にスラ／＼書けるものが何故に時々停頓するのかと詰るのを、私が制して、スラ／＼讀めてもスラ／＼書くのではない。山人の小説は一字一句も苟くもしない。なかなか毎日稿を續けるのは容易なことでない、是を御覽なさい、と山人の原稿を校正方から取寄せて社長に示した。此原稿には數ヶ所の貼り紙があつて、中には一ヶ所に三枚も四枚も重ねて貼り紙をした所もある。私は一枚一枚剥ぎ取つて社長に讀んで聞かせた。段々剥いで原作に戻つた時、自分の云ふには、一番初めの筆でも此通り玲瓏珠の如き文章であるが、讀み較べると初度の貼紙での直しはいくらかよい、二度の直しは更に一段よい、最後のは最もよいことが斯く歴々とわかるでありませうというた時、社長も始めて成るほどとうなづいた。私はすかさず、實は小説というても長い詩である。あなたも漢詩を作らるゝが推敲に随分苦心されるであらう。紅葉などの大家は名譽の爲めにもナグリ書きする事は出來ないので、尺八の吹き方を知らないからというて書けぬ譯もないが、大事を取つて吹き方までも研究するのだと説明した所

が、社長も漸く文學者の苦心の容易でないことを悟つたらしく、其後は餘り小言を云はなかつた。此事を後日山人に語つた時、山人はひどく喜んで私を徳とした。此「隣の女」に就て更に憶ひ出したことがある。あれには頗る際どい處まで筆が迫んでゐる。其際前島密男から一封の書狀が到達した。その手紙は極めて簡單で「隣の女危険迫る、請ふ隣の疝氣となす勿れ、注意注意」と三くだり許り書いてあつた。此時分は新聞に對する取締が馬鹿に嚴重で、小説も風俗懷亂でやられることが頻繁であつたので、前島男はそれを注意されたのであつた。

山人が「金色夜叉」を書いた時、貫一の死處に苦心し、わざ／＼鹽原まで出かけて、實地を探検して死處を定めた。これは誰れも知つてゐる事實だから委しく語るまでもない。此事につき會て坪内君と語り合つたことがある。西洋あたりの例に倣へば、貫一の死處に一碑を樹て、それを鹽原の一名所とするもおもしろいではないか。幾分か資を投じて計畫しようかと相談したことがあつた。無論山人歿後の事で、山人のための記念の意味もあつたのである。が、此事を終に果さなかつた譯は、鹽原の某寺の住職がぼ／＼類似の事を考へ、鹽原の宣傳者與三郎兵衛（藍田と號す）、尾崎紅葉兩人の鹽原に關する事蹟を刻して碑を建てる企てがあると聞いた。そ

して撰文は私の友人松平康國氏の手に成つたことは事實であるから、自分共はそれが爲め建碑を見合はせたが、此寺の住職が其後他界したとかで、終に沙汰止みとなつた。思へば吾等はコシナ他人の計畫に顧慮せず、初思を貫ぬけばよかつたのだ。

坪内逍遙君と紅葉山人は互ひによく知り合つてもゐた。交はりも深かつた。勿論兩人の間に疎隔があらう筈は無かつた。併し、兩頭領の末流の間には動もすると相軋つて反目する様な事があつた。私は當時祕かに之を憂へた。と云ふのは、いつも末輩の疎隔反目から兩雄の争の端を發し、ともすると意外の事を惹き起す事があるからだ。或る時牛込の吉熊に東京専門學校の幹部の寄合があつて、高田坪内兩君と自分も其席にゐた。其日偶々階下に山人の率ゐる硯友社の集會があると聞いて、自分は祕かに案じた。得難い此機會を利用して兩者の反目を解きたいものだ、とワザト坪内君には精しい事情を語らず、突然坪内君を誘うて階下の一室を明けて見ると、山人を初席にして硯友社の面々二十人許りが兩側に居並んでゐた。席が狭くて吾々の割込む處も無かつた。坪内君は何の意味で此席に伴はれたかも解してゐないので一寸面喰つた様であつたが、末席に坐して列の當意即妙の談話を弄して滿座に挨拶をされたので、一同は覺えず噴き

出して拍手した。坪内君の此の態度と雅量は末流の頭腦に蟠まる誤解を一掃し去つて、それからは甚だ釋然たるものがあつた様である。

山人が食通であつたことは前にも云うたが、日本橋の中華亭の料理が氣に適つて、臨終の病中もそこから料理を取寄せたと聞いたが、この中華亭に就て語るべき一話がある。この亭のお福と云ふ娘が大の紅葉崇拜で、山人の小説と云へば、何でも精讀してゐる。私の亡友山田一郎といふが此事を知つて、或る時ニセ紅葉を連れてこのお福に一杯喰はせたことがある。山田の知る人で静岡縣の或る年若の醫師が俳句をやる所から思ひつき、伴うて中華亭に到り、今日は尾崎紅葉君を同伴したから、短冊でも書いて貰へとお福を喜ばせた。ニセ物と知らないお福はひどく喜んで、酒席を斡旋し揮毫を請うたりした。コンナ事があつてから數日を経て私が行くくと、お福は先日紅葉先生が山田さんと共にお出になりました、とニコ／＼して云ふから、自分は一寸不審に思つた、山田は尾崎を知らない筈だが、どうして連れ合つて來たかしらと。お福に紅葉さんはドンナ様子の人であつたかと聞くと、色の青白い、丈の低い、鼻下に髭のある人だといふから、私は噴出した。お前、それは偽物だよ、紅葉は色が黒く丈が高く髭がない。お

前は山田にハマられたのだというたら、お福はくやしがるから、私が慰めて近日本物を連れて來るといって終に其約を果した。山人が中華亭の料理を愛するの端はこれから發してゐるのだ。

山人は下戸で、二三杯呑むと必らず其席に横臥するのが例であつた。或る時柳橋で三四の妓を招き、二三杯傾け、例の如く横臥し、半睡半醒の境に入り、妓等の勝手に話し合ふ事が銘々愛讀の小説に關してゐるので、山人もそれとなしに耳を傾けると、甲乙丙互ひに好む所を擧げて、その優劣を戦はしたが、皆三文小説ばかりで、一世に名の高い紅葉の小説に就ては一語も及ばなかつた。勿論そこに寢てゐる客が大小説家であるなどは彼等の夢にも知らなかつたことである。山人はあの時はをかしかつたと後に語つたが、中華亭とは全然逆の話であるので思ひ出した。

山人は不起の病を抱へて私の郷國越後を経て佐渡へ渡つたことがある。「烟霞療養」と題する續きものが讀賣に出たのは其時の作である。山人は佐渡の小木に暫らく滞在して、日夕左右に侍した或る妓の爲めに三絃の匣に字を題してやつたり、別に臨んでは未刊の小説の稿本を贈つたりした。此稿本を贈つた時山人は特に注意して、お前が或る場合に金に困るやうなことが起

つたら、これを東京の本屋に賣れば相當の金になる。龜末にせず仕舞つて置け。決して人に欺かれて取られてはならぬ、と堅く言ひつけたといふことが、山人の歿後に知れた。山人は自身の口から此事を誰れにも話さなかつたらしく、いつぞや紅葉祭のあつた時、私は追懷談の一節として語つたことがあるが、硯友社の面々も皆初耳だといふた。此未刊の原稿は何であつたらうか。自分はそれを知りたく、佐渡の知人に問合はせたこともあつたが、それは惜むらくは火災に焼けて今は無く、其女は或る寺の大黒となつてゐると聞いた。

いつであつたか時は忘れたが、私が幹事で一ツ橋時代の帝大の同窓會を東台の櫻雲臺（後に梅川樓）に開いた事があつた。其際紅葉君は私を助けていろ／＼周旋されたが、餘興に伊井蓉峰に「書生氣質」をやらせては何うか。幸に櫻雲臺には舞臺もある。蓉峰とは懇意だから、寄附的にやらせる。別に報酬はいらぬとあるから、喜んで山人に任せた。伊井も快諾して、門人數名を伴うて登場し、確か西瓜を割るあたりをやつたが、これは意外であつた。面白からうと期したのが全く裏切られて全然失敗に歸した。何分吾々時代の大學生の氣合は可なり違つてもゐる、墮落書生の伊井の肚に入りかねたのも無理はなく、兎角明治十年頃の大學生の風を寫し

出すことが出来なかつた。座中にはこの「書生氣質」の作中の人物も甲乙丙丁居並んでゐた。確か西瓜割りの本尊三宅雪嶺君は舞臺に接近して見てゐた。此小説の作者坪内君も席にゐた。銘々のことを時代違ひの書生から成り立つた俳優の演ずるのだから、いろ／＼のアラが現はれて、十分も経つか経たぬに、みな／＼退屈を生じて、早く止めよ、アレよりもお互ひがやる方がましだなどいふものもあつて、蓉峰には氣の毒であつた。山人に關係のある事ではないが、思ひ出づるまゝ、こゝに書いておく。

山人に就てまだ思ひ出せばいろ／＼の事があるが、餘りに長くなるから、一二雑事を録して他の項に移るとしよう。山人は多趣味であつたが、印癖もあつて、頻りに自用の印を作つた。足立疇村氏の作が尤も氣に入つて、此人の作が多かつた。不起の病に罹り覺悟をした時なども、其意味の印を疇村氏に刻させた。其印文は確か「化及我」の三字であつた様に記憶する。山人は時々私の家に来て、私の讀みふるしの隨筆を持ち去り、それを翻案して小説の種にしたことが一再ならずある。今は精確に記憶しないが「破茶碗」といふ短篇小説は或る支那の隨筆から翻案したのであり、又「愼夏漫筆」といふ漢文で書いた日本人の隨筆に、或る幕府の役人が木

蘇の旅宿にやどり、その家に鶉を籠に入れて飼つてあるのを見て私かに望をかけ、何とかして無心を云はん、とわざと多くの茶代を贈つて主人を喜ばせたのが却つて仇となり、主人は茶代に酬いる馳走の材料に窮し、鶉を屠つて膳部に供へ、客人の大失望を買つたといふ一話が山人の興味をそゝり、短篇小説となつたが、標題は今思ひ出せぬ。山人は私が長い間日誌を書き續けてゐるのを知つて、頻りに褒めるから私は山人に、自分などの日誌は何の役にも立たぬが、君の様な文人こそ日誌を書くべきだと勧めたことがあつた。山人もそれから日誌を書き初めた様である。不起の病に罹つても日誌を書いた事は誰も知る通りだが、山人の歿後日誌が出版されたのを見ると、ある年の元日の記事に、私と佐藤某とが、山人の横寺町の二階の書齋で、長時間酒を呑んで山人を困らせた。其時の記には吾等兩人を新年の悪客と罵つてゐる。日誌を書く事を勧めたお蔭でトンデもない罵倒を受けた譯である。山人は江戸ッ兒氣質の卒直で、日誌には何でも赤俵々に書く流儀で、人から物を贈られても氣に喰はぬと、なんだコンナものを馬鹿にしてゐると罵倒して憚らない。そこに山人の面目が現はれてゐるのだが、此日誌を公刊する際に、斯様な記事は多く取り去られたから、いくらか臆が抜けた感じもする。

茲に山人に關する一事を書き添へる。

既刊の私の隨筆に、山人が不治の病を得たのを慰める爲め友人が山人を迎へて會食したことを書いたが、頃日、明治三十六年三月、即ち山人が病中であつた際の、私の雜筆を調べて見ると、同月十八日私が山人を見舞つて、長時間に互り談話を交へた委曲が録されてゐた。此訪問は尋常の見舞でなく、山人が病症を或る友人より知らされたと聞いたので、慰藉の爲めの訪問であつた。私は此訪問を幾回か躊躇した。不治の宣告を受けた山人を見るに忍びなかつたからだ。併し、終に決然起つて訪問し、山人の覺悟の程を聽いた。これが山人と談話を交へた最後であつたやうに思ふ。左に訪問當夜録した記事を收め、山人を偲ぶの料とする。

自分はけふ紅葉山人を訪うた。訪ふ前に幾度か躊躇した。不起を知る山人を見るに忍びなかつたからである。併し思ひ返した、吾れとても重患に罹つた豫後である、健康のものならば遠慮もあるべし、吾が病を知る山人に對して遠慮は無用であらうと。山人に對する

私の同情は遂に私を勵まして訪問せしめたのである。

例のごとく二階の書齋に通された。(牛込横寺町の宅)かねて相識る河喜多某氏も座に在つたが、早く辭し去つた。山人は階下で來客に接見中だと聞いた。門生が階上へ茶を運んできた。自分は門生に私語して、細君は既に先生の病症を知つてゐるかと問うて見たら、門生は祕密になつてゐると云うた。門生はまだ先生も知らないと思つてゐる様子であつたから、先生は既に知つてゐる、と長田秋濤から聽いたまゝを語ると、門生は一驚を喫した様子であつた。

しばらくすると山人は階上へ登つて來た。この時自分は山人の面貌を見ることを躊躇した。併し遂に見た。山人の元氣は毫も平日と異なる所が無かつた。机邊に坐し、例のごとく茶を啜りながら、しきりに語る。自分は大阪に出張中月ヶ瀬の梅を觀たことや、大阪の博覽會を見たことなどを話した。山人の話の内に、今明日中芝新堀町廿五番地の細君の縁家樺島方へ引移り、靜養の積であると云うた。他にも種々の談話があつたが、渠かに死の覺悟があるか否やは搜るに由なかつた。自分は心竊かに誓つた、渠より漏らすでなければ、

吾れよりは斷じて之を誘ふ話をなすまじと。頗る談話に注意を拂つた。

漸く時刻が移り、山人の話頭は終に胃癌の事に及んだ。但し、山人自身のことでは無かつた。渠は某氏が胃癌にかゝり、其臨終が甚だ美ごとであつたと語り、且つ一説を立て、云ふのに、癌症は危篤に瀕しても精神に毫も變りが無い。之に反し、肺を患ふる者は臨終にぼけるというて、その例として前年歿した門人中村花瘦の事を語り出した。中村は危篤に瀕してゐても終に遺言を傳へなかつた。萬一の僥倖を冀つたことは確かに精神に變狀を生じた一徴と見るべきであると。

山人の覺悟を窺ひ知るべき話の端緒は斯くして開かれた。僅かに綻ぶればこれを開くことは容易である。彼我の談は直ちに死の問題に入つた。自分は思ひ切つて云つた。死は恐る可からざるにあらず、併し、尤も恐るべきは死の宣告である。然れども既に宣告を受ければおのづから覺悟が生ずる、臨終は安泰なるを得べしと。山人は之に答へて實に然り、死は恐るべきでない。但だ周圍の繫累を思へばこそ悲痛の情が起るのだ。自分は更に云うた。知識階級に對し病症を匿すはよろしくないと。山人云く、洵に然り、吾々に病症を匿

すごときは確かに侮辱であると。山人は終に宣告を受けた當時の感情を陳べ、其夜だけはどうしても睡ることが出来なかつた。遂に一杯の葡萄酒を傾けて眠を得んと圖つた。僅かに一杯の酒が非常に利いた。夢心地となつて、快感云ふ可からざるものがあつた。この夢心地の間に種々面白い考が浮んだ。實は平素も夜分寢臥中面白い考を得る習慣がある。その時は刎ね起きて枕頭に紙を探り、筆録するのが常である。この夜もいろいろの考を起した。第一、繪はがきの意匠を工夫した。それは内臓の圖を描き、患部に金粉を施し、死後それを黒色とするのが思ひついた意匠で、この繪はがきを作らんため、病院より内臓の圖を貰ひ受けてゐる。病中同人間の往復にこれを用ゐて、記念にしたいと思ふ。今一つ考へたのは辭世百首を詠んで見ようと思つたが、百首の句を詠するほどならば寧ろ文章を書く方がよからうとも思つて、まだ惑うてゐると語つた。山人は死の宣告を受けても趣味を忘るゝことが出来なかつたのである。自分は自家の經驗を陳べて、病に惱まされず、寧ろ病を楽しむことに勉めよと勧めた。山人はうなづき、君の懇みに倣つて、これから日誌を書くことにしようと言つた。自分は山人に佛書を読んだらどうかと云うたら、山人は、「碧巖

録」をたまに読んで見ても、どうも面白く無い。且つ死期に臨み佛法の慰藉をかりたと云はれるのも口惜しいと云ふから自分は、如何にもさうだ、君は愉快に死ぬがよい。死の方法も江戸ッ兒風にありたいと云ふと山人は、最も吾が意を得た、實は其方法の考案中だと云うた。自分は、君が無聊を慰するため書籍の入用あらば遠慮なく申されたいと云ふと、山人、それは最も希ふ所である。差向き面白い隨筆が讀みたい。劍掃體（明の陸紹珩の撰に醉古堂劍掃がある）の語録も見たいとの注文があつたので、自分は快よくこれを諾し、最後に訪問客に就て注意し、多くの知人に一々面接するも五月繩いであらう。會心の友の外は面接を斷つてはどうか。山人曰く、その積りだ、新堀町へ移るのも客を謝する爲めである。「二六新報」の社長が、毎日同じことを繰返すのも厄介だから、君の談話を印刷して女關で訪問者に頒つたらどうかと云うたが、新聞屋の工夫は到底活字を離れる事が出来かねると一笑した。私はこれを機會に辭し去つた。

山人は、死に就て覺悟は定めながら、それが二三月の近きに迫つてゐるとは思つてゐない様子に見受けたので、自分は窃かにこれを思うて黯然たらざるを得なかつた。（明治三十

六年三月十八日夜記す）

山人が病中丸善で月賦の販賣法で頒つ「センチュリー・ヂクシヨナリー」に加入したなどは、死期が近づいてゐることを知らなかつた爲めであらう。山人は、話中にあるごとく、葬儀の方法までも自から案じた。輿で昇かるゝのが嫌とあつて、駕籠を望み、配り物の饅頭の中は潰し餡でなければならぬと定め、容器も自からの好みで、表を黒、内を朱塗にして、源氏の紅葉の香の巢を蓋裏に黒漆で出すべしなどと遺言をしたので、すべてそれに従つた。山人はどこまでも趣味の人であつた。自分も趣味を以て山人と交はり、山人の薰陶を受けたことも少なくないが、今也則亡。噫。

○
自分の多少知つてゐた文人は今も多く故人となつてゐる。服部誠一といふ人などは故人となつて餘ほど久しいことである。此人は撫松と號し、「東京繁昌記」の著者として知られてゐる。新橋近く銀座の通りの角に九春社といふのがあつて、そこから「東京新誌」といふ雑誌を發行

し、一時は盛んに行はれ、可なり號を積んだものである。服部は此雜誌に漢文體の戯作を掲げた。此時分はまだ支那小説脈の文章が喜ばれた。服部の文は艶麗で頻りに綺語を弄した。成島柳北のに較べると文品は下つたけれども、それが却つて俗に投じた。随分思ひ切つて淫褻の事を書いたものであつた。私は此頃九春社に看板をかけて、友人と共に「内外政黨事情」といふ隔日發刊の新聞を起してそれに従事してゐた。服部と同じ編輯局に机を並べてゐたから、服部の原稿を書くのを常に見てゐた。如何にも達者なものであつた。漢文には無論上り點をつけたが、書き／＼上り點をつけてゆく。それが迅速で如何にも慣れたものであつた。アンナ綺語を弄する撫松其人は意氣なしやれた人で、もあるかのやうに人は想像するであらうが、顔には痘痕があり、辯舌は東北訛りのズウ／＼で、文章と打つて變つた人であつた。江戸の歴史を書きたいというて材料を蒐めたと聞いたこともあつたが、遂に果さなかつたやうである。

森田思軒にも多少の交りがあつた。此人は慶應義塾出身で、年は若かつたが、漢文を達者に書いた。矢野龍溪翁が「經國美談」を著した時、精細な評を漢文で書いて、早く漢文の力を認められた。後には反譯殊に西洋小説の反譯に筆を專にして、頗る自得の色があつた。早稻田大

學の前身東京専門學校時代に、雜誌であつたか講義録であつたか、思軒氏に譯筆を煩したことがあつた。其頃何かの用で朝早く岡倉覺三氏を根岸邊の宅にたづねると、氏は、朝であるのに、杯盤を運ばせて、主客對酌するといふノンキな事であつた。そこへ一客の入り來たつたのを見ると思軒氏であつて、氏は主客に挨拶もせず上席に坐り込んで、それから挨拶をすると云ふやうな倨傲の態度で、私の席にあるのを見て、學校へ上げるべき草稿は既に書いてあるけれども、今日の様な雨天に金玉の文を濡しては困るからワザト控へてゐますといふを聴き、私は此男氣が狂つてゐないかと思つた位で、如何にも自負満々たる人であつた。

櫻痴居士福地源一郎氏が銀座街頭に「太政官御用日報社」の看板を掲げ、「東京日々新聞」記者として名聲を馳せたのは、私どもの帝大にゐた頃であつた。此人の文章は老熟して氣格が高かつた。その毎日の社説は大學生と雖も争うて讀み、敬意を拂つた位である。後には官權新聞とあれば文章がよくとも輕蔑の念を以て讀んだものだが、福地の頃は官權新聞にまだ權威があつた。これには吾曹子の文品も與つて力があつたやうである。私などは、今になつて考へると何となく恥かしい様な氣もするが、吾曹先生の警教に接し、一たび議論を戦はして見たいと思

つた。實は崇拜の念もあつたのである。然る處議論を戦はず機會が生じた。その頃私は、亡友岡山兼吉、山田一郎の兩氏と共に元老院に向つて官吏學生の政談演説を禁ずることを不可として建議をしたことがある。大學生の身分でコンナ事をやつたのは、大學では前例のないことであつた。田中稻城氏が何か建議をしたことがあつたが、それは政治に關係したことは無かつた。此私共の建議に對し福地氏は賛成が出来ぬと云つたと聞き込んだので、當時日報社に橘村居士の號で西洋小説を反譯してゐた關直彦氏は、吾々の同窓でまだ在學中であつたから、此人を介して福地氏に面會することとなり、三人連れ立つて日報社の樓上で顔を合せたのが初對面であつた。福地氏は此頃四十年輩で、もあつたであらうか、贅澤づくめの日本服で袴はつけず、俳優で、もあるかの如き身なりであつたが、流石に議論は老僧で、行き詰まると逃げるのが巧妙であつた。併し、書生輩何かあらんの調子で吾々を輕んずる風が見えて癢に障つたが、いつまでたつても議論が盡きない。紹介者の關君が社長はまだ社説を書き畢らんからと水を差したので、それを機會に別れた。コンナ事があつてから後、十年も會する機會が無かつたが、榮枯盛衰の變は儘ならぬ世の中の常で、一時飛ぶ鳥を落すほどの櫻痴居士も、劇場の經營などに失

敗して哀れな境遇に陥り、全く筆を新聞に絶ち、戯作者として糊口する様のことになつた。私が居士に再會したのはその頃であつた。私は「讀賣新聞」の編輯を主宰して居つたが、ある日の編輯會議で居士の作を掲げたいとあつて、私は居士を訪問した。居士は、築地であつたかと思ふが裏通りの小屋、幾んど膝を容る、許りの家を出張所とし、日々通つてこゝに筆を把つてゐた。刺を通じて面會して見ると、六疊程の一室に机と筆硯と僅かばかりの書物があるのみで、婢僕も見えず、如何にも孤篋蕭然たる有様で、日報社樓上に會つた時とは全く異つて、意氣も頗る衰へて見えた。私は「讀賣新聞」の爲めに一作を願ひたいと請求に及ぶと、書きますが私の原稿料は高いかも知れませんが、それでよろしければ、と云うて机上の原稿紙を出して示し、これが一枚一圓ですといふ。當時としては高い原稿料であつたが、ほゞ覺悟を極めて行つたのだから、云はるゝ通り諾した。それから數日間讀賣に連載したのが「豊島の嵐」であつた。左の一篇は福地櫻痴居士が、角田竹冷に寄せて竹冷一派の俳句を批評した書簡である。書簡の原書は十二行の美濃紙野紙四枚に細書したもので、往年竹冷が尾崎紅葉に轉送したのを、私が貰ひ受けて、今も藏してゐる。居士は書中にいふごとく、自から俳句を作らな

かつたが、併し其評は皆要を得て、着々中つてゐる。先づ俳諧の季節を論じ、竹冷一派の俳諧を總論し、次に俳諧に忌むべき事を挙げ、終りに秀句を摘録して一々評を下してゐる。居士は晩年論壇に筆を絶ち、脚本家となり小説家となつた。その豊富の才藻は往く所として可ならざるは無かつた。その天才的の負けず魂は、俳句に對しても默過は出来なかつたのである。但し居士の俳句に就ての説は恐らく此外には無からうと思ふと、この書簡一通は頗る珍とすべきものである。竹冷一派の俳諧は明治の文藝史に逸す可からざるものたるは云ふ迄もない。其俳社は秋聲會と云ひ、其機關雜誌は「木太刀」といつた。社中には紅葉、小波を始め硯友社中の人も参加してゐる。櫻痴居士の批評は即ち「木太刀」に載せた秋聲會員の句に就てであつて、明治初頭の文藝にも屬するから、こゝに其全文を掲げる。

俳諧「木太刀」特に面白う拜讀して候ひぬ。秋聲會員の御中にて、竹冷紅葉の兩大人の老手作家にておはす事は、劣生夙に詳知して候ひけるが、會員諸君打揃はせて、斯く名家の多く集らせて、此風流没地の中に立ちて、巍然俳諧の韻事を樂しませらるゝこと感服の

至りと欣羨仕り候ふ。

劣生原來俳諧に於ては全くの門外漢、一句一吟も曾て仕りたる無し。されども其趣味は敢て解せずと云ふにも非ず。現時流行の批判家に倣ひて盲評を試んば、難事にも非ざる可きが、止なん／＼、今の評に従ふものは殆しと、身の程を省みて思ひ止りて候ふ。但し舊友の老兄にまで内々にて思ふ所を申述んば、仔細あるまじき歟。あな賢こ、劣生が云々言ふなりなど人々に漫語り仕たまふな。

第一、劣生が老兄の御苦心に敬服し參らせたるは、春夏秋冬季節の定め方、その穩當を得たまひつる事で候ふなり。今日の太陽曆一月一日の大寒前より三月三十一日までをば、春と名くべきに非ず。去とて現に片田舎にて行はるゝ類ひ、一月送りも亦其實を得ず。詮ずる所は、春夏秋冬の季節は十二月に對して、きちりとはあてはまらぬもので候ふ。去れば劣生は春分より夏至迄を春とし、夏至より立秋までを夏、立秋より冬至までを秋、冬至より春分までを冬と、大凡に定めなば、稍々其當を得べしと存じて、常に筆とり候ふにも、其如く心得て獨り極いたし候ひぬるが、今や「木太刀」を閱するに、老兄にも同じ御考と

見えて、大に同志を得たるを喜び、殊に其季候々々の選題に關して御用意の周密なるに服し、御苦心察し上たてまつり候ふ。御蔭にて劣生も頗る啓發の益を得て候ふ。

次に御選擇の句に、勿論巧拙は候ふべきが、織巧に流れ、若くは奇矯に走るの二弊なきは敬服なり。此二弊は獨り俳諧に限らず、現時は、和歌にも、漢詩にも、俗歌にも、淨瑠璃にも、文章にも、都て附纏ひつる弊風にて候ふが、夫を斷然擯斥ありて、奇想は奇想のまゝ、叙景抒情は叙景抒情のまゝと、別に罪深き剪裁を加へずして、天籟自然を全くするの高識、大に劣生の心を得たり。原來奇想雄思は求めて得べきに非ず。布置結構の妙想なき畫家が統紙に臨みて俄かに筆を嘗め、何かな奇拔の繪を寫出さんと致ても、書き上て見れば、岩が跳たり、樹が踊たりして見ゆるだけで、其山水は依然凡庸の山水にて、花卉人物みな其通なり。文章も亦然り、徒らに目新らしき語句を拈出し、甚しきは、自ら製造の語を弄して讀者の眼に新奇を映せしめんと謀るも、其立案趣向が平凡陳腐なる時は、更に其甲斐なきものぞかし。此理を達觀ありて、秋聲會員諸君の句々皆平易にして活氣あるは、實に世上俳諧の弊風を矯正するに足れりと云ふべし。「木太刀」の句々概ね蕉門の正風と見

受らるゝが、偶々談林の如きもあり、江戸座の如きもありて、敢て一派に僻せず、流風に拘泥せられざる所、識見の卓越なる、尤も面白く拜讀して、夜の深るをも覺えざりけり。

劣生が幼少の頃に先人石橋先生戒めてノクマハ宣く、詩歌にまれ、文章にまれ、經典詩賦若くは古人の姓名典故などを戲謔に濫用すること勿れと、諄々に其非なるを誨へ玉ひき。劣生は此誨戒を記憶して、爾來詩歌文章を讀むに、成程この戲謔は一寸は面白さうで、其實は決して面白からず覺え候ふ。今や「木太刀」中にて這般の戲謔あり、其一二を舉んに、

千早 振 卯 月 八 日 の 野 守 哉

千早振卯月八月は吉日よの歌が原來俗歌也、典故とするに足らず。

子の内は世をうぢ山の鹿ならず

世をうぢ山と云へる喜撰法師の歌に、子鹿何の因縁がある。

新茶 煮 て 喝 破 す 聖 諦 第 一 義

是れ聖諦第一義の問答を解せざるの作家たり。

木 の 下 の 藤 吉 も 居 る 納 涼 哉

即ち古人を穢すもの。

の如きも劣生が敬服せざる所なり。然れども劣生は一概に此類を非とするものにあらず。
左の諸句

鳥一聲山靜かにて椿落つ
五畝の宅井戸も厠も柳かな
春雨や鳥啼て山客猶眠る
昔男ありけり今も杜若
夕立の來ぬべき雲のふるまひよ
長安に響けと打つか小夜砧
切干も三千丈や西ヶ原

の如きは所謂善く戲謔して虐とせざることなれば、勿論集中にありて然るべき句なり。
次には、俳諧は惡口を旨とするに非ず。然るに奇警斬新の趣向を求るの餘り、識らず知らず惡口に陥ること、詩文の通弊にて、集中にも亦往々見掛け候ふ。

董摘む中に紅毛の少女あり
春の夜や老道士書を枕にす
覗いたれば唯の女よ青簾
蝙蝠や金貸の女露地を出る
汽車の旅人誤つてラムネを浴ぶ
女客ラムネの泡の消えたるを飲む
順禮の道に産する清水かな
事じやく納涼の女水にはまる
君が代や月の出て居る大晦日
の如きなり。中にも

漢方醫の書齋古りたる葭戸哉

の如きは實に奇趣奔逸の妙はあれども、惡口たるを免れざるは惜き事にて候ふ。
次に、無風流、所謂殺風景の句あり。是また奇拔の警句を吐かんと思ふ餘り、誰も踏迷

ふ岐路にて候ふなれば、所謂風流の魔道に陥るものなり。

戀猫をいたく打たる女かな
佛頂に糞ひり掛ける乙鳥哉
權門に馬の嘶く牡丹かな
夜をこめて葬禮ゆきぬ時鳥
暗がりに小便すれば鳴く蚊哉
水音や團扇暫く尻に敷く
化粧して鼻に汗かく娘かな
名月や誰がふんどしぞ竿の先
升に落てしられし除夜の鼠哉

の如き、一吟すれば其意表の趣面白きやうに候ふが、試に靜思して再三再四吟誦して見たまへ。奇警にせよ、斬新にせよ、没風流殺風景の譏は免れ難かるべきか。

斯いへば劣生が選擇のやかましき、「木太刀」集中一の完璧なしと云ふかと思召されんが、

決して然らず。戲謔に陥らず、惡口に流れず、没風流たらずして、しかも或は奇拔雄渾、或は溫藉典雅の名句いくらかも見受けて候ふ。其中にて劣生が尤も感吟いたし候を左に選ぶべし。

狼の人食ひし野も若菜哉

紅葉

天地の妙觀收て一句の中にあり。

残雪や如意輪堂の椽の下

竹冷

何等の感慨。

鶯や須磨の苦屋の古簾

馥一

清麗佳調。

涅槃像獅子の泣面哀なり

烏黒

奇想天外より來る。

金堂も跡ばかりなり壺堇

殘花

麥田よりも一層の妙あり。

春城筆語

雉子の尾に良狗の額飾らばや

紅葉

典故の活用是の如くにて實に妙。

牛も寐つ牛飼も寐つ日永ぶり

竹園

宛然畫を觀るが如し。

嘴の赤き鳥が浮くぞや霞むぞや

知十

光景を寫出す、何等の妙手ぞ。

ふうはりと三笠の山やおぼろ月

竹冷

巧を求めずして自ら巧。

萱の藥に酔を乞ふと書き送りけり

紅葉

巧妙極りて斧鑿の痕なし。

鳥部山の烟仇し野の露さくら哉

曲瀬

人生の無常觀。

斗酒ありや日暮て胡瓜刻む音

紅葉

常事を巧に弄して、以て風流の家事に轉化し來る。

つれづれや雙が岡の五月雨

竹冷

劣生尤も此種の句を愛吟す。

篝火は小さく焚えて涼み舟

無黄

一幅の妙畫。

肌寒の身は國を出て十歳かな

蘆水

十年夜雨不_ニ曾知_一より脱化し來りて妙。

十六夜は御家來衆の月見哉

小波

貴紳の樂事見るが如し。

新米や馬に腹掛買てやる

黄雨

豊年の狀を寫し得て、以て神樂に挿入して可なり。

指貫の露打拂ふ嵯峨野かな

飯人

此風流、今は無いかな。

明治初頭文壇の回顧

阿刺比亞の蠶剛し秋の風

無黄

新語是の如く用ひ來りて初て可。

秋の暮を心強くも寐る人よ

苔花

多情多恨の妙句。

阿字消て卒塔婆に秋の蝶一つ

殘花

愴然たる秋景。

後の月青女房の寒けなり

竹冷

往時榮華の夢思ひやられて哀也。

風の碓氷に掛る夜汽車哉

月人

實景自然。

風の落葉落葉の風と亂れ打つ

紅葉

此景物何處より得來れる、奇想々々。

香聞くや世は背にして投頭巾

殘花

自然の開悟。

夢の跡残る蒲團のくぼみ哉

竹冷

一部の哀情史、一句の中にあり。

憂き人の音頭に踊る女かな

愚佛

生非薄命不爲花の佳人信に是の如し、情緒可憐想。

秋の蚊の物思ふ臂を繞りけり

紅葉

約臂黄金寛一寸、對人猶言不相思の趣向に勝る數等の妙思。

朝ぼらけあいぬの髻の氷柱哉

四丁

自から雄渾。

匏借りて戸尻直すや冬の雨

無一

實況の妙致。

行雁や江口の君のうしろ影

竹冷

情意自から言外に在りて、眞に妙趣の上乗たり。

うかりける人の砧を聞く夜哉

秋琴

巧ならず奇ならず、意想の到る所發して句と成る。是即ち風流の最上極致。

かく拜讀いたして候ひぬ。秋の夜の御つれづれ、御一笑玉はり候へかし。

十月二十一日夜

櫻痴居士拜

竹冷宗匠机下

幸田露伴氏の「風流佛」を私が讀んだのは、まだ氏と交りの無かつた頃であつた。私が郷里でしきりに政治運動をやつてゐた時分、此の小説を携へ、數時間人力車で片田舎を乗り回つた其折に、車上に讀んで、その筆致の妙にひどく感服した。この小説も吾等の同窓吉岡哲太郎の出版したものであつたと思ふ。私は其後郷里を去つて「讀賣新聞」に入社したが、或る時私の一向知らない人が、編輯所へやつてきて、頗る磊落な調子で、私の傍に傲然アグラをかき、社員と高い聲で談話を始めた。その應答が如何にも奇矯であつたので、自然露伴氏であることが知れた。何でも此頃露伴氏は戯れに知人に書状を寄せて自己の死亡を通知したこともあつたらしく、社員は氏にカラカツて死んだ人が來た、幽霊ではあるまいかなどいって皆々笑つた。

とを思ひ起すのである。露伴氏は或る時代に讀賣に筆を執つたこともあり、此頃も社友であつたと思ふ。それからズツト後、私が早稲田大學の圖書館の館長であつた頃、いろくの名家を招請して趣味談を聽聞したことがある。其頃露伴氏をも招き、氏の得意の釣の話しを聽聞した。氏は釣に就ても該博の考證家で、古今東西にわたり釣の趣味家をいろく舉げられ、釣に關する希觀の書籍に就ての談もあつた。今でも記憶に存するのは、支那の唐代の詩人陸龜蒙が釣の達人であつたといふことや、釣の書物の稀本は「何羨錄」と「釣客傳」で、これが一番よい本であることなどは其時に聞き得たことである。それから後、私が國書刊行會で「新群書類從」を編纂する時に、狂歌の部と外に一二の部門を露伴君に頼みたいと思つて氏を向島の居に尋ねたが、氏は快諾されて、此部門の編纂が間もなく出來た。氏の精力の絶倫であるのに驚いたのは、幾千の狂歌を寫字生などの手を藉りずに、悉く自筆で書かれたことであつた。堆い原稿の手許に達した時は實に驚いた。露伴氏の凝り性は周知の事實であるが、嘗て多くの一枚摺りの御和讃を幾百種と集められたことがある。丁度私が向島に氏を訪ねたころは其の蒐集に力を致して居られた時で、自然談は此事に涉つた。氏のいふには、和讃を多く集めて見たら、いろ

ろ句法などの異なるものもあらうと研究的にやつて見たが、案外同調のものが多いので失望した。アンナ紙屑のやうなものは、價は無い程のものだが、捜し出すのに骨が折れたと一笑された。

以上の外、森鷗外氏や、饗庭篁村氏、川上眉山氏等、既に故人になつた人に就て語るべき追憶がないでもないが、それは他日を期するとして、これを斷落とする。

第三 烟霞游記

一 烈風と戦ひつゝ富士に登るの記

私の富士登山は、明治十二年帝大在學時代であつた。ある暑中休暇に亡友岡山梧堂とつれ立ち東海道を旅行した折である。箱根の舊道を跋涉して、芦の湖を舟で渡り、姥の湯と云ふむさくるしい温泉に一夜を明かし、翌朝發して御殿場迄行く途中道を失して無駄な時間を費し、正午頃ヤット御殿場に着し、それから富士の麓須走に達したのは午後五時頃であつた。山中で一宿し朝太陽の昇るのを見たい、とわざと須走の宿に泊らず、強力一人を僦^{ガウリキ}うて出かけると、間もなく森林帯に入つたが、こゝに大學の文科の教授リーバー氏の下山するに出遇つた。氏は吾等に山の天候の危険を説き、注意せよと云はれた。全體登山期は舊曆六月一日より始るので、吾等の登山は其期に先つ三日ばかり前であつた。眞逆三日の違ひで荒れることもあるまい、と

高をく、つて足を運ぶと、ボツ／＼雨が降り出して来た。山下では雨模様もなかつたのに、山中の事は測り難いと先づ覺つた。日は終に暮れて林中は殊に闇く、雨の落來る音が物凄く聞こえ、終に雷も鳴り出した。人の通行は絶対に無く、頗る心細い感じがした。中食場といふ所に辿りついたのは七時頃でもあつたらうか。茲に一宿する豫定であつたから、小屋に入つて寛ぎ、雨露に濡うた衣類を火爐に乾かしながら、晚餐を済ました。此中食場は山麓に近い處だから、一ト通り飲食物も備はり、粗末ながら寢具もあつた。

翌朝早く起きて太陽を拜せんとすると、前夜來の雨がまだ收らず、天地は濃霧に掩はれて、眼前屹立の山すら辨じ兼ねるのに失望した。小屋の主人は霧の晴れない内に登るは危険だと云ふから、已むなく九時頃まで待つと、幸に雨も霽れ霧も收まつたが、風が出だした。しかし強くもないからと出かけることにしたが、此中食場からは局面が全く變じ、樹木も無く、山の傾斜は益々急である。道と云うても巖石で、歩を和けるため多少の屈曲はあるが大體一直線で、平らな所などは全く無い。仰ぎ見れば絶頂は雲に没して、どれほど高いのか想像もつかぬ。朝の元氣で段々に登つて行くと、登るに従つて風が強くなり、豁然、遮るもの、ない山だから、兎も

すると吹き飛ばされさうな氣がして、悚然としたこともしば／＼あつた。風は呼吸のごとく吹いたり過んだり、斷續的に起り、強く吹く時は小石を飛ばして、遠慮なく登攀者の面を撲つので、その危険を避けるために、吹き出せば巖陰に身を匿し、過めば一氣に登る。追々勾配が急になつてくるので、巖に手をかけて喘ぎ／＼登る苦しさは名狀し難い。手袋は巖角に觸れて、忽ちに指頭のあたりが破れ始めた。一合目毎に石を以て圍んだ粗造の小屋があるのだが、登山の季節前であるから、その小屋が石で閉されてゐて、入つて憩ふことが出來ず、烈風に吹きさらされて些の休憩もなく登りつゞけたが、足の疲るゝと反比例に勾配は益々急となり、道に屈曲がなくなつて來たから登攀に一層困難を感じた。行けども／＼憩ふべき小屋は皆閉ぢてあつて、五合目邊では小屋の前に立止まり、強力に此の戸口を開く手段は無いかと圖つても見たが無益であつた。若し六合目に辿りついても小屋が鎖してあつたら、吾等も力を添へて戸を開くべしなど、出來さうもないことを云うて、亦喘ぎ／＼風と闘つて、やつとのこと六合目の小屋に辿りついた時に、歡喜を禁じ得なかつたのは、この小屋の入口は幸に開放してあつたからだ。中食場を發してから幾時間の後始めて休憩するのだから、眞に救はれたのである。

小屋に入つて見ると、爐が切つてあり、幸に多くの薪も積みかさねてあつた。何寄りの仕合せと先づ薪を焚いて暖を取り、室内を隈なく搜索して見ると寢具が二人前あつた。飲食物はと捜したが、梅干が一樽あるのみであつた。爰に食事を濟ましたが、風は益々威力を加へてますます勢である。強力の云ふには、此風で登ることは危険だから、今夜はこゝに泊るとしよう。明朝は多分風がなくなるだらうと勸めるので、疲勞と怖氣に満ちてゐる、吾等はその言ふにまかせて、こゝに泊ることになつたが、問題となつたのは食料が足るか否やの點にあつた。一日分の用意をして須走を發した食料が足る道理もなく、礮ひょうと當惑した。強力の云ふには、コンナ風で無ければ中食場まで降りて、食料を取つてくるが、此風では逆も降り兼ねるといふを聞いては愈々行き詰つた。已むなくば少し許り残つてゐる食物を明朝の用に向け、今夜は梅干でもかじつて我慢しようと言つたが、高山の中腹寒氣が猛烈であるから、設令ひ暖を取ることが出来ても晩食を廢し得るかは疑問であつた。兎角する内に戶外に人語が聞こえるので、此小屋の主でも来たのかと出て見ると、軍服を着けた二人が強力を伴うてゐた。彼等は海軍の士官で、吾等と同じく烈風と闘ひつゝ、登つて来たのである。先づ爐邊に座を與へて、何よりも先きに吾等

の間は食物の有無であつた。彼等の答は吾等をしていたく失望せしめた。彼等は一氣に山を上する豫定で、多く食物を携帯せず、それも既に盡きたと云ふのである。吾等にすら足らざる食物を預たねばならぬとあつては困つたものと苦慮する折柄、士官達は強力に食料を取り來る事は出来るかと交渉を始めた。強力は多分不可能と答へるだらうと吾等は豫期したが、幸に二人ならば提携して烈風でも食料を取つて來られようと言ふので、一同は大いに力を得た。無論中食場でそれを調へるのである。二組の客は錢を與へて飲食物を注文したが、士官達は特に燒酎二升の注文をした。彼等強力はやがて下山の途に就いたが、吾等の心が、りは、彼等が無事下山しても、風が一層烈しくなつて、爲めに戻つてくることが出来ないやうなことはあるまいか、その時は絶體絶命である、と一同不安に驅られた。幸に二人の強力は重いものを擔ぎながら小屋に戻つて來たので、始めて憂悶をひらき、小屋の内は俄かに陽氣になつた。士官は兩人共薩摩出身で、燒酎を沸かして飲む慣習があり、自分も勧められて飲んだが、山の寒氣は醉を打消して、いくら飲んでも酔心地にもなれないのに吾れながら驚いた。此夜は寢具が足らない所から、自分は寧ろかま榻を焚きながら爐邊に在る方を選び、横臥しても眠を得ず、早く夜は明け

た。

先づ天候如何と見るに、相變らず風は猛威を揮つてゐるので、早發を見合はせてゐると、無聊に堪へかねた士官達は、強力から此邊に兎がゐると聞き、それを狩るために戸外に出た。しばらくすると「トレタ〜」と叫んで一頭の兎を携へて來た。直ちに軍刀で肉を切り刺身のやうなものを作つたが、さて醬油などは一滴もないので、梅酢をつけて兎の酢物スエキは富士の名物で御座いというて戯れたのも一興であつた。漸く風が和らいだので一同登り出した。天氣はよいが濃霧は山頂を掩うてゐる。下界を見ると、白雲が足下を埋めて、群山が頭を露はしてゐる光景はさながら洋中に島を望むが如くで、高山に在つて始めて見るの奇景と感じた。殊に奇なるは、下界一杯の白雲が倏忽の間に消失して跡方もなくなると思ふと、亦いつしかもとの如くなる變幻の景に接しては崇高の感に堪へなかつた。六合目よりは勾配が益々急で、四人の客と二人の強力は相呼應して攀ぢた。昨日は三人であつたのに、けふは倍數であるから何となく心強く覺えた。やつとのこととで八合目に辿りつくと、此處の小屋が案外大きく、且つ戸も明けてあり、小屋の主もゐた。こゝは各方面から登る旅客の湊合する所だから、旅客を待つ設備が早く

届いてゐるのであらう。中をのぞくと、爐には大きな鐵鍋がかつてゐて、主人が其傍らに坐し、愛想よく吾等を迎へた。吾等は物言はず立入つて爐邊に足を投出し、先づ暖を取り、鍋を明けて見ると味噌汁が煮え立つてゐるのを見て溜らない程愉快を感じ、強力の擔つて來た残飯を全部これに投じ、怪しげな雜炊を作つた。さて食器と云へば、嘗て洗つたこともないやうな汚らしい椀の外は無かつたが、汚穢を厭ふ違もなく、さながら餓虎のごとく、幾椀も食つた。温食はこゝで始めてあるから、銘々痛快を叫んで、漸く元氣がついた。最早絶頂が近いと云ふので勢込んで更らに登つたが、これより絶頂までは愈々峻岨で、備さに登攀の艱を味つたが、さて漸く絶頂に達すると、濃霧が四閉して咫尺を辨せず、互ひ々の顔すらわからない位で、且つ積雪が尙ほ深く、所謂人穴などは捜ることも出来なかつた。

頂上の寒氣は一段激しく、須走の宿より借用の綿入では到底凌ぎかねてブルブル振ひ上つた。かねては下りは別路を取り、大宮口に下りる積であつたが、さうすると強力にも別れねばならず、綿入の衣類も返さねばならず、心細く感じた折柄、士官達もしきりに止めるので、豫定を變じて例の砂走スベシといふ砂路を下ることにした。この砂路は富嶽に奇とすべきもので、上から下

まで小石をも交へない砂ばかりの一條の道がある。これに踏み入ると砂は流れて、人はスキーに乗つたかの如く止めどもなく快速力で馳せる。前日の喘ぎく、一寸一尺と刻むやうに歩したのと較べると全くの反対で、眞に痛快である。案外と思つたのは草鞋の底が損する事で、幾足かを穿き替へた。砂路の兩側に草鞋の壘壁が築かれてあるのは此故であらう。二日を経て登つた山を僅かに一時間ほどで降るのであるから、氣温が刻々に異つて、中頃以下には暑氣を感じて綿入を脱ぎ棄て、終には襯衣一枚になり、流汗淋漓で麓に達した。

さて前日立寄つた旅館に着くと、多數の旅客は家前に立塞がつて、しきりに山中の事を聴きたがり、喧噪を極めるので、何故かと宿のものに糺して見ると、従來山に入つて二日も歸つて来ないと、およそ怪我のあつた事と判するのが例となつてゐる。實は貴客方の消息がわからないう内は危険と考へて、この多數の人達を引留めてあるのだと語つた。そこでわれくもその意を諒して、特に五六の總代を選ばしめて、それに對し可なり誇張して得意顔に山の嶮を語り、大勢より無事を祝されたのも一興であつた。われくは須走を發して三日目に歸つた。食料は中食場で辨じた爲めに、宿では食料が絶えたと速断したのも無理はなかつた。

二 淺間山跋涉の記

富嶽に登つた同じ旅中、吾等は東海道を過ぎ信州路に入り、佐久郡の小諸に一宿した。旅舎の窓を開くと、烟を噴きつゝある淺間の山が間近に見えるので、亦遊思が動き、翌朝登山と決した。旅舎で里程を聞くと山麓まで約三里、山の絶巔まで四里半に過ぎない。しかし山には危険が多いから、案内者を伴ふ必要があると云うた。吾等は富士に登つた餘勢で、コレ式の山に案内を要するものかと血氣の勇に驅られて案内なしに出かけた。

驛を左に折れて行くと、冥々たる曠原が眼前に展開された。これが所謂淺間の燒野で、田畝もなく樹木もなく、唯蕪草が徒らに叢生して殆んど道を辨じないので、終に道を失つた。しかし咫尺の間に見る山を目がけて行けば、自然に達するであらう、と草生を矢鱈に踏みわけて行くと、草間に去年刈り去つた萱などの株が潜んで足を噛み、少なからず悩まされた。山を望んで一直線に進み行くのだから最捷徑を取つたには相違ないが、案外に里程があり、炎天にさ

らされて大汗に濕ひ、やつとの事に山麓に達すると、これが所謂の臺山と呼ぶもので淺間の本山を抱擁してゐる。更らに小徑をたどつて行くと、左は絶壁百仞で、仰いで其の頂を見ず、右は幽谷で、水聲を聞けども水を見ることが出来ない。忽にして頭上に蔓々の聲を聞き、驚いてこれを避けると、その刹那巖石が墮ち來つた。初め拳のごとき小石が二三輾轉して下ると、他の石が附加して其勢を加へ、愈々下れば愈々勢を増し、遂に一大礮丸の如き大をなして墮ち來るので、觸る、もの皆碎け、其勢當る可からざるものがある。吾等は悚然たらざるを得なかつた。亦行くこと半里ばかり、淺間の本山は咫尺の間に現はれた。頭を擡げてこれを望むに、圓錐形の兀山で、童然草木なく、唯一條の窄路を存するのみだ。吾等は魂先づ飛び、一躍絶巔に至るべし、と勇を鼓して登ると、山路は羊腸百折で、磊々鑿々たる火石は頗る歩しにくく、尺を進めば半ば退くと云ふ鹽梅で、氣餒え體憊れ、幾んど僵れんとした。一里ばかりの道を十回も愁うて漸く山頂近くなると、烟雲人を襲うて腥臭の氣は鼻を撲ち、活火山の本性を現はして來た。絶巔には山身が縦横に摧折して巨坑をなし、烟を噴くものあり、噴かないものあり、其深さ幾千仞なるかを知らぬ。絶頂は案外平坦で且つ廣く、大火坑は目前に横はつてゐた。

登山の前には火坑に就ていろ／＼の想像を馳せ、旅舎からいろ／＼聽かされたが、小諸は山の附近でありながら實際に暗く、山には硫氣が充ち、火坑に近づけないとか、火坑の周圍には埒が構へてあるなど云うてゐたが、それは全く出鱈目で、硫氣は無いでもないが、堪へ難いほどでもなく、火坑は豁然として周圍に人造のものなどは何一つも無かつた。但し風の方向が吾等に面してゐたら噴烟を浴び、硫氣に咽んだかも知れんが、幸に風は逆であつたから噴烟も反對に流れた爲め、吾等は何の支障もなく、火坑に咫尺することが出來た。併し噴烟の盛んな時は坑中を覗いても暗黒で、何も辨じ兼ねた。然るに幸にこの噴烟は間歇的で、僅かの間收まることがある。その收まつた刹那に火坑を下瞰した折、偶々日光が差込んで、坑中に重疊してゐる山々に反射し、黄金の山と見まがふ美觀を呈したので快哉を禁じ得無かつた。坑中には硫氣が充塞し、重なり合ふ何の山でも硫氣に充ちてゐるから此の美觀を呈するのである。且くすると坑中幾千尺の底に、颯風の如き凄まじい聲が聞えると、間もなく噴烟が起つてくる。吾等は坑口に佇立して坑の周圍がどれほどあらうと案じたが、およその測定もつかなくかつた。私の郷人で大野某といふ劍客が、火坑に一夜宿した話を幼時聞かされたことを憶ひ起し、坑口を一周

して見ようかと企てたが、萬一過があつてはと自重して引返した。小諸の旅舎に歸着したのは午後四時であつた。

自分は大山に登る毎に良候を得ないのに、此日は天氣清朗で、能く活火山の狀を窮め得たのは仕合せであつた。

三 白雲金洞探檢の記

私は壯年の頃登山が道樂の一つであつた。東京から郷里へ歸省の途中、上州を経て松井田邊から妙義の山を望む毎に其奇勝に憧憬し、常に登攀を念とした。澤元愷の白雲金洞の游記を讀むに迫んで、一層游思を切にし、明治十三年の九月父を伴うて東上する時一僕をも従へてゐたから、此時こそ、と父を松井田の旅館に留め、僕を伴うて行を啓いた。

九月二十日の朝未明に旅裝して立出で、松井田の驛を西へ折れて行くと、茲に一帶の流がある。橋を渡り、十町ばかり行つたとき夜もやうやく明けわたつた。頭を擡げて彼方を望めば、

奇巖簇々直面して立ち、幸に好天氣であつたので、奇秀は畢く露はれ、えも云はれない景色であつた。唯上をのみ視てひた走りに覺えず十二三町行くと、はや妙義の町へ近いた。此處に一條の阪路があり、その窮まる處に大なる黒門がある。これぞ妙義の町の入口で、門内には人家三十數軒を見受けた。旅舎もあり、割烹店などもあつて絃歌の聲が聞こえ、意外の繁華に驚いた。町の北の方危磴の穹窿たる上に一大社がある。これが妙義神社で、磴を拾つて登ると、一大華表に白雲山の扁額が掲げてあつた。幼時太宰春臺の白雲山の詩を愛誦しながら、いづれの山とも辨へなかつたが、こゝに始めて此山のことと悟つて、興情はいやましにました。神社を拜して妙義の町に戻り、一旗亭に一酌して案内者を僦ひ、試みに何れの山が尤も風景に富むと尋ねると、巖石の幽怪なるは中ヶ岳に若くはないといふ。依つて其里程を問へば僅かに三里といふから、直ちに探討と決し、市街を西に折れて十四五町行くと、諸山が抱圍して、さながら釜中にあるが如き處に出た。つゞけて登り道で、殘暑の折柄無風であるのに困んだ。しかし景色は一步毎によくなくなつてくる。白雲山は屏障のやうに骨立し、左手には金鷄山、蠟燭岩と相對して劍立する。その光景の奇峭なるに疲れを忘れた。案内者は中ヶ岳はあの蠟燭岩の後方に當る

と指さしたのを便りに歩むと、此れより山路は半腸として一步は一步より高く、路は甚だ峻岨である。過ぎく一里ばかり行き、漸く中ヶ岳の麓に達した。この邊の巖石は紫色を帯び、皆凡ならざるを覺えた。尙ほ二三町許り行くと、圖らず一巨巖の屹然目を遮るものに會した。案内者は急に足を駐め、これぞ中ヶ岳四石門の第一門であると云うた。澤元愷が其游記に門にして山、山にして石、其高さ數百仞、垂天の雲の如く、兀然獨立するは此門也とあるが則ちこれである。私は此石門を夢寐の間に憧憬すること幾年の久しいものがある。さて今ぞ始めて戀人に遇つて却つて辭がなく、唯恍然たるのみであつた。斯くて亦麓に傍うて行くに、怪岩奇石鬱樹の間に出没し、巖壁の窮まるるところ、更らに石筍の空を凌いで直立するのを見た。此邊奇峭の景は到底描寫し難いものがある。此の巖下に宮司の住する一字の茅舎があつた。そこに入つて且らく憩ひ、これからの案内を此の家の人に頼まんといろ／＼言へども、よい返事をしない。主人らしいもの、いふには、今は茂つた草や藤蔓が道を塞いでゐて、それを伐り拂はねば通られぬ處がある、と斷り口上である。自分は兎も角も全山の圖を得たいと思つて求めると、今は揚つて無いと云ふ。それはどんなものか、版木を見せよ、と云ふと濫々出して來たのが、誰れ

の畫か解し兼ねたが、南畫風に書いた極めて大きな圖で、如何にも風致のある畫である。そこでどうかして欲しいと思つたが、揚つたのがないといふからは非もなく、唐紙一枚譲つてくれれば自分で揚るから、バレンを貸して貰ひたいと言ひ出した。主人も私の餘りに熱心であるのに少しく調子も變つて、唐紙半切を出して與へた。依つて不完全ながら匆卒一枚揚つて厚く禮を陳べ、若干の金を投じ、更らに案内を求めて、謝金は幾許出しても苦しくない。樹を切り拂ふに人手を要すとあらば、幾人でも傭うてもらひたい、と云ふと、始めて主人も本氣になり、一人の男に鎌や斧を持たせて、然らばとて先導した。

此家を出て右手の方へと進むに、但見る、巖石屏風の如く直立して登らんやうもなければ、たゞ一向に見上げるばかり。吾等は呆れ果て、あれは如何と進み兼ねるのを見て、案内者は微笑しつゝ、我々は今彼の絶頂まで登り行くのであるというた。案内者はやがてこの巖の左手に導いた。こゝに數百級の危磴がある。それを拾ひ盡せば、日本武尊の小社がある。それを左に折れて更らに登ると、怪石紛錯し、或は磐石の重々層をなすものあり、或は蒼蘚岩を封じて潤滑足を失し易い所がある。或は石もて橋をかけたごとき所がある。登ること五町ばかりで、眼

界が俄かに遼濶となつた。爰に佇立してあたりを顧みると、顛上に大なる巖石の屹立するものがあつた。これこそ先きに登るべくも思はれなかつた巨巖の上頭で、吾等はいつしか其頂點近く來たのであることを知つた。案内者は左方に見える山をさし、あれが中ヶ岳だといふを見ると、一山盡く骨ならざるなきが、屏風のやうに疊み重つて、其の一ときは高いのが即ち中ヶ岳であつた。乃ち澤元愷が山中の舊記に徴し金洞山と云つてゐるのがこれである。その後ろに當つて、渾身肥大、帽を戴いて微笑するかの如き巨巖が大黒岩で、南の方には絶崖屏立する中に春箏の如く直立するもの、半ば土に没するもの、鬱樹の間に僅かに其頭角をあらはすもの等、一々名状することを得ない。雲霧時に巖石の間に起つて動搖定まらず、或は片々として飛び、或は散じ或は合し、散ずれば天地瞬息の間に清明となり、聚れば天地一白となる。其の變幻は筆寫の及ぶ所でない。自分は低回去り兼ねたが、促されて又巖角を踏んで登ると、一大巨石の、斧もて劈きたらんがごとくに、怪しく二つに裂けたるがあつた。その裂け目は僅かに二尺ばかりで、石を累ねて登り得べきを表はしてある。これに登るの法は、先づ身を裂け目の一方の石に寄せ、他の一方の石に足を託し、漸次に身體をせりあけるのだ。これを鬼の鬚磨ヒゲスリと名づけて

ゐる。この石上は僅かに一疊敷程の廣さで、それに坐すると目も醒める許りに四面が快濶で、眼下は幾千仞の谷である。こゝより舊路を辿つて降つたところは正午に近かつたが、食事をする所もないから絶食と覺悟を定めて、案内者の導くがまゝ、先づ社の右手にある二見が浦といふを訪うた。こゝは秦莽篠蕩、晝猶ほ暗く、路もつばらにわけがたい處に、雙岩が相對して路に横はるを見た。一岩は大、一岩は小で、其状さながら伊勢の二見の雙石に酷似してゐるのも一奇である。總じてこの山の諸巖石のすべてが奇絶であるのは、造化がこの山に偏私して乾機坤秘を惜しけもなくフンダンにあらはしたかの如き趣がある。

更に本道に出で、右に折れ、第一石門を通るに、折しも夏の末で、蕪草茂つて道も定かにわかり難く、案内者の導くまゝに行けば、路は嶮惡で障礙物が多く、案内者は山刀を抜き放ち上に切り下に披いて行く。其状さながら戦地にあるが如くであつて、漸くにして第二門に至る。此石門は第一門に重なつて、其大きさも似てゐる。其洞穴は上廣く下狭く、股間を歩するの思がした。見おろせば數百仞の下に谷あり、鳥聲を幽かに聞くのみ。樹木鬱して何物も見えなかつた。此邊の道は頗る窄く、それが樹木に掩はれて暗い、そして潤滑であるので足を失しやすく、幾

度か心膽を震はした。かくて鳥道をたどり第三石門に達した。此石門は高さ第一二門に比し半ばにも及ばない。代りに横に廣く、穴も遼濶である。第四石門も第三門とや、似てゐる。各門の距離は四五町を隔てるに過ぎないが、幽谷を迂回するために案外遠く感じた。第四門を過ぎ、少しく登ると、眺望絶佳の處に出た。石に踞して憇ひつゝ、今經て來た所を望めば皆脚底にありて、一二の門は屏風の如く對立し、其前面に孤劍の空を削るごときものが大柱峯、屹然龜の如くに天半に半身を突き出し、背を晒すに似たものが龜石、飛樓の如きもの、城廓の如きもの、一々列擧に違が無い。

尙ほ細逕を小半時歩すると、道はや、急となり道幅は益々細くなつて、道の最極點に達した。其行詰つた所が此山の最も高い處で、そこに一大巨石が行路を塞いでゐる。其石は私の身長より二倍もあつて、石膚は平滑で中央がふくれてゐる。これを攀ぢらねば絶巔に行かれないのだが、さて足を託する所がない。登り損ずれば忽ち幾千尺の谿に墜ちるのだから悚然たらざるを得なかつた。従僕はこゝで縮み上がつて、腰を抜かしたやうになつた。案内者の云ふには、ここが山の最難所である。しかしこれを登らねば、山の最大奇勝を探つたとは云へぬと勵まし、

先づ身輕に石に足を寄せたと思ふと、早や石上に立ち手を差延べて、自分の手を取つて全身を引上げてくれた。従僕は畏れ戰いて石下にゝんで待つことゝなつた。此上が壁立の巖石の絶巔で、其幅が屏風の縁の如くに狭く、數千尺の高い處であるから、天風激しく到れば吹き飛ばされさうに想はれて怖氣がさした。しかし血氣の自分は勇を鼓して、先づ右方に突出した二坪もある平扁の石上に立つた。これが前に記した天半に懸つてゐる龜石である。私はこゝで膽試しに一二分の演説を試みた。それは山の奇勝に感じ山靈に謝するの詞であつた。左方が即ち屏風の縁同様細い危ない所であるが、如何にも平で、二三間を隔て、多少廣い處がある。これを橋に見立て、三橋と云うてゐる。此三橋を渡ると、行詰つた所に洞穴のある巨巖が遮つてゐる。それが所謂胎内潜りで、匍匐して潜り抜けると舊路に復し得るのも一奇である。如何にもここは神秘に屬する所である。三橋を渡りながら、切つたてになつてゐる下を瞰ると、覺えず心膽を寒からしめ、久しく止まることが出來ず、匆々に例の石を下つて歸路に就いた。時は既に午後の三時頃で、午飯を取らない吾等は流石に空腹を感じた處へ、宮司の妻女が氣を利かせ、重箱に握飯と漬物を入れ、路傍に待受けてゐたので救はれた。

四 白帝城と木曾川の奇勝

徳川家康の重臣成瀬隼人^{ハイトノカミ}正の居城、犬山城の在る、犬山を中心とした木曾川の上流下流は、奇勝の名區として早くから喧傳し、今は日本八勝の内へ入選してゐる。私は木曾川とは古い馴染で、四十餘年前の書生時代には、膝栗毛で木曾街道を踏破し、毎日此川に沿うて歩し、飽き飽きするほど此川に應接したが、この名區だけが漏れた。多分山靈水伯は幼穉な吾等の眼に入るを吝んだのであらう。幸ひ昨秋の關西旅行はこの名區を探るの機會を得た。今は名古屋市の柳橋を起點として電車が開け、一時間で犬山に達することが出来る。偶々此電鐵會社の社長上遠野氏は吾等の友人で、觀賞には種々の便利があり、二三の社員が東道の勞を執られ、五六の校友と四五の校書も一行に加つた。柳橋驛を發したのは午後の二時で、枇杷島、西春、岩倉、石佛、布袋、柏森等の停車場を経て、犬山口に達するのである。白帝城だけを遊覽するには、犬山口に下車し、十數町自動車で行けば城下に達する。併し、川の勝區は其上流にあるので、

それを觀賞しつゝ、流を下つて城下に達せんには犬山口で電車を乗換へ、更らに富岡前、善師野、愛岐、帷子、春星の諸驛を経て今湊まで行かねばならぬ。此間約二十五分。今湊と前岸の太田の庄との間には鐵橋が架してある。この太田の庄は友人坪内逍遙氏の先代が代官をつとめた處で、毎々坪内氏から聞いてゐるが、その地に咫尺するのはこれが始めである。大正八年坪内氏が久方振りにこゝを訪うたときには、代官所の遺址は既に桑田に變じて尋ねるに由なかつたと聞いたが、その際案内に頼んだ、老農夫の素姓を尋ねて見ると、それが氏の腕白時代の遊び友達であつたことが分り、氏は今昔の感に打たれたと云ふ話を憶ひ起した。一寸行つて見たいと思つたが、豫定の時間を變ずることが出来ず、終にその地を踏むことが出来なかつた。一行は川に臨んでゐる北陽館といふ大旅館に入り、樓上より先づ溪流を望んで勝槩の一斑を見た。こゝは流の屈曲の處で、水の多い時は氾濫して樓を侵すと聞いた。この旅館より二隻の游船を僦ひ、流に従ひ三里白帝城下に下る。ひそめられた奇勝は乃ち此間にあるのだ。旅館に休憩中、主人の需め辭しかねて、倉皇拙毫を揮ひ、絶勝の二字を書して責を塞ぎ、時を惜んで一行と共に直ちに船に入つた。船は館下に用意してあつたが、乗船の處が既に絶勝區の一端である。左

方には仰ぎ見る巖山が壁立し、怪巖奇石は水中に出没して、景色は凡庸でなく、先づ吾が意を得た。流は矢のごとく早く、篙を勞せずして船は下る。二隻の船は校書と酒を載せ、時に兩船を繋ぎ、時には兩船を分つた。兩船を分つ時は水中の暗礁を避ける時で、篙師は秘術をこゝに盡すのである。船底が暗礁に觸る、時は氣味のわるい聲を發し、激浪の飛沫は船に入つて、人をして手に汗を握らしめた。私はこゝに於て保津川を聯想せざるを得なかつた。水中に暗礁の多いこと、随つて船の構造皆保津川と似てゐる。併し似ないものもある。彼れに在りては地境が狭く、兩岸山に包まれて景物が陰鬱であり、此れに在りては一方が開けて快濶である。彼れにも怪巖奇石あれども、此れに於てはその規模一層雄大で、往々屏風の狀をなして駢列するものがある。總じて保津の景は單調であるが、これに於ては複雑である。石門、飛瀑、佛閣などは彼れに無くして此れに在つて、景色に光彩を添へてゐる。若し優劣を論ずるならば、私は寧ろこれを優れりとしよう。船中河風が寒く、溫酒をしきりに傾けたが、醉を覺えなかつた。船矢のごとく駛せ、さながら畫圖の中に在るが如く、眞に應接の遑が無かつた。一二勝槩の處を擧げれば、飛瀑には乙女が瀧あり、瀨には觀音の瀨あり、灣に赤岩灣あり、佛閣に岩谷觀音

あり、新赤壁と稱する處などは流石に風致がある。奇巖怪石其狀により様々の名あれども一々録するの遑がない。此仙寰には、山に猿猴の縦横に駢け回るあり、樹に怪鳥の奇聲を放つあり、皆塵外のものである。一時間餘でまだ興の盡きざるに、船は早く白帝城を見るの地點に達した。城は川に臨んで、高く崖上に天主閣をあらはし、崖下に一山の富士形を爲すものを望む。所謂夕暮富士と呼ぶのがこれである。川を横斷して鐵橋が通じ、城の山下に會社の經營に係る彩雲閣がある。皆風景を彩るものであるが、就中孤城山に憑り、巍然河に臨むの景は眞に絶勝である。獨逸のライン河にも古城址の水に臨むものがあり、風趣が似てゐるといふので、志賀矧川はこの勝區に日本ラインの名を命じ、それからは自然此名を以て呼んでゐるけれども、私は斯様な名で呼びたくない。第一、川の性質がラインと異なつて、彼れには奇巖怪石がない。矧川は上流の奇勝を探らず、單に古城址の存する風趣の似寄りを見て輕率名を命じたので、甚だ不倫である。私はラインに優る幾等の、あたらし勝區を、膝を西洋に屈してその名に擬ふ、不見識を一蹴し去らんとする。犬山城を支那の白帝城に擬するのも、考へものであるけれども、強ち妥當を缺いたとも思へないから、且らくそれを可とせん。私は閣筆に追ひ、此神秘的でサブ

リミテーに富んでゐる境に臨み、萬が一をも形容する筆を有たぬことを恥ぢる。老杜が白帝城最高樓の詩に「峽坼雲龍虎臥、江清日抱龜鼉遊」と云ふ熟知の句がある。それを幾回か誦して、此の句を藉り來らば、幾許か勝槩を髣髴し得ようかなど、坐ろに思ひ、又雄渾沈鬱の景は老杜の詩そのもの、如くであるとも感じた。此日、一行は彩雲閣に宿したが、私は小山松壽氏と共に晩間名古屋へと歸途を急いだ。

五十和田湖と溪流美

私が青森秋田を漫遊したのは、四年前の眞夏であつた。此行、兩縣に跨る十和田湖の勝を探らんとするのが、目的の一つであつた。私は先づ東北線の古間木驛から、支線の十和田鐵道に乗り換へ、三本木町で下車し、焼山から奥入瀬川に沿うて湖畔の子の口に達する間を三里、自動車で通過した。此間の溪流が眞に天下無雙とも云ふべき奇勝である。此日は生憎雨が降つて觀望には甚だ不便であつたが、車の幌を拂つて雨を浴びながら賞覽した。

此溪流奥入瀬川は湖水に源を發して逶迤帶の如く、十餘里流れて太平洋に注ぐのであるが、もとは此溪流の通ずる所皆風致があつたと云はれるが、度々洪水があつた爲めに何物も押し流され凡溪となり了つた。其原因は、近年製材所が設けられ、伐木が盛んである爲めと分つた。併し幸ひに焼山から少しく進むと、山林が深くして斧斤の入らない爲めに、洪水の難を免かれ、舊態を維持してゐる。そしてその勝區は實に三里に亙つてゐる。

先づ此の勝區を總説すると、極めて陰鬱な境に在る。左右山が迫つて、曾て斧斤の入らない森林は天を翳して日光を遮り、積翠の間を水が縦横に走つてゐる。溪は淺く水は清く、道路と平行してゐる趣は全く鹽原邊とは異つて、彼れが如く、深く崖の落込み、下に水を見るやうな處は無い。少しく水が膨張すれば道路を侵すであらうと思はれるほどであるのに、さること無いのは、森林の深い故であらう。殆んど道を侵さんばかりに水の亂れ流る、状態は此溪の特徵で、趣味もこゝに在ると思はれた。

湖面と此の溪流とは相當に勾配があつて湍を爲す所が甚だ多い。そしてその緩なる所は水が淙々の聲を發して落ち、其急なる所は雷聲を發して飛沫が四方に飛ぶ。總じて水路に巖石が

多く、水の自由に流るゝを許さないもので、盤桓して右に左に亂れ流るゝのが多い。殊に奇なるは、水中の巖石がさながら小島嶼の如く、苔むして樹木を被つてゐるのが少なからざることである。此等が或は疎に、或は群をなしてゐる。是も畢竟洪水を知らざる一徴であらう。飛瀑も沿道に數多く、高さ二三十丈に及ぶもあり、一所に大小四瀑を見る所もあつて、目は非常の多忙であつた。尙ほ私の目を怡ばしめたものは、老樹の枝が高く垂下して溪流に浸つてゐるさまで、何とも云へぬ幽致のあるには激賞を禁じ得なかつた。實に一路の溪流は一幅の名畫で、巨手を齧ひ來らなければ、寫し難い妙がある。近來自動車を通ずる爲め四五の橋を架したのは神秘の區に人臭い味を加へたと云へるが、見方によつてはそれが却つて風致を助けてゐる。概して此境が自然のまゝに委し去られ、且つ風景に甚だ變化の多いのは此溪の特徴で、耶馬溪などの遠く及ぶ所でない。

時間が許さば靜かに箒を曳いて十分風景を玩賞し、或はレンズの中に絶佳の處を收むべきであつたが、何分にも湖水に達するには日が暮れるといふので、自動車を急がせねばならなかつたのは遺憾であつた。すべて谿谷の鬱林中は、眞夏であるのに、空氣は秋の末の如く冷かで、

かて、加へて雨さへ降るので一段の寒氣を添へ、燒山の旅館から綿入のドテラを借りて着用してゐても、身體は顫へるほどであつたが、飽かぬ眺めは吾等をして寒さを全く忘れしめた。

車は疾走して、漸く湖畔近くなり、こゝに激湍の尤も大なるものを見た。これが子の口の瀧で、湖より溢れた水が河床の斷壁より落下するのであるが、こゝは溢れた全水の集注する所で、最も壯觀を呈してゐる。此激湍を見て間もなく溪は盡き、陰鬱の境は一變して快濶の天地となり、鏡の如き大湖を望んだ。これぞ十和田湖で、その湖畔は子の口村である。

湖畔に自動車の着いた時は日は既に暮れた。幸に宿るべき旅館から船が差し回されてゐたから、湖畔の茶屋には立寄り直ちに乗船した。船には酒食の用意もあつたから、寒さ凌ぎに一杯を傾けながら、ほの闇い湖を渡りつゝ、夜山夜水を賞したのは一興であつた。自分は幾回か山湖を涉つた經驗を有してゐるが、夜中に渡るのはこれが始めて、海拔一千尺の山湖の夜景には頗る趣味を感じた。私共は湖水の探勝を明日に譲り、船中では頻りに酒を貪り、前刻經過した溪流美に就いて私は云うた。十和田湖を激賞する人はいくらもあるが、溪流美は兎もすると閑却さるゝ。併し、あれを閑却しては十和田湖の奇勝の一半を失ふのである。恐らくあの溪流も